

總計

金五百八拾五兩壹步三朱

○付札
本行五十三人にハ金札迄ニ而軍服不被渡下段口達ニ相
成候事

四月某日長岡護美我藩重臣等か職祿辭退の請願に對し己れ上京して藩主に報告し其指示あるま
て采地職掌舊に據り政務に澁滞なからしむへしとの意を諭す

〔明治二三年
鶴崎取遣〕

武家權ヲ執リ 皇朝虛器ヲ抱キシコト百有餘年名分條理地ヲ拂フニ至リシニ 今般皇政維新之時ニ膺リ人心ノ染習初
テ一洗シ薩長肥土版籍ヲ返シ奉リ於御當藩茂版籍御返上ニ相成難有御趣意之旨孰れ茂深ク體認シ奉リ厚キ申出之趣致
感心候今度版籍御返上ニ相成候上ハ御一家之政府と心得候様も無之政體ノ御規則人才ノ登庸等屹度御一新 朝旨貫徹
不致候而者難相成付而ハ拙者迅速ニ上京致し候事ニ付孰レ茂申上之趣等御兩殿ニ申上候ハ、必被仰出之旨茂可被爲在
候間夫迄之處職掌采地共是迄之通相心得早々出仕致シ今日之御政務無滞様可致勵精候也

四月

左 京 亮 様

御 名

四月九日本藩々費多端にして財政不足を生せしを以て諸事非常の緊肅を計り且つ新規の事業は
一切停止する旨を達す

〔明治二三年觸狀控〕

一 布告左之通

近年非常之御出方打續當時地旅御不足高七拾六萬兩餘ニおよひ既御公務筋も御差支ニ相成候付諸間御米を茂御引上ケ
ニ相成候而茂莫太之御不足ニ付此上者非常之御差略被仰付候外御差操之道茂無之よつて差之通

一 御國中官宅御作事洩留外暫被差止候

一 御軍備筋者方今之急務ニ而候へ共眼前御公務御差支程之折柄ニ付御軍備筋諸御買上物等別段之事柄之各別其餘御買上
物之儀之先當分被差止候尤演武場日々之積古差支無之丈々者別段之御差操有之筈候

一 何事ニよらず新規之御出方一切御疊被仰付候

右之通被仰付候此段御家來中末々至迄知せ置候様可及達旨候條左様御心得御同役ニ御通達御組々にも可被成御達候
以上

四月九日

月 番

御 備 頭 當

右ニ付支配方帳口々々に及達ニ丸支配頭にも及通達候事

四月九日先きに青森を發したる官軍北海道乙部に上陸し賊兵を追撃して江差を占領す

〔明治元年正月ヨリ十一月マデ
一新録 探索報告〕

從江差奉啓上候然者去ル五日青森より申上候通翌六日先鋒五百人軍艦且運用船乗り組同港出帆天氣不良ニ付同八日迄
平館に碇泊同九日松前領乙部村より揚陸之處意外ニ都合宜賊徒も一時ニ逃去異人貳三人兵隊二百五 同夕江差も無難ニ乘
り取り今日之處者江差ニ本陣を居へ三口より箱館に攻入之手都合ニ而海邊松前口ニ江良村迄里余 木古内山道ハ先籠小
屋邊迄七八市ノ渡 越山道之木間内村邊まで六七 進軍海邊ハ昨夜方戦争相始り居候趣未々確報不來候間勝敗之相分不申
候木古内市ノ渡兩山道茂昨日報知之趣ニ而之今日方進撃大戰争可有之と相考居申候右兩道ハ十里餘茂人家無之處ニ而
第一困窮之小荷駄之一事ニ而苦心此事ニ御座候且昨日木古内市ノ渡兩道ニ而賊之間諜生捕候處當地に罷在なる異人に

明治 二 年

七三七

榎本松平大鳥三人遺候書狀ヲ所持ムシ居候右書面ニ而之愈箱館者十分防禦及相整候様ニ相聞とても江差同様も路くハ平定仕間敷奉推察候其他格別相異り申儀も無御座多用卒爾ニ相認申候間要件迄紳略奉言上候謹言

四月十二日

御 父 上 様

〔編者曰江差白領の事につきては四月十五日總督府參謀太田黒亥和太の書翰に添附せる野田大藏森清藏より太田黒亥和太黒田了世宛報告書を参照すべし〕

〔防長回天史第六編下〕

〔第二次ノ箱館戦争上抄略〕

初メ官軍將ニ五日早天ヲ以テ發航セントス風濤ノ爲メ延テ六日トナス六日山田市之允海陸軍ヲ率キ青森ヲ發ス風濤可ナラズ平館ニ一時寄港シ八日午前乙部村海岸ニ着ス(中略)

九日官軍ノ乙部ニ上陸スルヤ賊兵三十餘人山上ヨリ砲發ス先登ノ松前兵撃テ之ヲ走ラス是ニ於テ官軍部署ニ從ヒ松前口ハ途中ノ賊ヲ掃蕩シ江差ニ向フ江差屯集ノ賊兵約二百混セリ先ヅ走ル同日午後官軍江差ヲ占領シ先鋒兵五勝手村ニ至ル江差ヨリ同日諸艦海岸諸砲臺ヲ砲撃シテ陸上ノ軍ヲ應援ス二股口亦官軍鶴村ニ入ル山田ハ同日野田大藏森清藏ヲ

〔幕末實戰史〕

大鳥奎介述 官軍々艦八隻追々青森港へ着し、同所へ昨年来聚屯の長州兵、福山、伊州、備前、筑前の兵、並に津輕、松前、大野其の他の人數二千餘人右軍艦へ乗込み、日本船に人足等を乗組ませ、四月九日江差より一里許り北なる乙部村と云へる所へ上陸す、江差出張の松岡隊軍艦の廻りし報告に不取敢兵を乙部に出し之を防ぎたれども、敵は大勢の上軍艦の應援あり、身方は小勢にて廣き海岸を守りし事なれば勢敵せず、暫時防戦の上江差に引揚げらるに、又軍艦より烈しく砲發せられ江差より海岸通りを松前に引揚げたり

〔石寺家文書〕

記箱館戦争概略

四月九日、諸軍進向江差、和泉兵逆拒之、開陽回天之戰艦、爭先互進鏖突、適開陽艦獨計入、官軍疾撃覆之、和泉兵不利、初和泉等嚴箱館之守禦、四境防備頗疎是以官軍得驟入

四月十日金札の下落を戒め且つ其融通を奨めらる

〔江戸京都來狀扣〕

四月十日三藩より差廻來ル

即今内外莫太之御失費相重人民困窮ニ及候付金札御施行相成一般融通爲致上下之疲弊御救助可相成 御趣意ニ候處近格外下落人民窮迫ニ立到候儀之畢竟五官府藩縣とも心得違之者有之拜借金月給等兩替屋ニ於て正金ニ引換遣拂候ハ大ニ下々疑惑を生し正金之日々引上ケ金札ハ日々下落し正金金札共不融通を醸シ候次第ニ而遂ニ下々産業を取失候様可立到別而金札御施行之 御主意ニ茂相戻り以之外之事ニ候就而之五官府藩縣厚ク 御主意を奉戴し惣而金札を以遣拂候様可致以後不心得之所業於有之之屹々可被及 御沙汰事右之通被 仰出候間府藩縣各自治下に厚教諭を加人心疑惑不致廣ク融通候様精々可致盡力事

四月

行 政 官

金札之儀之世上融通之 御趣意ニ而御發行相成下々ニおゐて通用便利之爲天然相場を以取引可致旨相達候後猶取引之儀ニ付心得違之筋無之様度々相觸候趣も有之候處普ク 御趣意之程相辨不申候哉諸品賣買之儀ニ付而之未々通用方差滞候向茂有之趣畢竟下々於而之正金を募候人氣ニ成行世上通用之御趣意を取失ひ候よ小商人共賣買取引等差滞難避之庶茂有之趣相聞可憐事ニ而夫か爲東京之勿論京都大阪其他國々融通方ニ茂差響候筋ニ付已來諸色仕切賣買共金札立

明治 二 年

七三九

相場を以取引致シ正金を以仕切賣捌共不致様可心掛候諸色並合取調聊宛之高下相立候之當分之内無餘儀筋ニ候得共萬一奸商共中合不相當之物價取仕組候様相聞候節之夫々吟味之上相當之咎可申付段心得違之儀無之様可致旨御沙汰ニ候事

四月

行 政 官

四月十日四國十三藩の使臣讃州丸龜に會合し相互情を通し一致協力して國家に盡さむことを謀る毎月十日の日を以て會議定日とし後會議所を琴平に移す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄 新録探索報告〕

讃州琴陵集會之趣意書寫

福田

己巳八月初旬

患ヒ内ニ在ハ守リ各藩ニアルモ可也患ヒ外ニアレハ是ヲ防ク全國ニアリ今ヤ外國ノ勢日猖獗ニシテ駭々乎殆ント制スヘカラスは大患外ニ在ナリ然レハ六十州一家トナリ相與ニ協心戮力私ヲ去テ公ニ就キ左右ノ手ノ相救フ如ナラサレハ何ヲ以折衝禦侮スヘケンヤ夫レ身藩屏ノ職ニ居リ列聖ノ鴻澤ニ浴シナカラ大患前ニ在リ國歩多難而各藩相顧テ手ヲ袖ニシテ曾テ決然力ヲ王事ニ致ス能ハスンバ其藩屏ノ職ヲ如何セン是ヲ要スルニ各藩豈異心アラシヤ其弊相疑慮スルニアルノミ其奮前身ヲ以テ天下ニ先タツ能ハサル所ナリ然ユエノモノハ蓋各藩ノ國情相通セサル故ニ弊邑ノ意一ノ會議所ヲ設ケ彼外内之利害彼是ノ得失及都鄙上下ノ情狀悉クソノ詳ヲ此ニ得ンヲ欲スルノミ夫レ事アレハ必相聞シ議アレバ相圖リ動靜必相通知シ然後ニ協心戮力内ハ以テ 天朝ニ奉スヘク外ハ以テ外患ヲ防ヘシ願ニ四隣ノ境ヲ接スルヤ其相遠ル者近ハ十數里遠キ者ハ二三十里尋常使人往來ノ能ク盡ス可ニ非ス是弊邑ノ會議所ヲ設ル以所ノ意也然ルニ聞者或曰ン 天朝ノ令諸侯私ニ盟誓ヲ立ルヲ得ス會議ノ設ケソノ嫌ヒナキヲ得ンヤは大ニ然ラス何トナレハ是會議也

盟誓ニ非ルナリ即今上國三藩會或四國會ト稱スル如キ亦是也抑聞言ハ入易ク人ノ言モ亦恐ル可シ故ニ弊邑豫メ是ヲ以兩輔相ノ闕下ニ達セリ則世ノ人言モ亦畏ル可キナシソレ六十州一家トナリ全國相維持スルハ弊邑ノ願也而其能ス可ニ非ス今且四國一家信義源然凡ソ事皆至公ニ出テ彼此情ヲ通シ内外ノ變ニ應センニハ他日近ヨリ遠ニ及亦此ニ在ランカ只冀クハ同志ノ君子コノ意ヲ諒センコトヲ

右土州ノ告知列藩同意則四月十日ヲ期シテ圓龜ニ會ス其後琴陵ニ會議所ヲ移ス十ノ日ヲ以テ會議定日ト究ム

〔全書〕

金蔭會議所規則

- 一各藩御交際稱呼之總而從前御兩敬之舊例ニ效ヒ可申事
- 一夫ニ朝權ヲ張リ國政ヲ維持スルヲ以テ今日ノ方向目的トすヘシ
- 一當今會議所ニ而議事ノ模様ニ寄 天朝ヘ伺等總而月幹番ニ而 天裁ヲ受ケ然後御各藩ニ通達之事
- 一藩々政事ノ大幹ニ關係する事ハ成丈會議所ヘ持出公議ヲ取之事
- 會議所出張之人ハ藩々政府關係愛國之上人撰之事
- 右之昨年來當會議所相立候處未至實効依而各藩ニ於而今一際憤發盡力仕屹度實効相立自然朝廷御補翼之一端共相成可申テ決議相成候事

六月

〔編者曰、右規則は明治三年六月に制定せしものなれとも琴陵會の目的事業等を知るに便なる故に此に附記す〕

〔全書〕

琴陵集會姓名
琴陵集會所ニ出方之姓名

徳島

橋本 辨之 助
森 信 衛

明治 二 年

七四一

高知 (高屋左兵衛 守太郎)
 松山 (河原權之進 門進)
 高松 (竹井新三郎 衛)
 大洲 (武田榮五郎 助郎)
 西條 (鷺見勝之助 助郎)
 今治 (高濱佐七郎 一人を欠)

丸龜 (木村正一 助郎)
 多渡津 (野口伊三 助)
 新谷 (寺井七兵衛 衛)
 小松 (黒川武夫 今一人を欠)
 宇和島 (田手次太夫 今村隼之進)
 吉田 (高橋清蔵)

已五月淀舟蓬窓下ニ而高橋清蔵より承候

〔宇野家文書〕

(松山市伊豫史談會幹事西園寺源透氏所報概略)
 (前略)四國十三藩會議終始御推問の件了承候早速心當りの文書即ち神山縣記、石鏡縣記、愛媛縣史稿、伊豫史精義、土佐史要、宇和島維新史料等涉獵候も見當り不申茲ニ要領を得たる御答を爲す能はざるハ遺憾目取入候次第ニ御座候併し土佐史談會及今治史談會等へ問合置候條相分り候ハ、御報可申上候(中略)
 右老生の記憶(おぼろげながら)及見聞候事ども左ニ御参考ニ供し候
 一、伊豫ニテハ本件を琴陵會議と稱へ候様記憶致候
 二、琴陵會議の事ハ宇和島藩廳日誌吉田藩廳日誌伊達家文書等の内ニテ一見候様存候も是等の書籍手元ニ無之候ニ付他日機を得てあさり置可申候
 三、金陵會議ハ土佐藩の提議ニより宇和島藩先づ之ニ應し他の十一藩之を賛し成立したるものと想像いたし候

四、開始ハ明治二年正月ニ解散ハ明治三年十月ならんかと想像いたし候
 五、今治海蔵寺?に今治藩上池田忠古の墓あり其文中ニ四州十三藩會議のため琴平に派遣せられ明治三年九月二十日同地に於て自及し共同行者たる玉井八彌ハ藩歸後自殺云々と有之自殺の原因不明なるも之が弊害を認められたるものニして解散の動機となりたるものと存候故ニ解散ハ三年十月比と想像したる次第ニ候
 右不取敢御答申上度如此御座候餘情後郵に譲り申候

二月念二(大正十)

西園寺富水

宇野東風殿

研北

向々御地ニ於て伊與史に關するもの有之候ハ、御垂示希上候

第二信

三月四日付の芳書拜見仕候(中略)鶴崎毛利家文書并金陵會議所規則御示し被下辱く奉存候彼是對照大に發明する所有之候

其後明治二年宇和島藩廳日誌涉獵候處當該事件見當り申候ニ付左ニ要領御報申上候

一明治二年三月廿七日晴土州より使者到來片岡健吉高屋友右衛門林勝兵衛本山只一郎谷守部連署の書狀及意趣書持參(原註、二文略意)是ヨリ先(二月)土州藩士二人來り監察會見應答ス、當方より監察不破忠次郎外加藤虎一郎(原註、備者)川名謙藏ヲ遣ス、然ル後今回ノ使者來ル云々

(取意)

一來狀ノ要旨ハ過日兩生派遣及御協議候處各藩異議なきニ付來ル四月十日を期し丸龜ニ集合示談致度云々
 一依て宇和島ハ之ニ同意シ田手次郎太夫、鈴木震吉、須藤但馬、河原治左衛門(原註、告森桑園ト)上原郷助、山下清記、

土居兵衛等ヲ派遣被命一二回ニ出張シタルモノト見ユ、併シ〇印ハ出派シタルニ相違ナキモ無印ハ命令ノミニテ出否
詳カナラズ、而シテ出張シタルモ四月十日ニハ參會セズ後レタルモノ、如シ、ソレハ藩公ガ函館出兵不能ノタメ謹慎
ヲ命セラレタル場合ニ付右謹慎ガトケテ行キタルナリ、其事ハ吉田藩へ照會シタル記事ニアリ

一明治二年六月十七日迄ハ右ニ關スル記事斷續シツ、アルモ其後十二月迄ハ何等ノ記ナシ
之ヲ要するに土州藩ガ四國會議ヲ考案したるハ二年正月らしく之を決して始めて宇和島藩へ交渉したるハ二月とおぼ
しく會議を四月十日と決定して正式に通知したるハ三月二十七日にて候、而して會議ノ開始ハ四月十日九龍にて開き
たるものと存候故ニ最初ハ九龍會議とも申候由ニ候明治三年某月ニ至リ琴平ニ會場を移し是より金陵會議と名づけ御
來示の規則をも協定したるものと存候云々

尙明治三年の藩廳日誌をあさり候ハ、顧末詳悉可致と存候も未だ之を見る事を得ず遺憾ニ奉存候(中略)池上忠古の子
ニ照會したるも事情不相分候土佐史談會へ照會したるに對してハ會議ニ參列したる者の子孫残り居候ニ付承合追て回
答可致と申來候

右御挨拶旁得貴意度如斯ニ御座候頓首

三月五日夜(大正十
四年)

富 水 生

宇 野 大 人

侍 史

(編者曰、西園寺富水氏第二信に明治三年某月に至リ琴平に會場を移し是より金陵會議と名づけ云々とあれとも本書(五月に既に
琴陵集會所とあるを見れば明治二年四月十日に九龍にて發會式を行ひ翌五月には會場を琴平に移したると思はるゝなり)

〔隈山詒謀録〕

余と片岡(健)は東京を發し(明治三年)七月廿七日土佐に着せり(四國會議所を琴平に設けし主旨は前に述し如くなりし人撰

其の人を得ず各藩人相會日々酒色に金錢を浪費し國家の事に於て何の得る所も無く大に目的を誤りたれば政費節減の
手始として此會を解散することを東京にて板垣(退)初め論したれば孰れも同意なりしを以て余は片岡と共歸途金比羅
に立寄り四國諸藩の代表者に面會して解散するを發議せり然るに議論紛々として一致する能はず遂に余等兩人は弊藩
は議已に決せるを以代表者を引き取ら令むべしと切言し破談にて別れ歸國し次て歸國を命令せり(余とは谷干城にて片
又(重書)は著者の挿入にて
(單書)は編者の挿入なり)

四月十一日日本藩世子護久病氣の爲め請暇の内願書を岩倉具視に呈出す

〔御在京御在府御在國共御記録、若殿様御上京一卷〕

岩倉大納言様は

私儀兼々脚氣之症ニ而難儀仕居候處當春上京後者水土不相應之故職逐日前症差募種々療養仕候得共兎角相勝不申候付
先日下阪仕蘭醫ホートインニ診察相頼候處温泉に二三ヶ月程茂入湯仕候ハ、乾効驗可有御座段申聞候間何卒日數百日
程賜御暇領内温泉に湯治仕度奉願候尤國許着之上者爲名代長岡左京亮差登候様可仕候以上

四月十一日

細 川 侍 從

辨 事

御 中

翌十二日如左以御付札御渡

御留守中容易ニ御暇賜候儀ニハ無之候得共病氣無餘義次第ニ付願之通被 仰付候間歸國之上之早々長岡左京亮上京
候様可致事

四月某日長崎府知事澤宣嘉參與に轉し長崎を發して上京す

明 治 二 年

七四五

〔京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

澤右衛門權介様御儀近々當番御發足ニ付別紙之通達來候間寫差上申候右ニ付而之御散使者等之御手数も可有御座と相考申候得共明後十一日頃之御模様ニ御座候得之迎も御間ニ合兼申候間筋々可然被成御達可被下候此段御達仕候以上
四月九日
高津運記
志摩呈助

嘉悦市之進殿

御達寫

知府先般御用ニ付御上京之處當府知事被免參與職に被轉候付當地御發足之筈ニ候條一統爲心得相達候事
右之趣諸役人を初市中郷中にも不洩様可相觸候

己四月

四月十二日本藩世子護久京都を發して歸藩の途に就く

〔明治諸 扣〕

四月十二日

一若殿様益御機嫌能今夕八時半過被遊御發駕候事

四月十二日本藩京都警衛兵の不足につき東京へ行役すへき兵を以て臨時補充す

〔御在京御在府御在國共御記録、明治二年王政日新録熊本縣廳所藏〕

軍務官御役所に
御留守中御警衛として精兵四百人差出候様御達ニ付追
々隊長司令士等三百二十六人差出候處右不足分未々國許を着京不仕依而東京詰として罷登候兵隊之内より先

左之通差出申候

隊長

金津次郎右衛門

金守彦十郎

副隊長

鹽山 駿三郎

小崎次郎左衛門

司令士

四月十二日

成田清右衛門

細川中將公用人

吉田二郎左衛門

志水權左衛門

上田新兵衛

澤 彌門

一六十六人

右之段御届申上候以上

兵隊橋道神官
太勝手共

四月十三日本藩竹内才記を軍務官に出仕せしむへき旨の令達あり

〔明治二年王政日新録熊本縣廳所藏、明治諸控〕

〔四月十三日軍務官に召喚中根五位より井口三郎に授しの書付〕

其藩竹内才記當分兵庫出張軍務官エ出仕申付候間此旨相達候事

四月

細川 越中守
軍 務 官

四月十五日青森總督府參謀大田黒亥和太北海道の戦況を我藩奉行に報告す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月マテ
一〕新録 探索報告〕

江刺出張野田大藏より別紙之通申來候間則入御覽候其後官軍増々勝ニ乘り餘り敵を侮り十一日夜賊より夜襲官軍死傷五十餘人私儀右報告ニ因り大軍を以直チニ松前城ニ相迫り候筈ニ御座候唯今出軍船場より右迄申上候以上

明治二年

七四七

四月十五日

御奉行 衆 中

昨八日十字各艦平館ヲ發シ今九日八字過乙部村沖に着直ニ陸兵揚陸之處乙部村山上より賊兵三十人餘顯々出先登之松前兵ト少シク及炮戰候處暫時シテ賊徒逃去官兵次第ニ追撃之處意外ニ賊徒敗走無難今六字江差モ乗取り松前口先鋒之五勝手村迄相進アスザプロ先鋒も同様餘程進撃之趣兩口共官兵大ニ都合宜敷惣勢江差表ニ之佛人を頭トシテ賊兵貳百人程屯集罷在たる趣ニ候得とも皆散亂炮臺ハ軍艦を以悉ク打碎一時ニ瓦解愉快至極ニ候田澤大山兩村ニテ賊徒四人生捕も爲有之趣唯今江差出張山田市之尤々報知御座候間不取敢相違候此段御惣督に御披露被下度謹言

四月九日夜 十二字三十分記

青森惣督府

大田 黒亥 和太殿

黒田 了助殿

二仲

一此節ヤンシー船差越申候間別紙要用大小荷駄方諸品々至急ニ御運送奉頼候事

一今般當方出張仕居候長州福山松前弘前殘兵隊之内下付紙之兵員丈前件器械等御差贈之節乗せ組御操出し可被下候就右兵隊着之上ハ直ニ揚陸爲致艦々ハ早速其御元ニ差戻候間其上ニ而御廟算之通松前城下は御打チ上り重疊能キ機會ト相考申候尙御評議可被下候不備

(付紙)

七四八 太田 黒亥 和太

乙部本陣

野 田 大 藏

森 清 藏

本文藩殘兵此節出張被命度兵員左之通

一壹中隊

長州

一同

福山

一同

松前○

一同

弘前

一四門

長州

砲隊

右丈御繰出被下候ハ、大概此許之大夫ニ可有之見込申候事

付札合印○

松前兵隊之儀ハ後日城下御打チ上りも御座候付先

壹中隊丈ニ而御差抑エ可被下候

四月某日府藩縣等に於て脱籍浮浪の徒あるは悉く本地に復歸せしめて戸籍を調製すへく若し脱籍者に前罪^{大罪}あらは之を宥さしむへき旨を令達せらる

〔復古帳〕

脱籍浮浪人之儀ニ付昨年来毎々被仰出茂有之候處今以處々流寓罷在候趣必竟本國復籍之途不相聞各處戸籍人別取調不行届等ニ仍る事ニ而生民各其所を得候様との厚キ御主意モ不相立隨而窮迫之餘り遂ニハ御政體ニ差障候儀ニも可立到甚以不相濟事ニ候依而今般左之廉々被仰出候間府藩縣始諸采地中急ニ脱籍之者悉ク本地に引戻し候様其主宰方可取計自然復籍等閑ニ致置此後流寓不所業之輩於有之ハ總而本地主宰之落度タル事ニ付其科ニ仍り屹度咎方被仰付候事

一都下始府藩縣戸籍人別明細取糺可申事

一御親兵并府藩縣及附屬等は迄御用相勤居候者之内ニも脱籍有之候ハ、郷國明細取調可申出候事

一但御用相勤者ト雖共脱籍致居候而ハ後日復歸も不相成御政體ニ差障り候付今度改而本國に御掛合之上被召遣候事

一府藩縣共脱籍之者其主宰方急速引戻し各其處を得候様仕向ケ可遣候自然其引戻し之手行届兼候分ハ姓名年輪脱籍年月取調可申出候事

附り従前郷國之法を犯し脱籍いたし居候類郷國ニおひても打捨置本人も其法を糺サレン事を懼レ復籍不致向も可有之候得共大刑を犯し候而ハ格別其餘ハ昨年赦罪被仰出候事ニ付總而前罪差免可遣事

一宮堂上始中下大夫上士社方等家來并采地之者脱籍いたし居吟味行届兼候分ハ同様可申出事
一府藩縣共戸籍人別取調等閑ニ相過地方脱籍之者全潛伏自然不所業之輩有之節ハ其事ノ大小ニ依り其主宰ノ罪輕重之科可被仰付候事

一此後脱籍之もの於有之ハ急速追捕ハ勿論萬一行方不知ものハ最寄府藩縣ニ順達致置姓名年齢月日を以可届出事
右之通被 仰出候事

四月

行 政 官

(本書の發令は近世史料編纂條例に四月十五日とあり)

四月十六日在東京本藩老臣書を在京都並に在藩の重臣に與へ公議人鎌田平十郎等が集議院議長の發せし諸侯より上士に至る本末處置規則案に答申せしことを報し且つ高瀬宇土兩末家取扱の事に及ぶ

〔由明治二年至三年 慶應三年 一新録自筆狀、自筆牒控〕

以別紙相達候此度議長官より諸藩公議人に被相渡候別紙議案之書付寫差進申候末藩御取扱諸藩之儀十二九ハ可トスルニ相決候趣鎌田平十郎より相達いつを不日 御施行之時ニ至り可申差當御國ニ而之宇土高瀬兩家有之事ニ付是迄御内分之姿ニ而ハ難相成去迎列侯并判物相渡候而ハ以往之成行如何可有之哉得斗御遠慮無之候而ハ難相成筋ニ而高瀬之御取扱可宜候得とも宇土之如キハ一侯國を建方懇望敷も難量候趣ニも相聞強チ御抑制と申譯ニ茂至り兼可申内輪重疊相熱し情實次第ニハ公族ニ可被命敷又之御一門ニ被 仰付候方可然敷未タ議案中ニ彼是難儀筋ニ而此節委細之平十郎

より京都御國御奉行に申向候答ニ付御内輪ニ而重疊御評議を被礙候様尤末藩御取扱之儀御布令ニ相成候ハ、早々御差廻可申候存候此段爲可申達如斯御座候不盡

四月十六日

藪 圖 書
長 岡 帶 刀

(在京邸)

田 中 典 儀 殿
藪 作 右 衛 門 殿

御 家 老 衆 中
御 中 老 衆 中

第一號議案再改正
自諸侯至上士本末處置規則案

第一

諸侯其領地ヲ割キ末家ト稱シ諸侯中下格カ、士落カマ、タル者如シ家名斷絶ノ罪アルトキハ其秩祿公ニ收ムベキ事

第二

家名斷絶ノ罪アルトキ本末ノ名稱ヲ以テ相連累セシム可カラサル事

第三

- 一 宗家ノ祿高ヲ減シ別段判物ヲ受ザル者
- 一 藏米ヲ與ヘ土地ヲ分タス判物ヲ受ザル者
- 一 半ハ土地ヲ分チ半ハ藏米ヲ與ヘ判物ヲ受ザル者
- 一 土地ヲ分チ宗家ノ祿高ヲ減ゼズシテ判物ヲ受ザル者

明治 二 年

七五一

一土地ヲ分チ判物ヲ受ケ宗家ノ祿高ヲ減ゼザル者
 右ハ名實相適セズ自今判然分ツニ土地ヲ以テシ判物ヲ受ケシメ新田アル者ハ新田ヲ分チ無キ者ハ宗家ノ高ヲ減ズベシ
 如シ家名斷絶ノ罪アルトキハ其規則第一案ノ如クナルベキ事
 一但シ判物ヲ受ケサル者本末然和シテ宗家ニ合併セント欲スル時ハ其段願出可仰朝裁事
 二但シ新ニ判物ヲ賜フ者ハ必ズ本末分知ノ由緒ヲ判物中ニ詳載シ本末ノ分ヲ知ラシムベキ事

第四

末家ヨリ更ニ末家ヲ建タル者其規則第一第二案ノ如クナルヘキ事

第五

新ニ末家ヲ建ントスル者前條ノ規則ニ從ヒ朝裁ヲ請フベキ事

第六

本家罪ナクシテ血統絶ユルトキハ末家ヨリ相續スベキ事

肥後	津	肥	船	依田	右衛門	二	郎	濟
鎌田	野	中	坂	伊達	五	郎	謹案	
高鍋	田	坂	伊達	五	郎	謹案		
紀州	伊達	五	郎	謹案				
大垣	新田	右	竹	衛	門			
尼ヶ崎	服部	清	三	郎				
佐倉	依田	右衛門	二	郎				
飯	肥	船	津					

四月十六日在東京本藩老臣等封建郡縣の可否、開國鎖港の兩議に關する件及び藩主詔邦の東下途中從者が外國人に暴行を加へたりとの嫌疑を蒙りたること等を藩政府並に在京都重臣に通報す

〔由明治二年至三年 慶應三年 一〕新録 自筆狀、自筆牒控〕

以別紙申達候 太守様御着府之上夫々之 御勤向等被爲濟且追々御着府之諸侯方御因ミ之業ハ御双方御往來被爲在候時躰之儀格別是ト相替申候儀ハ相聞不申候得共外國人先月來大難事而已申察一旦ハ實ニ切迫之様子ニ茂相聞候處逆茂斷然たる御談判ニハ運ヒ兼候事ニ付何レ開港之場所税金なく交易ト申ニ茂可相成哉之密話茂内々承リ干戈ニハ及申聞敷候諸侯伯會同 皇國之土臺固マリ候儀を妨ケ候意味ニ而ハ有之間敷哉彼より致サレ候事共切齒之次第ニ御座候得共或ハ親睦他ニ過候藩茂可有之候油斷難成世上ニ而海氷之心地いゝし候彼是聞取違難計候得共別冊機密間ニ書取致せ置申候間則差進申候

- 一封建郡縣之兩岐此十五日迄ニ公議人より相達候様兼而議長より御達ニ付去ル十三日ニ議案差出申候間是又差進申候郡縣ニ而ハ兵力之衰ヘ日を不待事ト被側候得共既ニ版籍御差上之末ニ付公議人より専ら盡力致せ内輪ニ而ハ利害得失三條公ニ申上御國家之御維持專要ト心懸罷在申候被是懸念之事而已書夜致案勞申候
- 一開鎖之兩議等外國官より公議所に相達去ル十二日議長より公議人ニ御渡ニ相成申候大議論之事ト相見右之寫差進申候
- 一若殿様御東下之御都合如何可有之哉何卒御内評之通達ニ 御東下を萬々奉祈候
- 一太守様此元 御着之節外國人に御行違有之候付而之事件茂機局書取ニ有之通ニ意外之御尋茂再々應有之迷惑之事ニ候得共素より此方様ニ行違等有之儀に茂無御座候間夫々御答且内輪ニ而茂辨解いたし候事ニ御座候
- 右等之事件遠境懸隔候而ハ彼是噉々敷相唱候儀茂測荒増之事ニ候得共得貴意置候方少シハ御安心ニ茂可相成啗合懸

急脚差立候事ニ御座候猶后便ニ譲り申候不盡

四月十六日(五月二日)
(熊本藩)

長 藪 岡 帶 刀 書

田 中 典 儀 殿
藪 作 右 衛 門 殿

御 家 老 衆 中
御 中 老 衆 中

再伸奥羽茂先月廿五日比南部沖ニ而賊徒より 朝廷御軍艦ニ襲來一旦ハ官軍ヨ程難戰之處其後賊徒大ニ敗を候よし三條公之御内より囑承申候且又弘前より此地御屋敷へ來翰寫ハ機局より遣申候間御覽可被下候以上

三月廿八日

主上御着後時體概略引取書

外國人之事

近來英人公使「バアクス」主立謂各國親睦ノ上軍艦或ハ兵隊等其土地ニ置テハ大ニ耻ルヲニテアルニ日本ハ人心不居合ニテ頻々粗暴ノ處行アル故ニ親睦ノ國ト雖モ備ヘ置シ也舊幕從來云ニハ萬機 天子ノ御差圖アルヲニテ自儘ニスルヲ成リ難シト今哉始テ 王政ニ復シ再ヒ 天子東行マシマセシ上ハ是迄舊幕ノ借金又前ニ云軍艦并兵隊ノ入費等莫大也是レモ畢竟日本ノ爲ニ費ヘシ也又長州馬關ニテ戰爭ノ償金等稜々強談是迄談判滞リアリシ分一刻モ金高ヲ擗ヘ四月五日期限ニテ受取度若シ期限廻レノ節ハ是迄開港ノ場所ハ各國受ケ取り租稅ヲ收納シ且關門等ハ兵隊ヲ置キ是レヨリ守ルト云

日本貳歩金ノ惡キヲ數々談判甚々手強ク外國官久世卿容堂公初困苦ノヨシ素ヨリ莫大ノ金高ニテ中々返済出來ヘキ

ニ非ス彼又我意ヲツノル實ニ切齒ノ至リト雖モ外ノ外國人ニ銀談アリト雖モ大金ニテ難ノワスト謂説モアリ不許ナリ 朝議彼ヲ絶ツノ士豪無ク大至難ノ様子也朝堂ニ出ル者云ニハ信義モ和親ノ道モ絶シト雖モ之ヲ絶ノ兵力無シ彼ヲナダムルノ説ニテ一旦ハ危難切迫ナレトモ又變シ即今四月初ヲ云先 何レニ開港ノ場所稅金無シテ交易ト云程ニテ談判スミ干戈ニハ及ブマシクト云フ説ヲモ聞此議實ナランカ
皇國ノ武威ハ落ルト雖モ不得已澤村云「一」 歎息也談判手強ク我意壯ナルヲ舊幕

○印付取取リ候事ハ別冊ニ付ルアリ
但別冊拾取リノ書付ニモ大同小異也外國官ノ談判ハ甚々難儀ハ相違ナキ

ト見ル也

一右談判ハ三月廿五六日比ヨリ起ルト聞ク又云王政ニ復セシカトモ各國ニ對シ甚々不都合而已ト云三月十七日比ニハ「ミニストル」馬車ニテ通行スルニ日本大名ニ行逢イ道モ片寄リシニ兵隊一人立察カリ既ニ馬車ヨリ引下サントス甚々不都合也「ミニストル」ハ大權ノ官ニテ其官服モ着セシニ親睦ノ國土右ノ如キ仕方相濟難シト又無禮セシ大名モアリ肥後藩ト云日本大名ハ何ニ者ソ官服モ不辨日本ハ禮國ト云モ實ハ禮義ヲ知ラス甚々粗暴也屹ト談判ヲトケント是又甚々談判壯也實ニ切迫ニ謂募リ 朝廷モ大ニ困リタマウト聞ク四月中旬 外國人行逢ノセツ心得又不審シタモウ藩々右行違ノ「無キヤ否ヤ」聞タマウ

△此方様ニカ、リ來ルヲヲ錄ス

一「ミニストル」行逢等ノ「ハ諸藩ニモ吟味カ、リ 此方様ニハ三月十七日品川 御止宿同十八日四時同所御立午時前龍ノ口ニ 御着府ノ「ニテ右兩日綾惡敷間違アリシ故 朝廷ヨリモ肥後ト云ニナリシカ外國官アタリ専ラ之ヲ唱ウ澤村ヨリ御供中ハ申ニ不及屹ト吟味ノ「ヲ云廿二日比也○素ヨリ行 此方様御供御人數兵隊員數又行逢ノ「等段々 朝廷御問澤村還等無シ 御前後ニ着セシ兵隊モ 吟味アレトモ事替ル「無シ 御答書御差出三條卿殊ノ外御懸念ニテ包ミ隠シドモハアルマジキカト御疑ヒノ聞ヒニテ一旦澤村御説ヲ以其筋解セシ 御答書御差出三條卿殊ノ外御懸念ニテ包ミ隠シドモハアルマジキカト御疑ヒノ聞ヘアリシ故四月六日ニ三條卿へ圖書殿罷出ラレ三月十七日程ケ谷 御發駕同十八日龍口御着迄委細被申述宮ニテ參殿

澤村ヨリ之處折惡敷同卿御參 内ニ付准諸大夫太田源次元長州藩ノ者面會外國人行逢等ノ肥後エ度々御問之アリ如何
 御不審ヨリノ一ニ是有ルヘクヤト聞カレシニ前文各國申出テノ一ヲ唯シ候故十七日ニハ加奈川ヨリ品川迄ノ間馬上
 或ハ馬車歩行等ノ外國人ニ行逢又ハ跡ヨリ參懸リシヲ數多也シカレトモ異儀無ク通行其内ニ馬上ニテ跡ヨリ參懸リシ
 外國人跡供ノ内ニ馬上ヨリ點頭通リ禮ノツモ懸リシ故供ノ歩侍一人笠ヲ取り右馬ノ側ニ寄り手ヨウシテ先キへ通ラレ
 ト云ヘハ馬ヲ留ム故色々手ヨウセシカハ點頭シスカニ馬ヲ乘リ出シ駕籠ニイタリ冠リ物ヲ取り通拔ケ冠リ物ヲ用イ馬
 ニ一鞭ヲ加ヘ速ニ驅拔シテアリ勿論供廻リモ片寄セ半ヲ讓リシ也右之モノニ限ラス馬車歩行ノ者ニモ半ヲ讓リ通行ス
 外ニカワリシモ無キ故行逢ノ場所等不詳十八日ニモ品川出口ニテ馬車ニノリシ外國人ニ行逢コレモ事カハリシ義
 ナシ然ルニ御不審ニトモ相成リテハ甚迷惑ノ一ニ付是等ノ委細ヲ三條卿ニ申上置存意ノ段申述ラレ候ヘハ右源次承知
 シテ條卿ニ申上ヘク源次私考ニ馬上冠リ物ヲ取シモノ、申分トモニハ無之哉手ヨウヲ不悟引留メシト云ナルヘシ冠ヲ
 取ルハ禮也返禮ヲ不受故左云ナルヘシ近來聊ノ一モ大事ニ申出 朝廷モ殊ノ外御迷惑ノ由云フ此方ヨリモ申サレシニ
 ハ言語不通ニ付手ヨウノ外更ニ致方無ク手ヨウセシ供ノ者モ笠ヲ取り罷在リ又彼方ニテ冠リ物ヲ取ルハ禮ト云トモ此
 ニ返ス禮未タ知ラス彼是ノ義モ巨細申上ヲ頼ミ引取ル其節源次云ソノ一ニテアラハ此儘ニテ相濟申ヘク懸念ナキ様
 ニト云也其後澤村脩藏ヨリ右一件肥後藩不審ノ説モアリテ一應ハ連モ刑法官ヨリ呼出シアルヘシ驚キナキタメ密告ス
 ト云段々咄シ合ニテ御行逢ノ一有ノ儘御答之覺悟ニ決セシ處何ノ物音モナキ故四月九日三條卿ニ猶圖書殿參殿前文行
 違ノ一如何相成哉ノ趣源次エ面會開合セラレ候處「ミニストル」ヲ馬車ヨリ引キ下シ候者知レシト云何方藩カト問シニ
 内々源次咄ス藩士ニテハ無之 朝廷ノ御役方ノ由大森邊ニテ行逢其御役方馬馬上ニテ候處馬車ニ馬驚キハ子上リ途ニ
 落馬トモニハ無之哉夫ヨリ立服シテ粗暴ノ振舞アリシ由是ヲ外國人大ニ立服イタシ居候是レニテ肥後ノ一ハ此儘止ヘ
 クト云猶三條卿ヨリ御聞キアリ度アラハ申越ヘク最早懸念ナキ様ニト源次云又此方ヨリ申入レ置カレシニハ双方道
 ヲ半讓リ通行迄ノ義ニ候ハ子細無キ一ナカラ彼レ冠ヲ取りナトシテ返禮ナキナト申察リ候而ハ言語ハ通セス何レノ禮

ヲ爲シ相當敷辨ヘサルヨリ又候行違ヲ釀シ候而ハ一藩迷惑而已ナラス 朝廷ノ御爲ニヨロシカラサル一ニ候向後ハ諸
 藩ヨリ彼ニ道ヲ半ヲ讓リ混雜無ク通行シテ互ニ禮答ナク致シ候旨屹ト彼ニモ御示シアリ度此段ハ御序ニ三條卿に申上
 ノ義源次ニ云入ラレ源次モ最ト同意ス最早 此方様エノ御不審ハ無之趣ハ曉ト云ナリ

但外國人ニ粗暴ノ義アリシハ肥後也ト云フ外向ニテ専ラ唱ノ外國官ヨリモ御問アリテ御答アリ御書付出ル一數度也
 疑ヒアリシ一可知又肥後一ヲ惡シサマニ風説ナシ肥後久留米ノ一等ハ張札モセシ一アリ容易ニ動クヘカラス實ニ油
 斷成リカタキ世上ニテヤ、モスレハ離間説ヲナス也

一東京府之事

主上御住居所新規出來ノ管之處廟堂議論起リ天下ノ公議ヲ取ラレス御住居出來ハ宜シカラスト云ニ決シ 御着替即日
 ヨリ西ノ丸ニ假 御住居ト云廟堂ノ議論モ社也ト可見遊
 一封建郡縣ノ兩議四月十五日迄ニ諸藩公議人ヨリ答ヘノ管也小藩ハ却而郡縣ヲ主張スルノ意アリ大藩ハ言葉ニ出サスト
 難ク封建ヲ好ノ意アリト聞ク未タ議定ハ素ヨリ無シト雖トモ先ツ目的トスル處ハ是迄ノ姿ニテ封建郡縣ト相半バサル
 ナルヘシ

但四月十三日封建郡縣ノ議案出來公議人ヨリ出ス昨今封建ノ方好キト云論段段アリト云 本文議案ハ別冊アリ

- 一待詔局出來ニ付諸藩士志サシアル者數人出懸ケ上藩作州藩士其外諸ノ外國人ノ事ヲ始様々ニ建議シ辦事局ヨリモ待詔
 局御用掛リアリテ御役人出方アリ久世卿方モ出方ニナリシカ諸士ノ論中々大議條理明白ニテ其筋ニ於テハ格別辯解ト
 云ニモ至ラス久世卿始メ御役々再度出方アリシカトモ益諸士ノ論烈シク大ニ御困リニテ此局起リシハ内輪ハ不怪御後
 悔ノ由ニ候ヘトモ諸士ハ待詔局ヘ欣々然トシテ建議シ甚々壯也ト聞ク諸士ノ中ニハ西京ヨリ來リシモノモアルヨシ也
- 一外國交際等ノ御問四月十二日ニ議長ヨリ出ル十七ヶ條中々大議也外國官ヨリ公議 別冊寫ヲ添ル
- 一未タ 朝廷御内議ハ知レスト雖ル外國人ノ談判等事多端ニテ御目的定マラサルニテハ無キヤ天下ノ大基礎モ如何相立

ヘキヤ草莽ノ上ハ外國交際ノ規律ニ日ヲ留メ大藩ヲ抑立ル意ニウカ、ハル 朝命ノ向キ様一ツニハ忽チ事ヲ發シ申ヘク實ニ切迫ノ世ト云ヘシ

一久世卿ノ遊戯容堂公ノ遊行壯ノ風説喋々敷即今ノ世上實ニ歎スルヲ無キニシモ非ス容堂公ハ馬車ニテ通行ナト見受ケシモノアリ又愛妾ヲ同車ノ風説モアル也甚タ慨歎ス土藩モ内輪議論起リタルヨシ後藤象次郎モ徴士御斷ヲ願出シ由也

未タ後藤免職ハ不聞也久世卿遊戯ノヲ等ノ處行ハ大行細瑣ヲ不顧心カハ不測ト雖モ要路ノ職人心 朝ニ歸セサルヘシト云説モアリ信不詳也
一函箱賊徒兵威更張南部ノ港ニテ賊艦ヨリハ形種ヲ辱ルト云 襲來官軍ノ甲鐵艦等ニ發砲一旦ハ官軍敗走報知ニ付久世卿ニ番大隊引卒去ル朔日品川港發船ノヲアリシ其後弘前ヨリ報告ニハ賊兵敗走ト云弘前ノ報知別冊アリ因テ此ニ不詳也

右之件々ハ其事實又眞偽不詳議トモ多端ト奉存候得共 朝廷エ出シ人ノ話或追々御聞取リ後々等摘集シテ記録ス間説等ハ前以テ御斷中上置候事

四月 (本文中〇印付置取候次第別冊ニ付札アリとあるは左の書付也)

〔探素書扣〕

慶應三年 別冊引取ニ云處ノ拾取之書付(抄略、三月廿八日土佐藩毛利恭助談と同一報告)
三月廿日毛利恭助咄

今般於横濱參與兼外國知官事大隈四位英佛公使應接之一條之實ニ神妙大危險也右者實金より論起ル已ニ英國公使バアクス論判ニ之日本之惡習ニ而外國人ヲ禽獸同様ニ相心得夷狄之稱號を不廢攘夷之論未已今日斯迄交際を結候上ニ猶浮浪之輩難制外國人往來ハ警衛護送之者有之實以可憫此上ハ斬時之可斬多年來所唱之日本魂を今日前ニ見度我ハ英國魂ヲ可示日本之素より地毬上之一小島ニして固陋之風習到今不相變我歐羅巴ニ比まれハ實ニ日本之夷狄禽獸ナリ云々之

機 密 間

議論ニ而大隈も談判餘程不出來ニ相聞に實ニ恟々たる時勢也此日土佐中納言ニハ休日細川中將此頃登京之節大森ニ而英公使バアクス馬上官服ヲ着し横濱歸港之途中ニ逢細川之臣直ニ右公使ニ迫り大名之通行ニ付下馬せよと聲ヲ掛たり其節淺兵六人附屬之内右壹人無理ニ馬より下ス公使無據路ヲ避ケ通行せり横濱裁判所に直ニ應接し云々細川と之何物ソ何官之人ソ吾之全權公使之旗章を立往來する途中自分ハ乘輿之儘馬より下をと令す始め高貴之人ト見受二列之騎兵を一行ニ合せて路を譲りたり終ニ暴論不相止若大名ナラ各國公使之旗章位ハ辨別茂可有之類ニ不可許ト切迫ニ論し候由右之細川ニ而人物ハ有之候得之自ら處置も可致實ニ細川之不法云々又於横濱商人醉狂之餘リ字漏生之コンシユミルヲ半死半生ニ打擲し右等之廉々皆政府之失舛ニ相成候由全舛今度英國公使之激論發端之今度御再幸ニ付京攝人心不穩其爲ニ遂ニ數百人ノ激徒より攘夷論相發候よし 御再幸も遷延之模様有之抑 御再幸ト申者自然遷都之御仕組ニ而其遷都ハ外國人之趣意より發モ蓋東京ハ日本第一之開港場ナリ此地 皇居を不遷之日本人心東京ニ歸順せず歸順せざれハ日本之大利之此地ニ幅帳せず依而専ら御再幸之議論之根元外國より發す陳ル今度固陋之激徒舊來之攘夷論を主張し風箏を仰留ニ至り此機一失ハ 御再幸遷延ニ相成候ハ、遷都之事不相成見込より英國公使此論を發し攝海ニ軍艦ヲ差向ケ技術ヲ以而日本英國之兩般之魂ヲ比較せる云々之段ニも及候處大隈結局之議論之新政多端之おり従前之惡習ヲ除キ萬世交際を全し度斯まで懇ニ談判も致候處右等云々先方より常理茂無之戰爭ト申時之素より勝敗之不願直ニ攝海に可參云々相談候處外國人も威光を以却し候哉其儘攝海に乘廻らさるよし實ニ當惑之次第なり

〔全書〕

封建郡縣可並用議

封建モ周ノ封建ノ如ク盡ク封建スル時ハ王畿千里ノ例ニ准シ本邦畿内ノ地ヲ 朝廷ノ有トスル儘ニ數小國何ヲ以テ天下ニ威令ヲ示スニ足シ是勢決シテ行フ可ラス然ハ則郡縣ニ復シ是亦不可ナリ何トナレハ秦漢以後及ヒ泰西ノ郡縣タル

明治 二年

七五九

或ハ兵ヲ農ニ寓シ或ハ農ヨリ出テ兵ト爲ル代々世々兵ト農ト判然分別スルニ非ス然ルニ今郡縣ノ制ヲ立ル時ハ兵ヲ農ニ寓スル法ニ寓シ或ハ農ヨリ出テ兵ト爲ル代々世々兵ト農ト判然分別スルニ非ス然ルニ今郡縣ノ制ヲ立ル時ハ兵ヲ農ニ寓スル法ヲ用兵ト世祿ノ制ヲ止メサレハ眞ノ郡縣ト云フ可ラズ然レ現今藩士ノ多キ百億万ニ降ラス一旦是ヲ農ニ歸ス騷亂紛亂ハ必然ノ事因テ諸侯而已ヲ廢シ藩臣ハ朝臣ト更ムル時ハ諸侯何ノ罪アツテ廢セラレ藩士ハ何ノ幸アツテ朝臣ト爲リ君トシ仰キタル人ト比肩スルニ至ルヤ是昇降ノ極テ公當ナラサル者且ツ如斯百億ノ藩士遽ニ首領ヲ失ヒ瓜分騷亂ノ收束スル所ナク官假令大小吏ヲ差遣シテ治ル共恐ラクハ手ヲ置ニ至ラン奥羽二州ノ地スラ未タ十分經理ヲ得サルヲ以テ見ル可シ況ヤ天下ノ廣ヲヤ抑又秦漢已後郡縣ノ兵力甚タ孱弱ニベ一時反賊ノ起一人支吾スル無ク無人ノ境ヲ行ガ如キニ至ル而モ天下ヲ取ル人多ク郡縣ノ制ヲ用ルハ封建或ハ尾大不掉ノ患アルヲ以テ子孫ノ制シ難キヲ慮ル焉ソ知ン子孫ノ削減セラル、郡縣ノ弊ニシテ藩翰ノ人無キニ由ルコト由是觀レハ方今ノ勢封建郡縣參錯シテ用ヒ互ニ相維持スルニ如ク無シ郡縣ハ畿甸ノ地ヲ本根トシ遐邇僻陬マテ四方ニ布列シ氣脈ヲ連絡セシム是郡縣ヲ經トス諸侯ノ封其間ニ建特シ王室ヲ藩蔽ス是封建ヲ緯トスルナリ如此制ヲ設ト雖郡縣侯國政令一途ニ出サル可ラサル故ニ諸道ニ令シ每道督府一ニヲ廂建シ督貴朝官之レニ蒞ミ三五年交番シ其名ヲ都督使ト稱シ其地ヨリ某地ニ至ルヲ管内ト定メ管内ノ諸侯或ハ執政參政郡縣ノ令吏一二名ヲ限リ督府ニ會同シ諸事公論商議シテ朝旨ヲ取細事ハ都督之ヲ裁許ス朝廷號令アル毎ニ諸道都督ニ下ス都督之ヲ管下ニ傳フ而バ一國刑賞黜陟ノ大ナルモノ必ス督府ヘ申請シテ後之ヲ行フ如此スル時ハ本末宜ヲ得テ事煩カラズ天下ノ政度統一齊整シテ政刑ノ權盡ク朝廷ニ歸ス且ツ諸道郡縣ノ諸方ニ星散スル者漸ヲ以テ合一シ一道ニ郡縣ヲ挾ムコト一或ハ二トス其郡縣内ニ兵團ヲ編制シ唐ノ府兵ノ如クシ侯國ヲバ獨リ兵威ヲ擅ニセシメス是封建郡縣中ノ弊ヲ棄テ利ヲ兼有ス當今ノ要務ニ非スマ

御維新ノ際ニ付郡縣ニ一定可致方名義ニ於テハ可然トモ奉存候ヘ正許多ノ弊害モ有之皇國ノ御爲如何ニ候間本文愚案ノ通り仕度奉存候

細川中將議員
鎌田平十郎

百八十番

由明治二年至三年 慶應三年 慶應三年
〔一新録自筆狀、自筆牒控、探索書扣〕

明治二年東京公議所ニ而議長方諸藩公用人に渡ニ相成候議案

外國交際之儀ニ付國辱ヲ洗淨スルノ問題十七條

第一

一開鎖ノ論古今議者ノ説甚多シ或ハ夷狄ハ禽獸ナリ近ツクヘカラス或ハ我邦富強未タ充實セス彼長ヲ取我短ヲ補ヒ然ル後ニ攘フヘシ或ハ全ク西洋ノ風ニ教化シ盛ニニ學校技藝ヲ開キ炮艦ヲ熟練シ然ル後ニ眞ノ掃攘ヲ施スヘシ或ハ夷人ヲ斬ルヘシ種々其説今日ニ至リ止マス若シ之ヲ開カントセハ方今ノ交際ニテ永續スヘキヤ將タ別ニ交際ノ道ヲ建設スヘキヤ果シテ如何

第二

一縱令之ヲ鎖ニ至ラハ斷然之ヲ掃攘シテ可ナルヘキヤ將タ或ハ在住ノ人民ヲ斬殺シテ可ナルヘキヤ彼來リ抗スルノ節之ト對應スルノ道果シテ如何

第三

一若シ彼軍兵ヲ以テ來リ攻ルノ節我ニ對應スルノ兵備ナクンハ我國人 皇室ト共ニ倒レテ止ムヘキカ當然ナルヤ如何

第四

一若シ彼ト戰爭スルノ期ニ至リ斷然兵力ヲ以テ彼ト爭フヘカラサルヲ論シ異議ヲ起ス者アラハ如何シテ之ヲ説得スヘキヤ如何

第五

明治二年

七六一

一若シ鎖港ト一決シ五ニ戰闘ヲ興スノ節我堂々 王室ヲ何レノ國ニ安置シ奉リ何ノ兵力ヲ以テ之ヲ保護シ奉ルヘキヤ其目的ノ實備果シテ如何

第六

一今日我邦ニテ妄リニ無罪ノ外國人ヲ斬殺シ或ハ惡金銀ヲ鑄造シ或ハ莫太之金銀ヲ借用シ年月ヲ經ルニ從ヒ種々ノ曲事重ナリテ外國人申合セ兵ヲ動シ政府ニ迫リ其曲事ヲ詰問シ或ハ開港地ヲ奪領シ或ハ通船ヲ押ヘ或ハ諸島ヲ掠ムルノ節如何シテ之ヲ防禦スヘキヤ將何ノ策ヲ以テ之ヲ壓制スヘキヤ如何

第七

一即今ノ形勢ヲ以テ見ル時ハ開港ヲ好ム者ハ西洋ノ道ヲ主張ス鎖港ヲ欲スルモノハ和漢ヲ主張ス若シ之ヲ一ニ歸セシメントセハ將タ何レノ道ヲ以テ嚴然確定決斷スヘキヤ如何

第八

一我神道ヲ以テ日本全州ノ人民ヲ教導スルノ法現在實地上ニ施スノ道果如何

第九

一若シ之ヲ一ニ歸スル時ハ開鎖ノ議イツレカ當今ノ時世ニ適當スルヤ其利害得失果シテ如何

第十

一我邦各國ト條約セシハ人民貿易スルニ在リ今ヤ數年以前ヨリ各國ヨリ競フテ海陸軍兵隊ヲ我 朝ニ居住セシメ自己ノ人民ヲ保護シ若シ異變アル時ハ忽ニ兵ヲ出シ各處ヲ守ラシム即今英國ノ兵隊大凡三千人在リ佛之ニ次ク米其他ハ海軍ノミナリ我堂々 神州ニシテ未タ外侮ヲ受ズ其輕侮ヲ受ル今日ヨリ甚シキハナシ之ヲ清淨スルノ法現在實地上ニ施スノ道如何

第十一

一按スルニ右ノ兵隊ヲ移住セシムル事萬國ノ公法ニ依ル時ハ自己ノ屬國ヲ除クノ外兵隊ヲ備ヘテ交際スルヲ聞カス數年以前ヨリ外國商民ヲ殺害セシコト數十人ニ及フヲ以テ彼ノ政府ニ於テモ一名殺害ニ逢毎ニ兵員ヲ増加シ終ニ今日ノ盛シナルニ至ルナリ此殺害ノ所業追々増長スル時ハ彼モ亦隨ツテ兵員ヲ増シテ守備益堅固ナリ之ヲ制止スルノ道果シテ如何

第十二

一若シ年月ヲ追ヒ外國人ヲ從ツテ増加シ兵員各港ニ充滿スル時ハ我 神州ノ汚辱之ヨリ甚キハナシ即今ト雖既曲ヲ萬國ニ流セリ我 皇州ノ士氣ヲ以テ即今外國ニ對シ右ノ諸件ヲ一洗改新スルノ道現在實地上ニ施スノ策果シテ如何

第十三

一外國人追々兵員ヲ居住セシムルハ我政府内外人民ヲ保護スル能ハサルヲ察シ其生殺與奪ノ權政府ニ歸着スル迄ハ彼カ兵隊ヲ本國ニ歸送スルヲナリガタキヲ陳言ス夫レ生殺與奪ノ權政府ニ在リ内外人民ヲ保護シ以テ信義ヲ貫クニ在リ今ヤ外國ヨリ我國内ノ可否ヲ制スルニ至ル此汚辱ヲ洗淨スルノ實計果シテ如何

第十四

一萬幕ノ時生殺黜陟ノ權力下民ト外國人トノ手ニ在リ故ニ政權竟ニ一新ニ至レリ今ヤ其覆轍ヲ踏ムノ憂ヲ防禦スルノ道如何

第十五

一各國公使市在通行ノ節兵隊ヲ前後ニ擁シ橫行スルノ節如何シテ之ヲ差留ヘキヤ將タ之ヲ禁セストモ可ナルヘキヤ如何

第十六

一府藩縣ノ士兵隊等道路通行之節各國人ト行逢亂暴ニ及フノ時ニ當リ如何シテ之ヲ制スヘキヤ將政府ノ威權ヲ以テ之ヲ制スルノ力アルヤト即今外國人ヨリ問訊スルノ節其信實ノ確答果シテ如何

一和戰ノ儀ヲ明斷セント欲セハ果決猛烈ノ舉在リ若一步モ寬仁ニ失スレハ忽姑息因循之惡弊ニ陥リ政權終ニ奸民ノ手ニ
 落ルナリ故ニ一刀兩斷ノ大決策ヲ乞フ如何
 右之條々實ニ當今ノ御大事現今實地上ニ施用スヘキ大目的ヲ定メ時勢到當ノ御評議希望仕候

四月十七日日本藩岡松辰吾徵士昌平學校教授を命せらる

〔從慶應二丙寅年正月至明治三年
 江戸 京都 來狀 扣〕

〔在京都長岡帶刀藏圖書ヨリ四月廿九日仕出家老中老へ達の一項〕

岡 松 伊 助(吾辰)

右者徵士被仰付旨從行政官御達之趣去ル十七日及達候
 付札 本文伊助儀昌平學校二等教授被 仰付候段相達候事

〔東京より之御用狀扣には昌平學校二等教授の辭令書は四月十八日行政官に於て御渡に相成候とあり〕

細 川 中 將

其方家來岡松辰吾儀徵士被 仰付候間出仕可申付候事

四月

行 政 官 岡 松 辰 吾

徵士昌平學校二等教授被 仰付候事

四月

行 政 官

四月十七日海陸官軍力を協せ松前城を攻めて之を抜く

〔慶應三年
 探索書扣〕

〔五月六日附在有川野田大藏ヨリ本藩奉行宛書留抄略〕

松前口

一四月十一日松前口進軍ノ先鋒札前村宿陣ノ處賊徒夜襲我兵敗走ニ陣必死防禦激戰彈藥盡キテ翌十二日東雲休戦小沙子
 村迄引退ク死傷四十一人

右同

一同十七日松前城恢復第八時カ先鋒原口村繰出シ進撃之處江良町村ニ而賊徒防戦我兵海陸方砲撃賊徒一時ニ敗走我兵尾
 撃清部村ニ而暫時休兵赤神村ニ而陣待合セ各藩兵隊一同合シテ海邊山手一面ニ散兵立石野砲臺に進撃之處守リ堅固之
 上賊必死防戦我兵死傷尤多く頗ル激戦遂ニ砲臺三ヶ所を抜キ直ニ尾撃シテ松前城に突入恢復ス我兵死傷二十五人

〔松前城恢復のことは四月十九日附財津民助庄野新兵衛報告書四月廿一日附太田黒亥和太報告書等を參看すへし〕

四月十八日日本藩世子護久熊本に歸着す

〔若殿様御上京一卷〕

四月十七日

一若殿様益御機嫌能去十五日朝六時之御供捕ニ而大坂御茶屋御立異艦に御召書九時分御出帆海上無御滞今十七日七半時
 分小島表に御着艦明十八日朝四半時之御供捕ニ而小島御立御乗切ニ而御花畑に被遊御着旨被仰出御道之儀之御上京之
 節之通之段參政より建石之候事

〔明治二年ヨリ三年二月迄
 御國東京往來狀 扣〕

〔四月廿五日執政副執政より京都田中典儀東京長岡帶刀藏圖書宛書留の一節〕

明治二年

七六五

若殿様益御機嫌能去ル十七日夕七時分小島沖被成御着船直ニ御上陸同所御一宿翌十八日八時之御供揃御乗切ニ而八時過熊本に被遊御着奉恐悅候(下略)

四月十八日日本藩京都往來の旅費給額を定む

(明治二年)
〔觸 狀 控〕

一勘局左之通	京都に被指越候而々往來之御渡方今度會議之趣有之御供不時共左之通	右千石高	登 御 渡 方
一米五拾八石壹斗壹升	登 御 渡 方	右七百石高	登 御 渡 方
一米八拾四兩貳步	下 御 渡 方	五百石高	下 御 渡 方
一米五拾三石六斗四升	登 御 渡 方	一米拾三石四斗壹升	登 御 渡 方
一米七拾八兩	下 御 渡 方	一金拾九兩貳步	下 御 渡 方
一米四拾四石七斗	登 御 渡 方	一米八石九斗四升	登 御 渡 方
一金六拾五兩	下 御 渡 方	一金拾三兩	下 御 渡 方
一米貳拾六石八斗貳升	登 御 渡 方	一米四石四斗七升	登 御 渡 方
一金三拾九兩	下 御 渡 方		
		右平士	登 御 渡 方
		御中小姓	登 御 渡 方

一金六兩貳步

下 御 渡 方

月番

右歩御使番以下

御備頭當

足輕段迄

覺

一米貳石

登 御 渡 方

一上下拾三人

三千五百石高

一金四兩壹步

下 御 渡 方

一同拾貳人

三千石高

下二付札

右無苗

一同六人

貳千五百石高

小島方乘船東京に船路往來に者本紙之御渡方被仰付候尤東京上下陸路之御渡方之追而及達管候

下二付札 本文稜々之内歩御使番以下無僕ニ而候得共小者召連

不申候而之日勤等出來兼候而々願出有之事實相違茂

無之候ハ、諸役人段以上之臨時會議之筋茂有之管候

右之通被渡下候尤下御渡方之儀者出立之節於其向々被

渡下管候且又上下人數之儀者別紙之通被究置候間右人

數之外者難叶候此段可及達旨候條左様御心得御同役に

御通達御組々に茂可被成御達候以上

四月十八日 觸出

切觸

右之趣支配方帳口々々二丸支配頭並尾藤健之助に及達候事

四月十九日我藩津輕應援隊長志水一學石寺九兵衛青森より書を在東京林九八郎に贈り該地方の形勢を報す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月マテ〕
一 新録 探索報告

一 翰拜呈仕候愈増御安泰可被成御勤務奉大賀候畢而私共組共無滞當月二日弘前表に着仕申候間乍憚御擲慮奉希候津輕
様に茂青森に御出馬被爲在候付早速青森に罷越申寄之處當處に者各藩御人數餘計ニ着岸仕居何分私共御人數丈々御練
込之地無之候付近地に右之御人數少々ニ而茂押渡り申候得者直ニ御練込之御積りニ被爲在候段御意傳之趣御近習を以
態々弘前迄被仰付候間暫弘前に相滞り去ル十七日青森着仕申候近地茂去ル十六日ニ福山落城仕箱館モロラン之事情者
いまた得斗相知不申候得共今晚大阪艦當港に着仕略承り申候へは最早福山江差者取返申候得共箱館へ未タ殘賊有之今
強兵千人程有之候得者漸々平定ニ趣申見込ニ付明曉より當港出帆至急ニ右之御人數迎ニ参り申寄ニ御座候間何卒早々
鑑定を祈申事ニ御座候右之外何そ異變茂無御座先見聞之趣荒形録上仕候餘者後便可申上勿々頓首

四月十九日

石 寺 九 兵 衛
志 水 一 學

林 九 八 郎 様

尙々乍憚時分隨分御厭奉遙祈候再白

四月十九日曩に奥州へ派遣せられたる我藩財津民助庄野新兵衛青森より松前の戦況を報告す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月マテ〕
一 新録 探索報告

四月廿五日着

明廿日大阪艦當港發幸便ニ付一書奉拜呈候薄暮之候彌御清祥御奉務奉賀候次ニ私共儀先頃來青森に罷越無異ニ滞在仕
候間乍憚御休意奉願候然之松前地戰爭之模様今日迄概略左之通ニ而當月六日海陸軍青森港發同八日迄津輕領平館へ從
泊九日五比乙部松前に向イ賊兵少々屯集暫時戰イ收走官兵直ニ江差松前迄進軍賊兵防戦仕候得共格別之戰茂無之夕京

江差港ニテ乘取其方官兵頗ニ相進十一日松前城下三里手前迄進軍賊兵屢收走官兵松前長州勝ニ乘シ直ニ松前城快復之爲
相進候處十一日之夜賊兵襲擊山路之險ニ據り撤兵を以狙撃官兵夜中大ニ苦戰終イサコ迄地名城下江差ニ而引揚死傷大分有之不
意之夜襲ニ而官兵不利併江差根柢ニ相成候へハ猶進軍ニ相成申候同十五日夜猶二番當港發十六日海陸軍一同松前城を
襲イ一番手ハ陸地を進撃十七日終ニ松前城を取ル松前屯集之賊兵六百餘大收初佛人松平伊勢守と唱者出張戰爭 器械等も殘
し箱館へ退き大野に出張防禦 館へ通路ノ險 官兵松前には陣諸道ニ兵を分ち是方ハ格別迅速之進軍ナク漸々進撃之模
様ニ相見申候

一 賊艦回天蟠龍二艦も函港從泊回天ハ南部宮古之戰ニ而少々損所有之由ニ而艦炮臺ニ拵函港を守ル

一 賊兵茂異論紛起之茂説有之候得共根本杯善統御いたし候と相見防禦之策も嚴重之由併勢益衰弱官兵勢始大ニ壯ニ而只
今方順々運候ハ、一二旬之中ニハ函府乘取ニ相成可申候と思像仕候尤モロランエ蒸氣一般相撃キ函府破候ハ、モロラ
ンに退き決局佛ニも走ル目的歟と想像仕候

一 佛人相應候儀情實篤ト確定致策 昨戰ヨリ九人相加里追々戰死四 是迄函館在留佛軍艦茂當港へ參居候處四五日以前發シモ
ロランへ從泊之由又潛ニ彈藥等茂送何共陰ニ應援之形ニ相見申候

一 今度大坂艦之兵隊不足ニ付猶千餘急ニ出張之儀ニ付東京に差廻ニ相成申候全林松前戰地山路險阻ニ而諸方之濶道等多
く番兵等ニ大分人數入用之由ニ而強チ賊兵強壯ニ而應援を請候譯ニ之無之由ニ相考申候

一 是迄出張之官軍四千餘賊兵三千不足之趣ニ相聞申候

一 此節出兵之長薩藤堂備前福山久留米大野松前水戸當藩ニ而何き之藩も大ニ奮發先鋒之渡海爭様士氣奮激愉快之事ニ御
座候此節猶千餘諸藩方出兵ニ相成候ハ、何卒御國より茂御願ニ而御出兵ニ相成候ハ、朝廷之御都合茂宜敷御應援之譯
茂有之最早兵隊茂習熟ニ相成可申候間實地之戰爭清ニ冀望仕候併是茂戰地之風習ニ染過激之説歟とも存候得共書末ニ
聊心情言上仕候先今日迄之事情等草忙如是御座候以上

明治 二年

四月十九日 同廿五日霜

七七〇
庄野新兵衛
財津民助

東京詰

御奉行衆中

向々志水隊茂二日弘前着十七日當表着ニ相成一統相替候儀茂無御座候私共去留之儀今暫形勢見留發途之筈ニ御座候
聞乍憚左様御思召可被下候以上

別紙

一越中守様に茂先比來青森被遊 御出張益御機嫌能被爲入追々御陳營に茂奉伺不怪 御懇命を象り難有奉存候以上

四月廿日太政官中民部官を新設し府縣事務管督戸籍驛遞橋道水利開墾物産濟貧養老等のことを掌らしむる旨を達せらる

〔明治王政日新録〕(熊本縣
二年 廳所藏)

(四月廿日渡し廿一日忍藩佐藤江場之助より我藩外六藩へ廻達書四通の内)

今度大政官中民部官ヲ被置神祇官以下六官ニ被定候旨被 仰出候事

但從來諸願伺等總而辨事に差出來候處向後六官ニ關係致候事件之共官々に向ケ可差出候事

四月

行政官
民部官

掌總判府縣事務管督戸籍驛遞橋道水利開墾物産濟貧養老等事

右之通被 仰出候事

四月

行政官

今般於東京民部官被立置別紙之通被 仰出候處右職務當表ニ於テハ未被 仰付候間是迄會計官へ差出來候分ハ同官に可差出候府縣之儀民部官之管轄ニ相成候得共當分之處從前之通辨事に可差出事

四月

行政官

四月廿日公議所議長副議長の任免ありたる旨を達せらる

〔復古帳〕

(四月廿日渡廿一日月番の廻狀を以藩廻來寫の内)

四月

秋月右京亮

右之通被 仰出候事

議長被免候事

行政官

四月

公議所

四月

行政官

各藩

議員中

神田孝平

當官ヲ以テ當分副議長兼勤被 仰付候事

四月廿一日待詔局を馬場先門内元松平下總守邸内に移轉する旨を達せらる

〔復古帳〕

四月廿一日月番三藩方差廻來候御書付寫

今般待詔局馬場先門内元松平下總守屋敷に被移候間爲心得相達候事

四月

行政官

四月廿一日昌平學校講議規定を發布し在東京の公卿諸侯中下大夫以下隨意に出席聽講すること

明治二年

七七一

を許さる

〔復古帳〕

(四月廿一日月番三藩ヨリ廻達セル書付の内)

一 昌平學校講義毎月五日十五日廿六日ニ相定メ第十字ヨリ相始候事

但大學方開講之事

一 右之定日在東京之公卿諸侯中下大夫諸官人非藏人北面以下勝手ニ出席可致事

但右定日之外稽古ハムシ度面々毎月三八之日罷出講義質問勝手ニ研究可致事

一 輪講會讀等致度者ハ教授中ニテ會頭相撰ミ望次第研究可致事

右之通相定候事

學 校

右之通ニ候間爲心得申達候事

行 政 官

四月

四月廿一日岩倉具視東下の途次大坂に至り東京地方攘夷論再起し肥後藩士亦之に與すとの報を聞き書を在京都我藩參政津田山三郎に與へ俱に東下して異論者を説諭鎮定せむことを勤誘す

〔津田家文書〕

(包紙) 津田山三郎殿

岩倉大納言

平安至念

三白無根之説ニ候ハ、幸甚此事ニ候得共萬々一御藩之士同心暴論と申様ニテハ實ニ國家之大事此上ホくと不堪心痛事ニ候於臣ハ轟之徒決而無謀粗大議論ハ有之間敷存候得共風聞ニ而ハ不容易義と存候返スノ御互ニ合力平穩ヲ計

リ申度至急東下祈望候尤此書狀足下限り必漏洩無之様分而頼存候早々如此候也

薄暑之御彌御壯健欣然候無事下坂今日乗船明日迄ニハ出帆之積リニ候過日之能コソ來問幸在宿御五ニ内外吐露御談合深添存候其後東京方兩度計着狀候處其文中貴藩士等云々之風聞兼而御内話通々候情愚考候處實ニ苦心此事ニ候皇國御基礎被爲立候今日之秋ニ當リ萬一其藩獨り御異論之事ニ落入候而ハ固より全國同心戮力國威海外云々 敬慮ニ戻り候而已ならず天下之大事爰ニ起り候歟と返すノ深案痛懸念候ニ付公私ノタメ乍御苦勞足下早々東下終始平穩之様偏ニ御盡力有之度候尤出府候ハ、轟等速ニ出會反覆申談候心得勿論誤傳ニ候ハ、重疊候得共如何ニ至誠を以て論し候而も行われざる節ハ兼々其御三侯ニも御親く彼是申承候儀右御誠實御精忠ニ對シ候而も本末齟齬不可言儀出來候而ハ於臣も終身之遺憾旁此際一入御奮發片時も早く御東下厚御周旋有之度只管渴望之事ニ候尙御承引否共三日限東京ニ御出狀可被下候其模様にて心得方も可有之候但シ權辨事守田栗園と申者ニ御託し候ハ、御用便にて直チニ相届き申候尤同人にも足下より云々候ハ、速ニ取計ひ候様此便ニ申遣置候發途掛勿々如此候也

四月廿一日

具 視

津田山三郎殿

向々病後執筆ニ堪らね乍失禮代筆高免尤漏洩之義ハ決而無之豈人腹心之者ニ申付候事ニ候只前後而已自筆申入候也
四月廿一日關門廢止につき我藩國境の南關、坂梨、水俣等の番所を廢す

〔僉議控〕

覺 參 政に

今般諸道關門廢止之儀從 朝廷被仰出置候通ニ付以來南關坂梨水俣御口屋御疊置被仰付候間左様可被相心得候以上

四月十一日

明治二年

(編者曰、南關は玉名郡にて北境筑後口、坂梨は阿蘇郡にて東境豊後口、水俣は葦北郡にて南方薩摩口なり又當時領内四境の所々浦御番并在町御番處左の如し)

白濱浦名、晒浦全、大島町全、清源寺浦全、長洲浦全、南關全、馬見原町阿、高良浦宇、三角浦全、郡浦全、日南久町北、田浦斗石全、津南木全、水俣全、袋浦全、坂梨口阿、佐賀關湊口豊、鶴崎河口全、川尻川口、高橋川口、小島川口、近津、浦遠見番、戸口浦、戸馳浦、下り松、三角瀬戸口、住吉川口、晒川口、久重口、告口、岩本口、松葉口、坂本口、中和仁口、生味口、岩神口、河地口、境崎、)

四月廿一日青森總督府參謀太田黒亥和太松前の戦況を我藩參政に報告す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月マテ 一新録 探索 報告〕

前文略仕候諸道之官軍追々進撃松前城落去之次第過日申上置候通御座候處猶概略申上候
去ル十七日朝第八字方各藩兵隊 此口松前二中隊長州伊州筑後弘 原口村繰出置猶又斥候として長筑徳三小隊江良町村に相進候處賊兵三百人計同處に寄セ來朝餐之折柄即分兵直ニ進撃尤海上に存日艦砲撃ニ付賊忽逃走仕候間尾撃シテ清部村まで相進ニ暫時休兵又々追討赤神村ニ而後陣待合一字方各藩海岸山道ニ分配一時ニ立石野砲臺へ相掛り軍艦方も頻ニ發砲賊必死防戰官軍死傷多く頗ル激戰遂ニ砲臺を乗取逃ヲ逐テ直ニ城下に突入我軍艦ハ沖合を城中へ砲發賊不能支吉岡峠に敗走六字諸兵不殘城下に打入候市在之老若男女雀躍いたし王師ヲ迎歡喜之聲四方ニ充滿仕候賊ハ吉岡之險ヲ捨福島まで敗走直ニ追撃可仕之處今日官軍八九里進軍殊ニ猛烈之戰よつて將卒大疲勞城下に宿陣いたし援兵を乞來候間水戸松前各一中隊宛繰出申候今日戰死傷左之通

銃傷三ヶ所 三刀屋七郎次 討死銃丸を受ルト四ツ 渡邊與八郎
長大隊司令上 同 小隊長 飯田孫七

同 砲隊長 隼之助

傷數 林 其砲長潘淺手深手十六人

其砲長潘淺手深手十六人 筑後參謀 深手 曾我 靜 軒

討死 佐々重平 人物惣軍大ニ相惜申候

同 斥候

本古内口之十九日笹屋迄進軍廿日曉二字同所雷發四字より戰爭ニおよひ同所砲臺ニ相迫り餘程雷發六字本古内ニ打出賊大ニ敗走札刈山中に散亂知り内へハ松前之敗賊集り居候處本古内に進候官軍賊之後ヲ取切候付賊逃道失ひびニ窮鼠ニ相成申候此戰之松前より海陸並進賊本古内に引退時分此手之官軍も進撃之手賦ニ御座候處連ニ打出賊を前後引受甚以氣使ニ有之昨夜十二字弘前備州各一中隊宛援兵繰出申候其後未々何之報知も無之候筈口昨廿日小戰有之候段報告有之未々委細事不申來候四方之戰爭勝利を得不遠箱館賊窟討入可申候時下四方之應援人數繰出其他兵糧之運輸等ニ大ニ取紛概略まで申上候以上

四月廿一日 大田 黒 亥 和 太

參 政 衆 中 尚々本文戰爭之次第未々軍務官に御届ケ不申候付他見必々御斷申上候以上

(編者曰、熊本縣廳所藏王政日新錄に據れば本書に左の書添あり)

御國ヨリ未々交戦ハ無之候得共後志水一學石寺九兵衛等被差出函館青森邊戰爭有之候ニ付彼是御見合ニ差上申候
四月廿一日關宿藩士井口小十郎、富山正之助、執政杉山對軒を斫殺す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月マテ 一新録 探索 報告〕

五月九日達

一四月廿一日關宿藩井口小十郎富山正之助兩人ニ而執政杉山對軒と申者斬殺首級相携へ刑法官へ訴出候趣也

四月廿二日百官諸侯を朝廷に召して大政施設の方法を諮詢せらる

由明治二年至三年 明治二年ヨリ三年二月マテ
〔一〕新録自筆狀、御國東京往來狀扣、自筆牒控〕

（四月廿八日付長岡藩刀藏圖書より田中典儀在京執政副執政在へ贈りたる書簡一簡）

明治二年四月廿八日東京發之官脚五月廿九日着

以別紙申達候去ル廿二日依召諸侯伯一同御參 朝被遊候處別紙寫之通 詔書等御渡ニ相成候由ニ而被遊御下拜見仕候處 嚮ニ百官等御誓文五事を被掲其綱目より押廣メ萬事並立之 御大策被建候儀ニテ重疊御評議を被凝來月四日迄ニ之屹々御勅答被遊答ニ御座候然處各藩之大策を被取 皇國之大基礎被相建事ニ付兼而此方様御國論ニ彼是時躰變遷之事情參考して可被仰立と御役々申談專ラ研究いたし候最當表之光景且御勅答事件ハ載作右衛門ニ附托可被差立哉と咄合居候事ニ御座候將前文御誓文日誌ニ顯シ有之候得共爲御合書寫せ差進申候（卜略）

御誓文寫

太政官日誌第五號

御誓文御寫

詔書寫

朕誓ニ汝百官群臣ト五事ヲ掲ケ天地神明ニ質シ繼紀ヲ皇張シ億兆ヲ綏安スルヲ誓フ然ルニ兵馬倉卒未其續テ底サス朕夙夜上ハ以テ神明ニ畏レ下ハ以億兆ニ懸ツ今ヤ乃チ親臨汝百官群臣ヲ朝會シ大ニ施設スルノ方ヲ諮詢ス是神州安危ノ決今日ニ在リ誠ニ宜シク腹心ヲ披キ肺腑ヲ表シ可否ヲ獻替スヘシ 朕將ニ勵精竭力大ニ經始スル所アラントス汝百

官群臣ソレ協哉

明治二年己巳四月

口達書取

今度御國是ノ大基礎確立可被爲在御會議ニ付 勅詔之通被 仰出候間各見込之處書取ヲ以テ來月四日迄ニ可被差出候尙追々簡條を以御下問被爲在候間此旨可相心得候

但別段存付有之面々ハ參 朝可有言上事

四月廿二日

大政一新天下更始ノ折柄内外多難深被惱 宸衷屢 詔勅ヲ下サレ腎肝圖治被爲在候處實美短才微力切ニ重任ヲ辱メ未タ不續ヲ贊成シ 宸襟ヲ慰シ蒼生ヲ安スルコト能ハス恐懼措トコロヲ不知次第ニ候得共 聖眷優渥御責任ヲ蒙リ且今度 勅旨モ有之ニ付テハ彌以在職諸公及ヒ列侯ト共ニ心ヲ同シカヲ戮セ以テ今日ノ計ヲ爲ニ非スンハ焉ソ國勢ヲ挽回シ萬世ノ基礎ヲ立 皇國ヲ維持シ可申哉今日ノ事實實美獨リ諸公列侯ニ望ムノミナラス諸公列侯亦臣子ノ責ニ候得ハ冀クハ俱ニ 勅旨ヲ遵奉シ各肺腑ヲ吐露シ忌諱ヲ憚ラス 朝廷ノ爲メ建議指畫有之度候也

四月

輔

相

〔防長回天史第六編下〕

（明治二年夏期ノ大勢抄略）

二十二日山階宮以下特召ノ公卿及ビ四位以上ノ諸侯ヲ大廣間ニ召シテ調ヲ賜フ三條實美詔書ヲ捧讀シ更ニ其趣意ヲ口達シ手書ヲ頒チ六月四日迄ニ各自忌憚ノク奉答建言セシム二十三日又三等官竝ニ諸侯ヲ大廣間ニ召シ調ヲ賜フ儀前日ノ如シ四等官五等官及ヒ中下大夫上ハ實美大廣間ニ出テ辨事ヲシテ詔書ヲ捧讀セシメ六等官竝ニ下士以下ハ各知事ヨリ詔書ノ寫ヲ示シ此諮詢ニ關スル會議ハ是二十七日更ニ天下ニ布告シテ卑賤ヲ論ゼズ意見ヲ待詔局ニ建言セシム

明治二年

七七七

四月廿四日大原重徳公議所議長に任せらる

〔復古帳〕

(四月廿四日公議所より布告翌日月番三藩より御達)

是迄之職務被免議長被仰付候事

四月

大原少將
行政官

四月廿四日我藩在京都參政津田山三郎に東下を命す

〔明治諸扣〕

口達

其方儀御用有之中之急ニ而東京に被差越之

津田山三郎

四月廿四日

〔長崎文書〕(長崎伊太郎氏所藏)

至密ニ寸楮敬呈仕候然之津田山三郎方ニ一昨廿二日岩倉卿浪華方之飛札到着其大意之東京方近日兩度程飛脚着之處於彼表攘夷論沸騰ニ而殆と朝廷之御手厚ニ相成候事ニ而當時一統戮力協心を以大基礎を被論定候御若於肥後藩異論御邪魔ニ茂至り候而ハ後日如何之御迷惑ニ至り候哉も難測尤岩倉卿東京御着之上照幡列に之駕と御説諭之有之筈ニ候得共天下國家之ため至急ニ東下いたし一同盡力仕候様との趣ニ申來候處津田殿ハ兎も角も公論ニ被就候との事ニ而投出し成之處田中殿ハ一刻も被遣候方之説ニ御座候處松崎殿見込ニ而之迎茂只今同人衆被行候而も盡力ハ出來兼可申候其上

實學有名之人ニ候へハ於御國元之愈物議沸騰いたし候之必然ニ付邸内御人練六ヶ敷趣を以御斷之方ニ見込ニ而田中殿ニも承知ニ相成候趣同廿三日之朝松崎殿より御座候然處私儀之甚懸念仕候儀之邸内御人練を以御斷と申而ハ甚公私之境辭も不宜其上此節津田殿迄も御斷ニ相成候ハ、一國之論ハ素方出張之面々も惣而攘夷論ニ相成萬々一後日彼輩朝家之御妨ニ相成候節ハ後患之目前ニ存候間一刻も東下ニ而乍恐 君上御初御國論之筈而左様ニ無之段ヒツシヤリ雲上迄事之不發内ニ相貫居候様盡力被致度將又水の中ニ油の入候委ニ而十分之盡力ハ萬々見込ハ無御座候得共右之岩卿紙面を被差出可恐もの、後口方來候譯を駕と君上ニ被申上且休為殿ニ茂徹底承知ニ相成候ハ、外々ハ吞込無御座候而茂大綱領さへ動不申候ハ、實ハ九分之挽回ニ付瑣細之筋之不被取合候共可宜段々愚按之趣申述候處其方ニ相成東行ニ一決誠ニ胸を下り申候乍併岩卿方も決而此内議漏泄不致様との儀吳々申參候末且津田殿之方ニ茂をれ候而ハ不宜筋ニ付外ニ下廻通りニこじ附名義を以被差越候事ニ御座候右一條ハ松崎殿方夷則殿限り申回ニ相成御二方様へ竊ニ申上ニ而外ニ之不洩様との筈ニ御座候間為念私方も貴所様迄之極密申上置候間右之段御體認被下度尤松崎殿へハ一應話合得貴慮申候詰り小變動ニ之至り不申而之治り兼可申左モモハ一刻も兼而御方々様御誠實此度相貫居不申而之駈合ぬ事ニ付別而心配仕候處何方ニ茂能相貫大慶仕候所詮御國之沸騰ハ輕々緩々國家之安危ハ急ニ重々奉存候餘ハ期後雁草々如此御座候已上

四月廿四日

鳩太郎(吉)

彦兵衛様

尚々勿論御一見之上直御投火可被下候臨御飛脚差急亂走御免可被下候以上

四月廿五日暫く金札の貸付を停止する旨を府藩縣に達せらる

〔復古帳〕

明治二年

七七九

四月廿五日月番三藩方差廻來候御書附ノ内

府藩縣共石高ニ應し金札拜借可被仰付儀兼而御布告モ有之追々御貸渡相渡候處方今諸侯會議 御國是之輿論可被聞食
大議未定之折柄ニ付府藩縣共拜借殘之分當分御見合相成候間此旨爲心得相達候事

四月

行政官

(近世史料編纂綱例には四月廿二日府藩縣ニ分シテ暫ク紙幣ノ貸付ヲ停ムとあり)

四月廿七日在京都本藩重臣田中典儀書を在東京長岡休焉に贈り岩倉具視の勸誘に依り攘夷論者
説諭の爲め參政津田山三郎を東下せしむる旨を内報す

〔明治二年王政日新錄熊本縣、自筆牒控〕

至密ニ得貴慮申候然者津田山三郎へ去ル廿二日從浪華岩倉卿之飛札到來仕候其大意者近日關東より兩度程之報告ニ彼
表大ニ攘夷論沸騰ニ而始朝廷之御妨ニ相成候哉ニ而甚御懸念ニ相成候間東京御着之上ハ篤斗御説諭之答ニ御座候由乍
併此節天下之大基礎被論定戮力協心を以皇國御振興之御於肥後藩異論主張いたし候ハ、後日如何之災害可有之茂難測
其上御方々様ニ者別段之御親睦茂被爲在候處若御國之大事共相成候而者實ニ御心痛被成候事ニ付早々山三郎茂東下い
たし盡力周旋仕候様尤此儀相漏候而者重疊不宜候間堅漏泄不致様との事ニ候然處御地之形勢ハ一向不案内之事ニ而決
而左様之場合ニ者立至り居不申儀ニ者存候へとも萬一岩倉御懸念通ニ而肥後藩沸騰之施主共相成居候得者全天下中
論共相反し朝廷之御手碍と相成候者必然ニ而災害之來候も眼前之事ニ而實ニ縮首寒心之次第ニ存候依而篤と君上ニも
外勢被知召上候様同卿より來狀進呈仕徹底申上候儀山三郎に相含置御許へ差立候事ニ御座候勿論御役々々此儀内輪
被示置度事ニ御座候得共若相泄候而者第一岩倉之御爲不宜事ニ付君上と貴所様迄御承知ニ相成其外者駈引之御手心を
以御所置有御座度は祈申候素々君上ニ茂其邊之御遺算者被爲在間敷候へ共或者先度之御恥辱を被雪候御一念も千ニ一
も此論を御主張ニ可相成候へ共今日之謀者只々御恭順朝廷之御旨趣御遵奉ニ而御手障ニ不相成様御運ひ現信義朝野ニ

相立候上ハ御建白より押張候御奉公と歎ニ無之而者國家ニ益なきのみならず却而招禍候事と愚考仕候事ニ御座候實ニ
此一件ハ不容易筋と見込候間吳々不相洩様内外之御良策を被施行候様惻祈仕候此段至急得貴慮度早々如是御座候以上

四月廿七日

田中典儀

長岡休焉様

向々京都者大政官東京へ被引移且若殿様御下國ニ付至而閑靜ニ相成候間邸内公用方を初御人減之御取扱ニ相運ヒ候
間參政三人ニ而者過多之事ニ付敢作右衛門儀之長詰之末ニも有之御地より歸京之上ハ御國へ被差下方ニ存候將又松
崎傳助儀者暫被殘置旨嗣君之御内命茂有之候間山三郎儀被差下候外無之處同人儀者昨今着之人休其御取扱も重御役
之人を被相待候筋ニ無之候間幸此節東京之形勢を見置候ハ、向來一稜之御便利ニも可相成哉と衆議之上同人進退伺
中なら東下被仰付候中ニ名義を附被差下候間此儀茂爲御承知相達置候頓首(本書自筆牒控には廿八日の日付となる孰れ正なるか知らず)

四月廿七日我藩隊長内藤平左衛門下河邊次郎太郎兵百十餘名を率ゐ津輕應援として東京を發す
〔御在京御在府御在國共御記録〕

當今海陸諸道出張之兵員取調當五月朔日限御届可仕旨
御達ニ付津輕表爲應援志水一學列出張仕居候段者其御
御届仕置候通御座候處其後於東京猶又津輕表爲應援當
四月廿七日繰出候兵員左之通御座候

副隊長
釘本 藤内
北村 甚十郎
司令士
米 良 勘助
久野 万之助
池邊 平十郎

明治二年

七八一

一百拾五人兵隊總頭
官太師手共

以上

六月廿三日

軍務官
御役所

四月廿七日議定岩倉具視英國公使パークスと高輪應接所に於て二歩金引替攘夷の浮説等に關し談判す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月マテ
新録探案報告〕

明治二年五月廿一日發六月八日着東京ヨリ報告

岩倉卿英國公使ト御應接大意

英國公使パークス儀岩倉卿ニ拜謁致度旨兼テ申入候付御從者一人モ不被召具應接所に御越御面會之處過日輔相公始九名に申立候同様ノ趣申上候ヲ始終默シテ被爲聞云終テ後モフ其他ニ申サルノ事ハ盡タルヤト念ヲ入ラレ候得ハ無ト答フコトニ由テ彼卿憤然ト申サレ候ハ是迄ソナタテ英國ノ公使ニシテ文明ノ人ト思ヒシニ扱々見下ケ果タル者ナリ今説ル、所ノモノハ悉ク無情ノ論ニシテ贖金ノ事ト申今日ノ借財ハ皆舊幕府ノナシタル所ナリ然ルニ今其等ノ事ヲ以テ迫ルハ我ヲ助ルデハナク我ニ難題ヲ申テイジメルト云者ナリ既ニ一昨年ノ冬以來件々朝廷上ノ大機密ノ件々ニ至迄大小機密ノ件々ニ事有之即今ニ至斯々ノ事應ノ次第ニ運ヒシハ大ナル功ト云ヘシ我モ一昨年迄ハ外國人ハ禽獸ニ等シキ者ニシテ攘フヘク親ムハカラスト思ヒ居タリシニ執政以來段々各國ノ情實ヲ知り今日ニ至リ漸ニシテ交際スヘキコトヲ辨ヘ得タリ政府ノ上ニ立タル我サヘ斯ノ如ナルヲマシテ草莽之者ニ至テハ粗暴過激ノ業ニ及フハサモ有ヘキコト也夫ヲ察セスシテ只管迫ルハ情ヲ不知者ナリ斯迄迫ララルル上ハ斷然戰ニ決スルノ外別ニ施スノ術ナシ併貴國ニハソナタ如キ無情ノ人計リニテ

モナク文明ノ人モ有ト思ヘハ唯今日ヨリ使節ヲ馳セ斯ノ情實ヲ告テ後ニ戰フベシ天下蒼生是カ爲ニ苦ムコト實ニ不忍トイエト不得止ヨリ出レハナリト被申候所公使曰公ノ云ルノ所一々公論ナリ是迄諸君ノ説ル、所ハ皆虛飾ニシテ現在シタル事ヲ隱サレ眞ニ應接ノ成タルコトナシサルカ故ニ公ノ東京ニ至ルヲ待タルナリ斯ル眞實ノ論ヲ聞タル上ハ已ニ本國エ呼ニ遣シ置タル兵隊ヲ連ニ指留ノ横濱在留ノ兵隊ヲモ本國に歸シ且貴國ノ内政整フ迄ハ横濱在留ノ者英人計ノコトカ各國者ノコトカ不分郭外エ出ルコト當分ノ内禁スヘシ

右ハ他ノ議旨ヨリ借寫置

右五月十八日朝手ニ入

〔明治元年辰正月ヨリ十二月マテ
新録探案報告、佐田家文書〕

西京ヨリ五月報告

「アンケリヤ」ノ「パークス」岩倉卿ノ東京着ノ事ヲ聞參邸シテ面會セント云卿邸内ニ夷人ヲ享スル設ナキヲ以高輪ノ各國公使應接役所迄出駕セラレ應接有之候概略パークス曰貴國ト各國ト和親云々是ハ名アツテ實ナク下々ニ至リ攘夷ノ説ヲ成スモノ今ニ至テ止マス動モスレハ外國人ヲ暗殺シ或ハ馬車ヨリ引卸シ打擲不法ノ振舞多ク有之廟堂ニモ陽ニ信厚ナルヲ欲スト雖モ心中陰ニ攘夷ヲ抱クノ由恨ヲ隱シテ交ランヨリ我ニ兵アリ連ニ戰ン貴國如何ニト云岩倉公曰足下申サルノコト吾一々之ヲ聞クヘシ聞カレヨ吾國ト各國ト風土ノ異ナルヨリシテ自然ト教モ異ナリ各國ノ教法ハ吾治化ニタイテ害アルガ故制禁アツテヨリ以來吾民各國ノ人民ヲ賤シムルコト犬羊ノ如ク其人ヲ惡ムコト寇讎ノ如シ口ニ誦スルタモ猶汚穢ナリトス況ヤ面リ其人ヲ見其暴逆ヲ聞者ニ於テチヤ予固ヨリ斯思ヘリ且去春吾舊政府ヲ廢シ新政府ヲ立其ヨリ以來兵馬匆卒同十月ニ至リテ漸ク止ムト雖モ以後月數僅ニ指ヲ屈ス治化未タ四瀆ニ不洽モ固ヨリ然リ嘗而則貴國甚シキニ至リテ殺王殺吏セシコト有ト是ヲ以吾今日ノコトモ考ルヘシト云々問貴國等ノ各國吾ト交際ヲナス草莽ト條約

致タルヤ將タ 廟堂ト約シタルヤバークス曰廟堂ト約シタルヲ勿論也聊曰然則聊草莽ノ不法ナルヲ以テ足下動モスレハ戰ヲ唱フ是和親交際ノ道ナルヤ吾ハ不解也抑吾國ト貴國等ノ各國ト其形姿ヲ以テ比スレハ吾國固ヨリ不開殊ニ新政府創草ノ折柄尙六七才ノ小兒ノ如ク各國等ハ壯年ノ人ノ如クナラン然ルヲ壯年ノ者五六輩シテ六七才ノ小兒ヲ打擲セシニハ彌心ノ儘ナルヘシ雖然小兒死ヲ決シテ是ト戰ハハ小兒相應ノ事ハ又可爲也足下強テ戰ハントナラハ吾國ヨリ好ム處ニアラスト雖モ敢テ辭スル所ニアラストモ戰フベシ曩キニ足下吾有司ト當所ニ於テ談判セシ時飲器ヲ地ニ投付足ヲ揚テ之ヲ踏シトは何等ノ禮ソヤバークス語塞ル須臾有テ曰今迄貴國ノ有司ト應接スルコト數度ニ及フト雖モ未タ貴殿ノ如ク眞情ヲ云者ヲ聞カス故ニ吾國ノ情ヲ知ラス數々無禮ヲ云ヘリ請希クハ之ヲ免セヨ吾貴殿ノ指揮ニ應シテ如何ニモ心得在留五千ノ兵隊モ引取ヘシ而シテ交際益深厚ナランヲ欲ス貴殿希クハ之ヲ謀レ聊曰禮ヲ以テセン

右當月二三日比ノ一歟

〔明治元年正月ヨリ十二月マテ
一 新録 探索報告〕

雜記 己巳仲秋上旬 福田
(五月十五日竹舎拜とある書翰の一節)

一筆啓上仕候去ル四月廿七日の外夷應接ニ岩倉公の愉快論ニ而有志連聊以苦心を休め客秋兩侯身持放埒ニテ謹慎三學校知副事御免ニテ些正論家ノ憂を安し候得共市中馬車ノ横行築地新島原の妓樓を御紋付の幕を張見張番所ニテ兩刀を帶る人ハ刑官之役人ニ而も決而入れ不申畢竟ハ外夷の登樓を警衛の爲ふりと人心不平也(云々以)

〔慶應三年
探索書扣〕

各國返金之談判

外國懸ニ英將ハークス申出之急務ハ方今惡金ヲ外國に出し甚以不都合之。ニ付至急ニ壹歩銀ト引換候様申出候由尤舊

幕之時出し候貳歩金洋銀一弗ヲ我三步ニ相立ル其金位ニ候エハ子細無之處當時出候貳歩金ハ賈金ニテ各國ノ迷惑ニ相成大ニ不平ヲ抱キ居候ヨシ是全先般三岡八郎へ專任ニテ鑛山局ノ新造金ノ事 付札、本文八部惡金鑄造いたしたる條件ハ勿下ニ加置大ニ候得者此儀ハ於政府不相濟次第ニ付向後新ニ正金鑄造いムし當時會計官ヲ引替置ト云譯ヲ以談判中ニ而意ヲ述ル 即今一同返濟トモ期限差延し候トモ未タ決議ニ之相成不申候併切迫之模様ニ之無之今般正金鑄造ニ相成候譯ニ而之大略平和之談判ニ相成可申との御見込之事巨細ニ之御存無之との事

右五月十日條聊ヨリ山田十耶伺取

四月某日本月二日の海陸諸道派遣兵員調書提出の令達に基き我藩津輕應援隊出張人員を申告す
〔御在京御在府御在國共御記録〕

當今海陸諸道出張之兵員取調可申上旨御達之趣奉畏候
弊藩兵隊津輕表應援として左之通出張仕居候

- 隊長 志 水 一 學
- 副隊長 石 寺 九 兵 衛
- 司令七 永 屋 百 助
- 石 川 末 彦

一五十人 (兵隊嚮導裨官 太鼓手共)

右之外出張有無安許に分り兼申候其後出張之儀茂御座候ハ、追而御届可仕候此段御届申上候以上

- 四月 細川中將公用人 成田清右衛門
- 軍務官 役所

四月廿八日議定池田慶德謹慎を命せらる

明治二年

〔明治元年正月ヨリ十二月マテ
一〕新録探索報告

一償金之件ハ政府方三ヶ年ノ年延應接アリ公使バアクス一存ニ之決し難ク本國政府へ中遣し政府之所置ニ任スベシト其間之猶豫セル也

此程若説ニ伊達黃門公周旋ニ而三十ヶ年賦之應接相整ル由ナレト疑敷事ナリ

四月廿八日謹慎被 仰付候

池田中納言

同廿八日御不快ニ付御不參之處翌廿九日押而御出動被成候

伊達中納言

五月朔日 御不參

伊達中納言

右者横濱應接一件殊之外六ヶ敷相成東久世殿も御引込相成候趣ニ御座候

四月廿八日木藩執政米田虎之助藩世子護久及び長岡護美の使命を帶ひ藩政革新等協商の爲め鹿兒島へ向ひて熊本を發す

〔津田家文書〕

〔五月廿六日米田虎之助より津田山三郎への書翰抄略〕

小生ニも先月廿八日より薩に御使者とし而罷越日數十日之滯留ニ而大隅公御父子様ニも拜謁致し小松初メ伊地知黒田等參政之面々ニも出會別而小松寛々十分之話合致し國情も無殘吐露致し候處御三殿御一席大變革之御趣向之至極同意ニ而東京ニ而右等之御都合ニ相成候様ニト 朝廷に茂盡力可致との小松話合ニ及申候云々

〔子爵長岡家文書〕

一翰啓上仕候不順之氣候御座候へ共益御平安奉恐賀候京地ニテハ奉得拜顔候得共寛々御談も出來兼殘念ニ奉存候近日

ハ御病氣何程ニ被爲在候哉御自愛之程奉祈候此節ハ小生儀も昨年來腫氣差起其上水土ニ合兼申候も申分勝ニ有之候間百日之御暇奉願當月十二日京地より發足同十八日國許へ着仕候此節ハ虎之助御許に差出申候間委細之儀者含置申候事ニ御座候此品之誠ニ危抹ニ御座候へ共驗迄ニ奉入尊覽候御一笑被下候ハ、忝く奉存候先ハ右之段奉申上度荒々如此御座候恐々頓首

四月廿六日

右京大夫

大 隅 守 様

侍 史

尙々時下御自愛專一ニ奉祈候小生儀も參與被仰付實ニ當時勢何分動上候見込も無御座候へとも何も岩下無伏藏談合等もいたし別而懇意ニ被致小生儀大ニ仕合之事ニ御座候此上時勢等茂段々六ツヶ敷御座候間何も御懇親之儀ト奉願候右迄早々以上

一翰拜呈仕候梅雨之候益御堅剛奉大賀候過日者御上京之旨傳承致候處舊來之御脚氣ニ而速ニ御歸國ノ旨吳々御自重奉專祈候今般 鳳箴御東行ニ付而は修理大夫様ニも必御東行可被爲在愈以 朝廷之御紀綱相立候様懇禱仕候拙見右京大夫も過日上京仕候處病氣ニ付療養歸邑仕候間小子も不日發程之心得ニ御座候右京大夫も全快ノ上ハ早々出京ノ心得ニ御座候近來久々御安否も不奉伺候間拙价米田虎之助差出申候條以後愈以御親睦希望仕候過日伊集院直右衛門熊本に參り候御小子廻在中ニ而面會不仕残念の至リニ御座候へども御國政御一新之次第等者逐一承知仕深奉欽慕候於當藩も屹度一新之心得ニ而過日來彼是盡力罷在候得共越中守東京に罷在候間訊問仕候旁ニ而諸事厚配罷在候過日版籍奉還仕候上者萬事奉仰天裁候心得ニ御座候實ニ 朝廷之御紀綱愈以相立皇國之元氣振張仕候義懇禱之至ニ御座候間御賢考之趣等有之候ハ、無御腹藏被仰聞可被下候委曲虎之助に中含置候間左様思召可被下候先者時候御見舞旁呈寸楮候猶後音可申上候恐惶謹言

明治 二 年

七八七

四月廿八日

長岡左京亮

島津大隅守様

玉案下

向々御白重奉專祈候諸事後音可申上候早々不備

四月廿八日在東京本藩執政長岡帶刀藪圖書津輕應援隊の進止に關する件及び外國交際十七個條の詰問に對する公議人鎌田平十郎の答案等を在京都並に在藩の重臣に報す

〔一〕新録自筆狀、自筆牒控

（四月廿八日東京發長岡帶刀藪圖書よりの書翰抄略）

一津輕表援兵として内藤平左衛門下河邊次郎太郎先月着いたし候處其砌之格別異聞茂無之且御銀練も重疊迫切之折柄ニ付旁暫被懸置同所之景光見合居候處逐日賊軍固守ニ涉立至り可申哉ニ而官軍進擊之御模様ニ相聞候付右兩人儀用意濟次第早々出張被 仰付旨及達昨日爰許發足いたし候然處函館戰爭之次第等追々報知之趣別冊一綴之通ニ而一旦之官軍大ニ勝利を得勝ニ乘し賊軍を輕侮し却而十一日之敗走ニ至り候由之處猶盛返し賊軍退散彌以大軍御進擊之由就而之當時出張罷在候志水一學手茂右平左衛門列着之上之代り合歸府仕管之切組ニ而御座候得共如是形勢ニ相運ひ候上之平左衛門列一手ニ成諸事申談彌以無油斷相心得候様申向候事ニ御座候（本文別冊一綴とあり）一外國交際之儀ニ付而十七ヶ條御下問書寫之先便差進置候通ニ而御役々遂研究鎌田平十郎名宛之議案別紙寫一通差進申候 右之趣爲可申達如是御座候不悉

四月廿八日

藪岡帶刀書

田中典儀殿

執政衆中

副執政衆中

外國交際上國辱ヲ洗淨スル御下問

謹テ案外表入港以來既ニ十五六年ニ逾猶猶日ニ復一日遂ニ今日渠ノ輕侮ヲ受ルニ至ル 神州ノ耻辱何ヲ以テ之ニ加シ然ルニ當路ノ人亦此國羞ノ可耻ヲ省シテ之ヲ洗除スルノ方略ヲ問幸甚耻ノ人ニ於ケル大ナリ苟モ此心ヲ推擴ス外夷何ソ懾服スルニ足ラン政治何ソ修理スルニ足ラン雖然其本ヲ正シテ其國是ヲ定サレハ本ノ根ナク水ノ源ナキカ如ク凡事立ツ可ラス所謂綱舉目張ルナリ大綱大本一タヒ振スル時ハ事々從テ肅ス大綱大本ヲ論スレハ遂件ノ策題推テ辨ス可シ因テ今唯大綱大本ヲ反覆掲明メ支解條析ハ姑ク之ヲ置ク苟モ大本不立大綱不張ハ則和スト雖モ長久ヲ保タス戰ト雖モ勝利ヲ獲ス其大綱大本ハ他ナシ民ト共ニ此國是ヲ定此池ヲ鑿此城ヲ築キ義ト共ニ倒ルノ志ヲ堅クシ斯ク勇往必死ノ志氣アツテ後敵國克ツ可シ夷狄攘フ可シ齊桓ノ楚ト成ラク普文ノ秦楚ヲ制スル韓信ノ囊沙背水ヲ始トシ和漢古今ノ事概子此ニ因テ成ス且又人ノ人ト交接スル禮義廉隅ヲ持セサル可ラス如シ無之ハ則狎侮輕蔑終ニ相軋ス必至ノ理ナリ比年來 本邦ノ外國ニ處スル或ハ四海兄弟同仁一視ノ說ヲ主トシ或ハ彼ガ富強充大ニ心折シ親炙懇切ノ弊（本邦、マ、）テ此廉隅ヲ刑シ却テ彼ガ侮慢ヲ速ク憤激ノ士扼腕スル所以ナリ從今此國耻ヲ一洗セント欲ス他ノ良策妙術ナシ 朝廷上前ニ說ク處ノ志氣ヲ振起シ己ヲ罪スル明詔ヲ下シ賜リ下人々ヲシテ感泣憤勵セシム又既ニ所集ノ諸侯伯ヲ會同シ大ニ國是ヲ定メ國是一タヒ定ル各々國事ニ粉筆盡カスルノ誓ヲ立上下一同血ヲ歃テ盟フ此事迂粗ニ似タレモ上下ノ心志ヲ固ムルニ足ン賊抑又方今ノ時勢國力ヲ察スルニ和ニ出サル能ワス其和タルヤ從前歲月ヲ玩愒シ倫安苟且ノ媾和ニ非ス交際上禮制ヲ明 治 二 年

定主客彼此ノ分ヲ明ニシ五ニ狎養蔑如セサラシム然レ因仍愛ニ至リ一旦之ヲ革ム彼必ス聽サルコトアラン是事易ニ似テ實ハ難シト雖尙一説アリ彼ニ對シ國休民情ノ異ルユエン水土風物ノ別ナルユエン條理分明ニ説諭シ復説ニ永ク盟親ヲ保ツハ彼此ノ同ク好ム所ヲ以テシ且ツ彼我相接ス理非曲直互ニ有リ我ノ曲ト非トノ如キハ斷然之ヲ陳謝スルモ妨ナシ既往ノ事一切洗刷シ凡事是ヨリ新ニス如此時ハ我益アツテ彼ニ大ナル損ナシ聽從セサル時ハ亦人類ニ非ストス彼仍ホ倨傲依然トシテ我ヲ侮弄ス此時ニ當テ止コトヲ得ス義舉ニ出ツ何ソ不可ナラン右義ト共ニ倒ルノ志ヲ決シ禮義ヲ以テ彼ニ遇シ交際ニ規律ヲ存ス兩件是今日外國ニ交ル從事順序ナリ此事件措置ス廟堂人ヲ得ルニ論勿ク應對最モ人ヲ得サル可ラス在昔宋時富弼契丹ニ使シ獻納ノ字ヲ爭ヒ頗ル國體ヲ張ル其後靖康ノ難李綱金軍ニ行カント請フ宋主許サス李稅ヲ遣ス果シテ恇怯命ヲ辱ム是ヨリ金人益宋朝ヲ輕スル意アリト云是應對人ヲ擇可キノ明證ナレハ應接ノ期ニ先チ廣ク天下ニ募リ自薦ト人ノ推舉トヲ擇ハズ忠勇智略ノ士ヲ舉彼ト待接セシム軍防ノ如キ別ニ議スルモ亦晚カラス且夫レ近時ノ事ヲ視ルニ朝鮮ヨリ佛ノ教師ヲ歸ンコトヲ謝ス佛從ワス因テ之ヲ殺ス佛乃チ軍ヲ遣ス朝鮮國民之ヲ拒ク數千百ノ死亡アリト雖レ佛再ヒ來ルヲ得ス是國志氣ヲ一ニスルナリ又支那ハ上海香港ノ諸港盡ク洋人ニ與ヘ觀然トシテ無事ヲ幸トス此ヲ以洋人之ヲ婦人奴隸視ス苟モ朝鮮ノ決志ニ倣フ能ワサル時ハ支那ノ軟弱ノ如ク地ヲ獻シ幣ヲ出シ目前ヲ安テ苟モス可シニツノ者所擇ニ在ル而已然ヲ以テ察スルニ 神州ノ人氣ハ支那ノ軟弱ト異リ支那ノ轄ヲ踏ム時ハ必ス下ニ無名ノ暴舉アラシモ測ラレス是乃 廟堂他日ノ患ナリ是ニ由テ之ヲ考レハ今日國歩艱難時勢逼迫人々奮テ身ヲ不顧國ニ報スルノ時節何ソ斧鉞ノ誅ヲ懼レテ直言セサル可シヤ臨表誠恐誠惶頓首謹言

鎌田平十郎

四月廿九日松前口の官軍海陸併ひ進みて茂邊地及ひ矢不來を攻む賊兵潰敗し遂に七重及び五稜郭に走る

〔防長回天史第六編下〕

〔第二次ノ箱館戰爭上抄略〕

二十七日(四)清水谷總督將ニ本營ヲ江差ニ移サントシ此日青森ヲ發シ翌日江差ニ着ス弘前兵二小隊護衛ノ爲メ之ニ從フ松前藩亦一小隊ヲ出シテ守衛ス同日松前口ノ官軍進テ當別村ニ至ル黃昏賊兵來リ侵ス擊テ之ヲ退ク二十九日官軍海陸併ヒ進テ茂邊地及ヒ矢不來ヲ攻ム賊兵覺壁ニ據リ之ヲ拒ム官艦海上ヨリ先ツ賊ノ諸壘ヲ擊破シ陸兵勢ニ乘ジテ之ヲ奪ヒ進テ富川村ニ至ル賊退テ有川村ニ據守ス陸軍長驅之ニ逼ル賊遂ニ七重村及ヒ五稜郭ニ走ル時ニ賊艦千代田形少シク港外ニ出ゾ諸艦直チニ進ミ之ヲ擊タントス千代田形復々奥港ニ退ク此日ヨリ賊艦脫奔ノ虞アリ因テ諸艦交々港外ヲ警戒ス

〔探索書扣〕

(本朱書)

明治二ノ五月廿六日東京發之御飛脚西京に六月四日着ニ來ル六月七日之御飛脚より御國に差廻

野田大藏來札寫

四月九日乙部村ヨリ我兵揚陸即日江指村乘り取候次第之同所ヨリ拜呈仕候通ニ御座候處其後戰爭之件々大略左之通

松前口

一 四月十一日松前口進軍ノ先鋒札前村宿陣ノ處賊徒夜襲我兵敗走ニ陣必死防禦激戰彈藥盡キテ翌十二日東雲休戰小沙子村迄引退ク死傷四十一人

右同

一 同十七日松前城恢復第八字方先鋒原口村繰出シ進擊之處江良町村ニ而賊徒防戰我兵海陸方炮擊賊徒一時ニ敗走我兵尾擊清部村ニ而暫時休兵赤神村ニ而後陣待合セ各藩兵隊一同合シテ海邊山手一面ニ散兵立石野炮臺に進擊之處守リ堅固

之上賊必死防戦我兵死傷尤多く頗ル激戦遂ニ炮臺三ヶ所ヲ拔キ直ニ尾撃シテ松前城に突入恢復ス我兵死傷二十五人
木古内口

一四月十三日木古内口進撃之處胸壁堅固ニシテ我兵利ナク其日抜ク不能宿陣所々猶引退ク死傷十人余

一十七日再進撃遂ニ胸壁ヲ抜ク賊徒ヲ斃ス尤多ク我兵ノ死傷十一人

右同
一廿二日松前木古内兩口進軍ノ兵木古内ニテ合兵ス

右同
一廿九日兩口合兵ノ大舉ヲ以テ進撃矢不來ノ炮臺并天神社茂林ノ胸壁堅固我兵頗ル苦戦死ヲ不願進ム遂ニ賊敗走我兵

嚴敷尾撃シテ富川有川迄平治此日胸壁二十余ヶ所ヲ抜ク我兵死傷六十余人

鴉口

一十三日鴉口進軍ノ兵隊ニタ股賊據ニ進撃胸壁三ヶ所ヲ抜ク我兵死傷十五人余

右同
一廿四日方進撃同廿五日ニタ股ニ而胸壁ヲ突ク尤苦戦此日死傷三十二人余

右同
一五月朔日大野村へ突出我兵進シテカヤへ峠ヲシムル

一海軍モ頻炮戰アリト雖トモ不詳五月朔日有川沖ニテ我軍艦ヲ賊ノ千代田形艦ヲ分取リス

右之件々ニ而最早五稜郭一段ト相成居然シ此一戰余程難儀ト被相考申候賊情モ愈必死ト相見謝罪降伏スル者ハ至テ稀
ニ有之切迫ノ場合ニ臨ンテニ皆自殺仕候其他言上仕度件々も御座候得とも事繁ニシテ不能右要件まで卒爾言上仕候恐
々敬白

五月六日 十二字詔

御奉行衆中

有川ヨリ 野田大藏

〔岡本柳之助墓
文書北海道史稿〕

〔松前世家、第十八世松前德廣の條〕

廿九日我兵諸藩ノ兵ト賊ヲ失不來ニ撃テ大ニ之ニ捷ツ糾武隊副長用崎忠貞（原註、東ト稱ス）重傷遂ニ之ニ死ス小隊司令藤岡
溫知（原註、莊ト稱ス）モ又死ス參謀局ニ於テ我カ兵隊ヲ賞シテ金一百兩ヲ賜ハル

五月三日日本藩義に東京へ廻送せし救恤米代價計算書を下附せらる

〔復古帳〕

東京方來ル六月廿三日御國に申向ル

五月三日會計官方御渡之御書付

覺

細川中將殿

廻米代

高金四萬千四百九兩壹分 永七拾四文四分

内

金壹萬兩

金壹萬兩

金參千兩

辰十月二十三日 東京會計官ニ而渡濟

同十一月六日 右同斷

同十一月七日 右同斷

金壹萬兩 同十二月三日 右同斷

金五千兩 同十二月二十七日 右同斷

金九百九拾三兩 已二月十五日 右同斷

永貳百拾五文 小以

金三千四百九拾三兩貳分 大阪會計官ニテ運上所請

永百八拾七文三分 入用立替渡之分

金六百四拾九兩三分 神奈川縣取扱分諸入用

永二百四拾六文

金貳百三拾五兩壹分 東京運上所取扱諸入用

明治二年

七九三

永六拾三文四分

金六兩貳步

東京廻漕方取扱諸入用

貳口

金四萬三千四百九拾九兩壹分貳朱

永百三拾文

永貳拾貳文壹分

金百貳拾貳兩貳步

永七拾貳文七分

永五拾五文四分

右書面之渡過金上納可被致候也

小以

五月三日

會計官

五月四日各條約國へ渡航せむと欲するものには出願の上印鑑を下付すへき旨を達せらる

〔明治二年王政日新録〕

〔熊本縣廳所藏〕

〔五月四日辦事御役所にて東園宰相中將より交付の書付四通の一〕

自今條約濟之各國へ罷越度願出候者ハ御許容之上御改定之印章可相渡ニ付右志願之者ハ其府藩縣ヨリ東京外國官并大坂長崎箱館兵庫新潟神奈川外國掛役所へ可願出事

右之通於東京被 仰出候間相達候事

五月

行政官

五月四日日本藩主詔邦求言の大詔に奉答する爲め人材登庸、學校建設、外國交際、海陸軍務の四項を掲げて意見を上陳す

由明治二年至三年

〔一新録自筆狀、復古帳〕

臣詔邦頓首々々敬白今般 皇國ノ大基礎被爲建候ニ付 御垂問謹テ奉對仕候臣詔邦請劣不肖事體ニ於テ特識達見モ無御座候得共至廣至大ノ 勅詢ヲ蒙リ不忍緘黙候間忌憚ヲ不願上言仕候務謂維新以來兵馬倥傯事務紛擾ニシテ御德化未タ

草木ニ治カラス其故ハ大本未タ立タス大綱未タ振ハサル儀ニ候歟ト奉存候大本トハ他ノ儀ナク廟堂上一和一致協心戮力邦家ニ殉スル志ヲ持スルニ有之大綱トハ刑賞黜陟嚴明ナルニ有之其他節儉ヲ勤メ禮節ヲ重シ功利ヲ棄テ誠道ヲ貴ノ等ノ類臣カ贅言ヲ待タス方今緊要事ト奉存候件々四條左ニ分疏仕候

第一

人材御登庸 伏惟國家ノ隆替存亡ハ成ク人ノ善否ニ由ル如何ニ制度禁令ヲ精密ニ致シ候テモ設施其人ヲ得サレハ一日モ行レ難ク古語所謂法ハ由レ人而行又ハ有治人ニ而無治法ノ類ニテ人材ノ國家ニ關係スル事如此重大ニ御座候依之維新後閱寒微ヲ不擇シテ御採用有之候へ共既ニ期年ヲ過ル今日ニ迄テ未タ治績ヲ 奏スルニ至ラス窃ニ見ル百官中或ハ其人ヲ得サルノ弊有之哉其弊ノ起ル所以ヲ察スルニ未タ選舉ノ法ヲ得スシテ人々互ニ相推舉ス此ヲ以テ蔓引相進習弊未タ除サルニ似タリ且夫方今滿 朝才藝ノ士不乏ト雖天下衆望ノ係屬スル人トテハ指多屈ス可ラス抑人ヲ用ル自ラ本末ノ異ルアリ其本ニ居リ其長ニ立ツ人極テ方正醇厚ニシテ德望アル君子ヲ擇ヒ之ヲ以テ源ヲ澄シ本ヲ正フシテ後始テ多才多藝ノ人モ各其用ヲ成シ事業ヲ務ル事ヲ得ヘシ所謂賢者在位能者在職ト云如ク相成度候間今ヨリ盛ニ學校ヲ興シ養才選人ノ法ヲ御設可有之候得共其効驗目前可收儀ニ無之因テ假リニ鄉舉里選ノ法ニ倣ヒ府藩縣ニ令シ租額十萬石ヨリ一萬石ニ至一員ヲ率トシ十萬石以上毎十萬石一員宛超群拔萃ノ人ヲ公選シ凡其人ノ姓名年資及ヒ德行文學政事ヲ始メ各其人ノ所長ヲ簿ニ概記シ春秋兩次之ヲ官ニ呈上セシメ大小官吏缺時ハ右簿中ヨリ選任ス左候得ハ濫選ノ弊モ革リ可申ト奉存候

第二

大小學校ヲ興ス 伏惟我本邦ハ大地ノ元首ニ特立シ太陽正氣ノ鍾ル處固ヨリ 神聖ノ大道アリテ至教不言ニ存ス加之西土周孔ノ道ヲ資取テ益風化ヲ厚ス是ヲ以往昔 皇威ノ四裔ニ光被スル偶然ニ非ルナリ中世以降名教紊亂大道ノ地ニ墜ル久シ周孔ノ教亦虛假ト爲ル而已ナラス目今ニ至リテハ西洋ノ事ヲ崇信スル者多ク彼カ富強ニ心醉シ漸々彼ノ風習

ニ漫淫シ究竟教法マテモ彼ノ耶蘇天主ノ道ヲ學フ可シト云ニ至ル果シテ然ラハ神州ノ民左衽被髮ノ俗ニ變シ君父ノ何物タルヲ知ラス剝床ノ極ハ遂ニ彼ノ所屬ト爲ラン神州ノ大恥何ヲ以之ニ加シ且 先帝在天ノ靈ニ被對何ノ御面目可相立哉邪教ノ如キハ痛ク嚴禁シ禍源ヲ絶タサル可ラス然トモ彼ノ妖教ヲ防キ候モ此ノ正學明カナラサレハ必ス蒙テ伺ヒ隙ニ投スルノ患アリ今ヤ維新ノ際ニ當リ大ニ學校ヲ興隆シ祖宗ノ大道ヲ掲明シ綱常倫理大義名分ヲ正シ天下ニ祭然タラシメ根本反始ノ義國體尊嚴ナルユエン上下人心ニ決洽シ周孔ノ道學ヲ更張シ講習討論ヲ以才德ヲ淬勵シ往昔敦美ノ風ニ復シ候様御誘掖有之且又從來列藩既ニ建置スル學校規則ヲ一々呈上セシメ之ヲ昌平費ニ集メ取捨損益シテ大成ノ學規ヲ相立候上其學規ヲ天下ニ傳布シ標準ヲ取ラシム天下人々ヲシテ學ニ嚮ハシメ當路ノ人亦日夜心ヲ經史ニ潛風俗ヲ厚シ魯倫ヲ明ニスルヲ以テ念トセハ治道ノ立サル儀ハ有之間敷奉存候

第三

外國御交際 伏惟和戰守三ツノ者一理ニ御座候高城深池有之候テモ守ル能ハス何ヲ以テ戰ン堅甲利兵有之候テモ戰能ハス何ヲ以テ和セン守レハ固ク戰ハ勝ノ本アツテ社共和モ長ク保ツヘク候戰守ノ根柢ヲ定メス徒ニ媾和而已ヲ事トスルトキハ國勢益卑ク命ヲ人ニ制セラレ自立ノ道無御座候且夫戰守勝敗ノ數盡ク高城深池堅甲利兵ニ係ルニ非ス只氣ヲ主トス自古事ヲ成敵ニ克ツ大抵氣ヲ以テ主トス蓋シ氣事ニ勝ツトキハ事成氣敵ニ勝ツトキハ敵服ス然ルニ今西洋各國砲艦強大ニ畏レ逆モ彼ト勝負ヲ較フ可ラスト人氣委靡恒怯遂ニ手ヲ空シテ彼カ壓制ヲ受ク砲艦ノ利本邦素ヨリ彼ニ及ハス然トモ彼ヨリ横逆無禮ノ甚トキハ義ト共ニ斃ル、ノ志氣無之候ヘハ何ヲ以彼ニ對峙セン今日ノ急務人々勇往果敢ノ氣ヲ養フニ在リ其本ハ廟堂之ヲ鼓舞振起スルニ有之也

維新後萬國ト并立ノ御國是ヲ被開彼ト和好ヲ厚クシ玉フ然ルニ彼ノ強梁今日ニ至リ甚シ其原由ハ信義立兼候處ヨリ彼ヨリハ益輕侮ヲ加ヘ候儀ト奉存候然ルヲ今更拒絕掃攘スル如キハ名義不相立曲上ニ曲ヲ重ネ候ニ付不相替和ヲ以テ交ルニ如カス共和タル從前倫安姑息ノ和ニ非ス節制禮義ヲ以接スル和ニ御座候向後御手前ニモ信義ヲ不被爲缺様御確定ニ相成理非曲直然ト商量シ我非ト曲トノ如キ反覆陳謝シ是迄ノ條約ヲ變シテ新條約ヲ定メ長ク和媾ヲ保シ事ヲ談判ス彼若シ聽從セス横逆不息トキハ斷然義舉ナキ事能ハスト奉存候執事ノ人若シ之ヲ省セス在再日ヲ送り憂ノ己ニ在ラサルヲ幸トシ之ヲ遠ニ遣ントス臣ヲ以テ見ルニ憂ノ來ル遠ニ非ス抑憂ノ子孫ニ在ルモノ吾身ノ見ルニ及ハヌヲ幸トスル也憂吾身ニ在テ數十歳ノ外ニ出ルモノ目前未タ見ルニ及ハヌヲ幸トスル也今ヤ憂目睫ニ在リ如何ソ是ヲ防カサランヤ之ヲ防クノ術他ノ方無之前ニ説ク節制禮義ヲ本トシ御交際可有之儀ト奉存候

第四

海陸軍務 伏惟戰ノ勝敗ハ事ノ曲直氣ノ張弛ニ在リト雖治不忘亂安不忘危ハ古今ノ道理ニテ兵備ハ一日モ緩ニセサル可ラス况方今西洋各國宇内ニ横行シ頗ル本邦ヲ睥睨スルノ勢有之候間豫メ不虞ノ備ヲ被設置度因テ府藩縣ニ令シ兵賦ヲ出サシメ兩京各道ニ兵團ヲ編制シ府縣中ニモ兵備ヲ設ケ候國ヲシテ獨リ兵權ヲ擅ニセシメス又右兵賦中ヨリ許多ノ軍艦ヲ買入レ竟ニハ本邦ニモ巨艦製造所ヲ開ク可シ而シテ諸港ニ海軍場ヲ設置水操ノ法ヲ習練セシム然トキハ往々砲艦モ西洋ニ不考様ニモ可相成ト奉存候

右四條當今急務ノ大節目ト奉存候素ヨリ遼豕非蛙ノ見大方ノ笑ヲ招ク可ク候得共 聖明萬分ノ一ヲ裨補スルニ足ラハ何幸カ之ニ如シ臨紙不勝戰慄之至誠恐誠懼頓首再拜

源 韶 邦

五月四日東北出兵の毛布拜受に關し我藩奥州出張兵調書を軍務官に進達す

〔明治王政日新錄（原本）、御在京御在府御在國共御記録〕

東北出兵先般毛布頂戴之御品被渡下候間人員書取三月五日迄申上候様御達御座候處御當地ニ而分兼候付御猶豫奉願於國許取調候處弊藩奥州出兵左之通御座候

一總員七百六拾五人

内

戰爭之節死亡

拾六人
七百五人

此分者奥州引揚東京着之上於同所代金を以被下置候付銘々手元におゐて現品相整頂戴仕候

殘四拾四人

此分未頂戴不仕候

右之段御届申上候以上

五月四日

細川中將公用人

宗 村 加 兵 衛

軍 務 官

御 役 所

五月四日日本藩所有汽船萬里丸の航海日程を軍務官に申告す

〔明治二年王政日新録〕(熊本縣廳所藏)

弊藩所持之蒸氣船萬里丸於兵庫東京御用之石炭積入運輸仕候様被仰付候段之當二月御届仕置候通御座候右之正月十八日兵庫港出帆同廿二日東京着仕候其後奥州青森迄乘廻候様被仰付候得共古鑑ニ而御用難相勤段御断申上候處願之通被免候付三月十八日品海出帆同廿六日歸帆仕候此段御届申上候以上

五月四日

細川中將公用人

宗 村 加 兵 衛

軍 務 官

御 役 所

五月七日漢學所に寄宿寮を建設し皇族公卿の希望者は入寮を出願すへき旨示達せらる

〔明治二年王政日新録〕(熊本縣廳所藏)

〔五月七日醍醐少將より我藩公用人へ渡したる書付二通の一〕

今般漢學所ニ於テ假ニ寄宿寮被爲建候間三十歳以下之宮公卿入寮致度輩ハ漢學所へ可願出候事

但入寮日限之儀之漢學所ヨリ差圖可有之候諸侯以下之輩ハ當時寄宿寮狭小ニ付追而御取建之上可被 仰出候事

五月

行 政 官

五月七日金札と正金との交換を禁止せらる

〔明治二年王政日新録〕(熊本縣廳所藏)

〔五月七日醍醐少將より渡したる書付二通の一〕

是迄金札相場被立置候ニ付夫々引換等モ有之候處今般正金同様通用被 仰出候上之金札ヲ以當時通用致居候正金ニ引換候儀之堅ク停止タルヘシ尤爲融通釣銭等引換候儀之格別之事

但大札ヲ以小札ニ換ヘ或ハ小札ヲ大札ニ換ヘ通用致候儀之可爲勝手事

右之趣堅ク可相守萬一心得違金札ヲ正金ニ引換候者於有之と取引人双方共可爲曲事

右之通金札之儀ニ付於東京再應被仰出候間篤々相心得通用可致候此旨相達候事

五月

行 政 官

五月七日日本藩奥州及び上野戦争殊勲者に對する恩賞を與へ且つ諭告する所あり

〔明治二年諸控〕

奥州並上野戰爭之節戰死殊功手負之面々迄今日御賞美被仰付其餘之小倉戰功御賞美殘共引續被賞等候然處右數ヶ所之戰爭孰茂艱難無申計就中奥州出張等數百里之外非常之苦戰を遂候付別而重く御勸賞被爲在度思召ニ候得共即今御一新之御諸藩一同版籍御差上ニ相成與奪之權總而 朝廷ニ歸シ候上之乍恐御領地茂御私有ニ無之且之天下之形勢ニ隨御變革茂無之候而之難相成彼是不被得止次第ニ而舊知之家筋御取扱を初今般之御賞美茂是迄通ニ之難被仰付深被遊御心痛候右等之事情一統茂篤と勘辨いたし候様可申聞旨御沙汰被爲在候條其旨奉敬承組々ニ茂可被示置候以上

五月七日

奉行所

〔明治二年轉職進階帳〕

五月七日

中渡

志水坂新内 志水九左衛門

内同道

柏原新左衛門

其方父柏原要人儀去年五月上野戰爭之節相組を勵し進擊應援を茂いたし前後指揮筋行届且所々分隊警衛等ニ付而茂格別心配いたし候付目錄之通被下置旨被仰出之

中折銃

一挺

御紋附御槍

一

松井直記 内同道

大河原次郎九郎病中ニ付名代

志水新丞

大河原次郎九郎儀去年八月奥州表數度之戰爭前後指揮筋行届組中能働且滯陣中巡邏番兵等之儀茂晝夜不一形致心配候付目錄之通被下置旨被仰出之

シヤムライフル銃 一挺

御紋附御小袖 一

宮村庄之丞同道

木造誠之允

和田權五郎

其方共儀去年五月上野戰爭之節組子を勵し山内ニ進擊拔群相働且滯陣中組方指揮筋行届諸事格別致心配候付五拾石宛御加増被仰付旨 被仰出之

畢而御加増分御藏米ニ而被下置之

志水坂新内 志水九左衛門

内同道

山路太左衛門

其方儀去年五月上野戰爭之節督府守衛として出張組子に炮發致せ東京滯陣中指揮筋行届別而三番丁歩兵請取等差入非常之盡力いたし候付五拾石御加増被仰付旨被仰出之 畢而、御加増分御藏米ニ而被下置之

同人同道

河田和氣之助病中ニ付名代

明治二年

八〇一

門池三七郎

河田和氣之助儀去年八月原竈戰爭之節本頭之場ニ而組子を勵し烈敷及炮戰其末今泉迄進撃いたし追而兩度之戰爭指揮筋行届毎度涯分を盡し拔群相働且滯陣中巡邏番兵等諸事身を以先立晝夜格別辛勞いたし候付御足高百石御加増被直下置旨被仰出之

畢而、御加増分御藏米ニ而被下置之

參政之内同道

中村吉兵衛

其方父中村左助儀去年八月原竈戰爭之節組子を勵し烈敷及炮戰其末今泉迄進撃いたし追而兩度之戰爭指揮筋行届毎度涯分を盡拔群相働且滯陣中巡邏番兵等諸事身を以先立晝夜格別辛勞いたし候付百石御加増被仰付旨被仰出之

畢而御加増分御藏米ニ而被下置之且御方儀父に付添敷度之戰爭烈敷炮發ニおよび相働候付目錄之通被下置旨被仰出之

御紋附木綿御上張 一

(中略)

右之通御用番郡夷則申渡候事

〔御國東京往來狀扣〕

(五月九日在國執政副執政より在京郡田中典儀在東京長岡帶刀數圖書宛通報書抄略)

建山林右衛門

右者五男建山四郎彦儀右同斷之節相働戰死ニ候付別段之

國部安記

思食を以毎歳八木貳拾俵吊料として被下置旨

右者父國部新左衛門儀右同斷之節相働戰死ニ候付其方に被下置候御擬作高百石追而代替之節茂右戰死之譯之可被立下旨

松本次人

右者父松本傳十郎儀右同斷之節及炮發相働居候内銃彈ニ中り追而相果候付其方に被下置候御知行雖爲新知道而代替之節茂右之譯之可被立下旨

境野素兵衛

右同斷之節相組引立相進及炮發銃彈ニ茂中り相働候付シヤミライフル銃一挺被下置旨

千場才助

右同斷之節分隊を勵し烈敷及炮戰其末今泉迄進撃いし追而兩度之戰爭涯分を盡指揮筋行届毎度拔群相働滯陣中巡邏番兵等晝夜骨を折候付御擬作高百石被下置御知行取格被 仰付旨

宮川豊熊

右同斷之節分隊を勵し烈敷及炮戰其末今泉迄進撃いし追而兩度之戰爭指揮筋行届涯分を盡相働滯陣中巡邏番兵等晝夜骨折候付毎歳八木三拾俵被下置旨

建山三郎彦

右同斷之節拔群相働薄手を負其後兩度之戰爭ニ茂格別相働候付御紋附御帷子一白銀三枚被下置旨

右之通一昨七日中申渡候

右之通候事

五月 五月八日上局會議開設せらるゝを以て無職皇族以下上士以上出席すへき旨令達せらる

明治二年

〔復古帳〕

五月八日辨事傳達所ヨリ御渡之御書附寫
今般上局會議被開候ニ付無職之宮堂上諸侯及中下大夫上士之面々出席會議可致旨被仰出候事
但當分大廣出ヲ以テ會議所ト被定候規則及定日等追而御沙汰可有之事

五月

今般上局會議被 仰出候ニ付テハ中下大夫上士之面々ハ別紙之通席々總代ヲ以會議可致事

行 政 官

五月

別紙

上士席 三人

右總代之儀ハ追テ御沙汰可有之事

中大夫席 二人

五月

下大夫席 五人

五月八日租稅上納等金納すへきものは總て金札を以て納入すへき旨を達せらる

〔復古帳〕

五月八日辨事御渡

先達而被 仰出候租稅其外諸上納物金納之分金百兩ニ付金札百貳拾兩を以當分上納御定之處今般改而金札之儀之正金
同様被 仰出候ニ付以來金納之分之總而金札ヲ以テ相納候様可致尤場所ニ寄金札難調向ハ正金ニ而も不苦候事

五月

行 政 官

五月八日金札相場を廢し正金同様通用せしむべしとの主旨を郡村市街の吏員に諭告し普く人民に徹底せしむへしとの示達あり

〔明治二年王政日新錄熊本縣、復古帳〕

〔五月八日東園宰相中將より宗村加兵衛へ渡し〕

今般金札之儀斷然相場廢止正金同様通用可致旨被 仰出候就而者共 御趣意其實地ニ貫通せしめ候儀之全ク府藩縣とも地方官之任ニ有之候處御發弘以來時勢不得止りと之申御仕法筋履相變し候事ニ而當度之 御沙汰之新貨幣鑄造被爲在之上之改而引替之道被相立との御發弘年限中確乎不易之御決議ニ出候得共唯御布告書のミよてハ前日之蹤跡ヲ以て又候一旦疑惑可致哉ニ付右萬民 御仁恤之御趣意郡村市街役方之者に懇切ニ告諭し役方之者ヲ普く告諭せしめ自今更ニ疑惑及不抱總而賣買之道融通ニムし候様引請々々ニおゐて精々可致盡力此段相達候事

五月

民 部 官

右之通於東京民部官ヨリ觸達候間爲心得此段相達候事

五月

行 政 官

五月八日長岡護美熊本を發して上京の途に就く
〔御留守日記〕

五月八日雨

一左京亮様御上京として今朝五半時之御供揃御發途御乗切にて小島迄御出同所御一泊明日凌晨雲丸に御乗船被成御渡海等候事

五月八日長岡護美軍務官副知事を免せらる

〔新錄自筆狀控、自筆牒控〕

明治二年

長岡左京亮

八〇五

軍務官副知事被 免候事

五月

明治二年五月十一日東京發之官脚同廿八日着自筆狀

左京亮様御免職之事

以別紙申達候 左京亮様益御安泰御上京被成候半と恐悅奉存候然ル處去ル八日公用人御呼出ニ付罷出候處梅溪宰相中將様を以 左京亮様軍務官副知事被 免旨別紙御書付御渡有之候趣相達候付直様 太守様は申上候右之御儀實々不量御事ニ而乍恐奉懸念密々此節之御様子を相探申候内閑叟様は外御用ニ付而林九八郎參殿之節御免職之儀之御同方様御聞込此節御人減ニ相成候趣ニ而久留米侯も御同様之由少茂御懸念不被成様被仰聞將又三條公は山田十郎參館之刻相伺候ニ兵事先平定ニ而御役員茂被減候譯ニ付聊御懸念ニ不及 太守様は茂御安心被遊候様就而之今般西京に御登之儀條公思召御尋申上候處御免職之上之御上京ニ茂不及候得共西京御守衛之譯ニ而御登ニ相成候ハ、御都合之猶更宜敷候半との御内話茂有之且又岩倉は照幡列之助罷出候處三條公御同様之趣ニ被仰聞至極之御都合ニ付此節御上京之上之暫御滯京被爲在候ハ、三條公岩倉卿當り猶承籍御東下御都合之蔽作右衛門を御差立委敷被仰進候方可然ト 太守様思召候條左様御承知 左京亮様は右之趣巨細被申上作右衛門上京迄ハ御東下御見合被成候様ニと奉存候前文御達之儀直様可申上處内輪密々探り茂入彼是ニ而兩三日延引茂いたし候間旁今日態ト御地に急脚差立此段爲可申達如是御座候不盡

五月十一日

藪 書
長 岡 帶 刀

田 中 典 儀 殿

再伸御國へは御便宜次第前文一ト通御申向有之度存候再白

行 政 官

五月某日佛國船艦箱館より來りて横濱港に入る又英船オーサカ號同港を發し大坂へ航行中浦賀沖にて破船し船將以下溺死して存するもの僅に二三人なり

〔探案書扣〕

五月十三日内々柳川春三手ニ入候書付也

當港新聞

兩三日前佛船インヂベント箱館入津其船之水夫者日本人甚多しといふ政府より右水夫吟味いたし度事有之趣を以此船に士官遣度旨佛岡上は及談判候得とも岡上不許之一昨日英公使此船を訪ふ、辭して不容昨今之右水夫等一兩人宛裁判所に差出候様懸合中也一昨日佛軍船三艘箱館入津内一艘直ニ出帆外二艘之猶碇泊す
一英船オーサカ昨夜當港を發し大坂ニ赴く同夜浦賀沖ニ而破船いたし候船將初乗組之者皆死兩三人殘居候由日本人も二十人程乗込居候

一兼而評判之佛人モンブラン昨日大坂より當港に着す蓋し政府より招きしふるべし終ニ之當港之御用ニ而も勤候哉も難計様子あり

五月九日夜

石 川 長 次 郎 拜 啓

楊 江 先 生

規 北

五月十日自今官衙に藩士を採用するには其官廳より直達すへき旨の示達あり

〔明治二年王政日新錄〕(熊本縣廳所藏)

明治二年

(五月十日東園宰相中將より我藩公用方成田へ渡しの書付)

是迄諸藩士御雇被 仰付候節總而行政官ヨリ相達候處向後諸官並府縣等へ相雇候輩ハ其官其府其縣之知事ヨリ直達可

召出聞爲心得相達候事

右之通於東京被 仰出候間相達候事

五月

行政官

五月十日諸藩邸内にて發火演習することを禁止せらる

〔明治二年王政日新錄^{熊本縣}、復古帳〕

(五月十日東太郎平より増田十之世へ渡しの書付)

諸藩に

於藩邸火入操練之儀は自今被差止候間更ニ當官に願之上河東練兵場に可罷出候事

五月

軍務官

五月十日元三河郷士河合縫殿介等の陰謀露顯して捕獲せらる

〔明治三年ヨリ探案書控〕

五月十一日新聞

昨夜下京邊へ軍防官より二小隊巨魁河合縫殿介之助外五人程御召捕ニ相成候惡謀之恐多も 主上を奉始宮堂上方其外天主
教ニ堅入レテヒ御國體何ヲ以可立哉依而 姫宮ヲ 女帝ニ尊奉シ御國威ヲ海外ニ輝サント欲ス同志之輩三越州に者爲
促罷越候由右連判之内貳人自反之事訴訟スト云々

右ニ付道路之説

被召籠候者ハ新多田隊ト中向ニテ右者共同志多興正寺御門跡ヲ押立諸道各宗ヲ相集メ及穢多共迄相集メ可申專獲夷之
論ヲ唱過日大坂天王寺ニ集會申談之上尙亦京地東寺ニ而當十五日大會之上事件可相發處露顯ニ相及候旨尤奉 敏宮様
舉錦旗企陰謀候由堂上梅溪八條兩公モ御加リ之趣同志重モタル者昨今迄二十一人計召捕夫々京都府へ引出候旨右ニ付
先事之止候得共多人數之儀宗門柄右余賊之氣配如何哉之風聞ニ候事
右五月廿六日阿州藩久米高太より手ニ入申候事

猪俣才八

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄〕

明治二年五月

元三州郷士之由 河合縫殿介 元阿州藩之由 岡田四郎

元尾州藩之由 山田非雲齋 元太田原藩之由 手塚爲之助

右縫殿介張本として同志盟約之者凡人數三州州^街ニ二三千人越後ニ四五千人計も有之尤企之趣意ハ六七月頃ニ暴發致し
御所炎上之策ヲ起シ且 靜寛院宮様ヲ奉擁候而東京に押寄可申之企有之哉之由非雲齋外三人之者ハ七八日頃刑法官に
反忠自訴及候露顯致し十一日ニ至六條會所ニ屯居之士國所不詳由左之五六人御捕込相成候哉之趣尙又多田郷士之内
ニ而一兩人京都府に被呼出御取糺之儀茂有之由尤魁首河合縫殿介未タ行衛不相分御手當中之趣前件徒黨之人數多勢之
風聞有之未詳候得共自訴人ハ申立候所ニ而ハ不容易計儀ニ而未發之以前露顯ニ及候ニ付近々瓦解之姿ニ可相成候得共
何分油斷難相成形勢ニ御座候由及承候ハ此段不取敢申上候以上

五月十四日

六條會所ニ而被召捕候者

神崎一二三 岡本齋宮 田中長三郎 松尾内記 小舟鐵二

明治二年

右之當十日ニ御召捕其後日々御捕込相成候者有之由

〔全書〕

明治二年五月十七日近藤信之助達同十八日御國に遣ス

一去十日比肥後藩中不審之者も有之由ニ而目明共大宮通り並御邸近邊を心懸頻ニ相伺候休市人等怪居中候

一同夜不明門下ル珠數屋丁多田隊旅宿に軍務官兵士御差出ニ而召捕候名前左ニ

多田隊長

河合縫之助 岡本齊

同隊

田中長三郎 森尾内記 山下七郎 森尾十郎 青山大助 中小路楊之助 安藤軍二

右召捕軍務官懸ニ而京都府に入牢

右御手當

坂上兵庫 田中兵藏

右之外八十人計京都府に御呼出ニ而追々御調中之由猶此外ニも散亂いたし候者も有之趣然處右調後段々罪證明白ニ而御返しニ相成候輩も有之當時入牢之者名前左ニ

青山大吉其外四人

一同十四日夜ニ入福田秀一被召捕

一當時伏見隊

十津川隊 一少隊 多田隊 二小隊 東山隊 同 神衛隊 四小隊

此之加茂上下方許多有之よし

此度疑惑之條有之事關本藩哉

眞激隊 一小隊 奇正隊 半隊

此ハ久留米方許多之由

ノ十小隊半五百人餘

右判事河田左久馬取締田村順藏大隊司令使前田直人

一道路之風説浮浪存念ニハ自然今般於東京攘夷之儀相立不申様成行候ハ、和宮様職と記の宮様を奉取立東京に下向

當席を發し奉り攘夷之事を主張せんとの事密謀

一伏見兵隊之内隅莊一郎と申者去ル六日比探索之爲致下坂候との口上ニ而中村藏人方に立寄同人口上ニ之 天子水藩に

御運幸右水藩之松前松平太郎ニ關係有之遙ニ應援をふし居候由談し申候

一福田秀一事近日之物語ニハ某等平生徳川氏ニ於而聊の怨惡あるニ非らそ只攘夷之一件ニ付不得止一昨年之大擧ニ力を

併て是を倒し事を得たり然ニ當時御一新ニ相成候後其節有功之者御擧も無之夷人之益跋扈ニ及候段誠ニ唯今ニ至リ

候而之徳川氏ニ對し而も面目なく氣之毒ニ存候由

一今般伏見隊之一件若江家等之見込ハ全ク佐幕ニ關係いたし候との事以上

五月

近藤信之助

五月十一日言路洞開の爲め各官府縣に於ても下情壅蔽せしめさるやうとの旨示達せらる

〔復古帳〕

五月十一日辨事傳達所ヨリ御渡之御書付寫

先般待詔局ヲ被開草莽卑賤之者ニ至ル迄御爲筋之儀献言致候様御布令相成候ニ付追々存付申出候就而ハ重大之事件ハ上裁ヲ經夫々御取捨相成候得共各官府縣限りニテ可否決定可相成程之事件申出候族ハ待詔局ニ於テ一應尋問之上爲證

明治二年

八一

據局印ヲ押シ其官及府縣へ向當人差越書而爲差出候間其事之可否得失ニヨリ取捨可致ハ勿論假令即今採用難相成儀申出候共懇切ニ説諭ヲ加ヘ言路洞開下情壅蔽無之様トノ御旨意貫徹致候様可取計旨被仰出候事

五月

行 政 官

五月十一日 是より先き本藩米田虎之助鹿兒島に到り藩世子護久及び長岡護美の使命を達し懇談する所あり此日島津久光護美に對する答書を授く

〔子爵長岡家文書〕

先月廿八日之芳墨相達忝拜讀仕候如貴論梅雨之候御座候處彌御堅剛御坐被成奉恐賀候一別以來實ニ渴望罷過候處今般貴价米田虎之助被差遣貴意讓々拜聽且同人よりも御國情之趣細詳承り御厚配之旨と奉達察候先度ハ伊集院直右衛門罷出候節ハ御出行ニ而拜顔不仕由残念之至御坐候老拙ニも宿病今ニ平快ニ不至大閉口罷在候然處當春ハ實ニ存掛も無御坐 勅使被差下別而恐入候次第故病中押而上京 天恩奉謝仕候處猶御深厚之勅命拜承仕愚昧之臣只當惑之外無御坐雖然當坐相動候様體ニ無御座候ニ付御暇相願歸國仕候病中之上半百ヲ過候得は老毛半分逆も天下國家之盡力難相成切齒罷在候貴君ニハ御壯年近々御上京之上ハ大盡力偏ニ奉仰願候先ハ右貴答旁如此御坐候恐惶謹言

五月十一日

久

光

長岡 左京亮 様

貴答

再啓時季御自愛專一奉存候御隣國御親睦之義ハ御互ニ御談合之所ニ御座候間贅言不仕候御案通弊邑ハ野鄙之風習殊ニ戰爭後人氣彌暴戾多ク大心痛仕候御笑察可被下候病夫臥床中大亂筆不ニ御海容可被下候以上

〔男爵安場家文書〕

〔五月廿四日讀本社中より山田五次郎安場一平書留の内〕

米家（米田虎之助）去十九日自南薩歸郷鹿兒城事情如左

薩州侯御父子御同座御向合共間四尺計之處ハ虎之助殿被召出御懇之御詞等有之御父子共始終御帶劍之由 米家云世子君御父子森少中間ニ在て兩宮之間云々之事情有之甚以御心痛無御據御情實等米家より具ニ言上有之候處此議薩侯ニ之既ニ疾く御承知ニ相成居候世子嚙々御配慮可被遊と被思召候併其難キ中ニ就て世子御涯分丈之御盡力之是非無之候而之難相濟候との御沙汰之由

米家云御父子之間前條誠以無御據御情實有之唯々拱手待罪候耳ニ候何卒 天朝より御處置被仰付被下候儀之被爲叶間敷哉との旨趣被申述候處 小松帶刀云此議唯今 天朝より之御處置と申儀之決して有之間敷存候先何方より敷手を附け始め候ハ、天朝及有志之各藩素より御傍觀之譯無之弊邑ニ而も屹度御應援盡力可致儀之勿論申迄も無之候然し古勤王過激輩彼より事を破り候前相顯れ候節一時掃攘いたし候儀之是亦殊更ニ申述候迄茂無之候ト云小松云此節之連茂兵力ニ無之候而之勢難被行可有之存申候長藩一大隊三堀幸助士佐一大隊板垣退助弊邑一大隊西郷吉之助引率秋田津輕應援として東京府へ發行致し候此外同盟各藩現今既ニ十二大隊ニ及候ト云

津輕秋田應援ハ唯名義耳其實ハ偽勤王掃攘之爲ニ候事

重野厚之允米家へ送別之詩如左

亂絲斬去是經綸、作用只期豪傑人、萬古當爲西海魂、阿蘇山色碧嶺岫
重野 徳富へ云此節之儀之是非御國より御着鞭無之候而ハ 皇國之御正義難相立候惣體肥後人物之物事甚コスキ氣習有之候此節之拙作之僕深意有之候而呈之候詩ニ御座候ト云

然ニ此亂系斬去之一句米家甚以不響之趣ニ相聞申候胸井忠誠焦心無申計候

米家云此行奥州之役孤軍深入素より再度生還之存念無之候處今日猶殘喘を存し諸君相見を得候儀之實ニ意外之僥倖ニ

存候段申述候處遂ニ重野此詩を賦し贈候也との言上之由奥州戰爭ハ過去也既往也此詩ハ現在にして其意姦魁を期夷し妖氣を掃候事今日切迫之急務タルコトを論し將來を觀勵致し候意ニ相響中候米家必竟雖不文第一之平素之持論と不合候情より起り候事ニ御座候米家發途前新堀(下津久)元田(八右)村井半(村井繁)集評ニ云王政一新之今日ニ到候而ハ神州之事ハ天下有志ト同心協力共公之條理を以事を濟し候筋ニ候樂之天下邦家身心一物也強而彼我を分別可致事ニ無之との論ニ而遂ニ小松との論も起り候物也必竟新堀村井半など姑息說培養之所致にして米良此旨趣を以持込ニ相成候情より出候事ニ御座候既往不可諫實ニ致方無之候(以下五月廿六日の條に續く)

五月十一日在東京本藩參政津田山三郎は岩倉具視に對し先日の失言を謝し我藩に攘夷論者なき旨を陳辯す

〔明治二年王政日新錄〕(熊本縣)

岩倉卿より津田に御國東京ニ而大ニ攘夷論主張いたし候由如何之事ニ候哉照幡列之助杯一旦攘夷論候へ共方今之時情を洞察大ニ順々たる論ニ相成候段御沙汰之處津田方列之助ハ上ニ者順々たる論を獻草莽ニ向候而者大ニ暴論ハムし候ものニ有之候段申上候由 上ニ茂不怪御憤怒ニ而御察討當時照幡列之助論者左様尊卑之取分を以相立候様ニ無之如何之見取を以左様申上候哉重御役様ニ右休不束ナル申上いたし候而者邦家之大事ニ關係いたし不相濟儀ニ思召候付早々唯今方岩倉卿へ罷出御斷申上候様被仰付候翌十一日津田岩倉卿へ罷出右之次第御斷申上候由之處同人方大坂ニ而御國暴論之聞有之東京御出御承知被爲成候へハ全間違ニ而方今彌以御國正議論ニ而是全草莽間方肥藩之名を借り攘夷論を相唱儀も相聞當時之國論ニ而京師大坂ニ而御承知之儀然御水解被成候段御沙汰有之たる由津田より申上候由ニ候事

五月十二日

圖書方承ル

五月十一日日本藩選出議員鎌田平十郎等十四人連署して國是を定め國本を立つへしとの旨を議建

す

〔探案書扣〕

御國是建議

連ニ國是ヲ定メ天下ノ瓦解ヲ防キ給フヘキ事

會テ聞ク人君始正ヲ大トナス故ニ即位ノ始ニ於テ政ヲ立テ人ヲ用ヒ必以テ大ニ天下ノ望ヲ慰スル者アリ況ヤ國勢削弱天步艱難ノ時ニ於テ其レ忽ニスヘケンヤト今ヤ 王政維新ノ際ニ當テ人心不和天下失望スル者ハ他ナシ政ヲ立ルニ洋法ヲ雜ヘ人ヲ用ルニ洋辭ヲ學レハナリ嚮ニ徳川氏洋夷ニ心醉シ衣服容止ニ至ルマテ往々彼ニ模擬シ正上ヲ廢黜シ洋辭ヲ服用シ人心離叛遂ニ大權ヲ失スルニ至ル是股蓋ノ最近キモノナリ世人或ハ唱フ 王政復古ノ時ニ當テ衆庶欣然トシテ以爲ク改絃更張必天下ノ視聽ヲ新ニセント何ソ料シ外夷益猖狂四海益困窮西洋ノ政教ヲ信スルノ徒或ハ事ヲ用ユ是尤ニ倣テ益甚シト云ヘシ何ヲ以テカ天下ノ望ヲ慰シ國勢ノ削弱ヲ振起スヘキト夫レ王者民ニ示スニ好惡ヲ以テス講マシムハアルヘカラス今天下ヲ一新セント欲セハ宜ク 詔書ノ如ク 皇祖ノ遺典ニ基キ國家ノ大基ヲ立テ國體ヲシテ再ヒ尊嚴ナラシメ古來仁義ノ名ヲ空クセサルヘキニ彼貪婪功利ノ說ニ懣惑シ之ヲ主張スルノミナラス頻ニ倣學ス幾ハクカ相率テ西洋タラサラン嗚呼堂々タル 神州未タ嘗テ外侮ヲ受ケス今日ニ至テ、殆ント醜夷ニ變セラル 祖宗在天ノ靈其レ之ヲ何トカ謂ハン洋辭家猶云フ開化文明千歲一時ノ好機會ト是誤國ノ論ニ非スシテ何ソ草莽志士痛憤切齒白日斬姦ノ學アル所以ナリ察セサル可シヤ西洋器械船艦等ニ至テハ固ヨリ取ラサルヲ得ス但洋政洋教ニ至テハ徒ニ益ナキノミニ非ス大ニ國ニ害アレハ峻拒セサルヘカラス苟モ其政教ヲ禁絶セント欲セハ古道ヲ興起セシムハアルヘカラス而メ毫モ洋臭ヲ帶ヒス勇斷識量アル者ヲ撰擧シテ外國官トナシ其應接ノ極意ニ至テハ最素講セサルヘカラス先賢曰和戰守三者一理也雖有高城深池弗能守也則何以戰之雖有堅甲利兵弗能戰也何以和セン以守レハ則固ク以戰ハ則勝然後其和

可保不務戰守之計惟信講和之說則國勢益卑制命於敵無以自立矣味アルカナ此言至レリ然ラハ則今日朝廷ノ計ヲ爲ス宜ク戰守ヲ以テ和ノ本トナシ全國ノ臣子皆膽枕戈以テ其志ヲ勵シ捨生取義以テ結局トナスヘシ果シ能ク此國是ヲ定レハ上ニ素定ノ謀アリ下ニ方向ノ惑ナク中興ノ鴻業日ヲ指メ定ムヘシ臣等憂國ノ至情ニ堪ス謹テ腹心ヲ布ク僭越ノ罪ハ甘シテ之ヲ受シ誠惶頓首謹言

明治己巳五月

鐵田橋津守議員	京極下總守議員
堀長門守議員	米倉丹後守議員
北村經藏	宇田節之助
鐵田出雲守議員	相良遠江守議員
松平國書頭議員	新宮左大夫
青山七郎左衛門	相馬因幡守議員
松平右近將監議員	錦織四郎大夫
生田小膳	松浦肥前守議員
中川修理大夫議員	小關與右衛門
中川中將議員	佐竹中將議員
鎌田平十郎	初岡敬治
	總川三位中將議員
	大津武五郎

輔相公閣下

執事

右之通尾州大津武五郎手元相揃十一日朝輔相三條卿に罷出演舌を以縷々申上候

五月十一日官軍海陸並進みて箱館を攻撃し遂に之を復す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄〕

〔一〕新録探索報告

〔五月十八日附野田大藏より父に宛てたる書翰の一節〕

去ル十一日海陸諸口より大進撃登手ハ決策を以蒸氣船より渡海箱館裏山手より打上り同日箱館市中恢復未明ハ發炮相

始り没日迄諸口共暫時モ炮聲絶不申戰無申計候海軍も奮戰遂ニ賊回天蟠龍兩艦も打碎キ燒失仕候乍去我朝陽艦賊蟠龍艦ノ爲メニ蒸氣發之火藥藏に火入破艦沈没乗組も多人數海沈殘念此事ニ御座候(全文は五月十八日の條に在り)

〔復古帳〕

五月十一日死

肥後藩 土官助 山田爲八

右軍艦朝陽丸ニ乗組申付置候處函館追討之節遂戰死候此段爲心得申上候事

七月

兵部省

五月十二日皇國の基礎確定の爲め卑賤者と雖も意見を上陳すへき旨令達せらる

〔復古帳〕

〔五月十二日醍醐少將より我藩宗村加兵衛へ渡〕

皇國基礎御確定之會議被 仰出候ニ付テハ爲國家存付有之族は不顧卑賤待詔局へ罷出無忌憚可致建言事

右之通於東京被 仰出候爲心得此段相達候事

五月

行政官

五月十二日青森藩陣の我藩兵箱館應援を命せらる

〔財津家文書、石寺永屋書類〕

津輕爲應援青森迄御出張ニ相成居候其御藩御兵隊之儀當方昨日大進撃非常之激戰ニテ諸藩兵隊度過半疲勞ニ付爲應援當地に至急出張被申附旨御總督より之御沙汰ニ候條早々御出張可有之候也

五月十二日

陸軍參謀

青森出張 肥後藩 隊長 御中

明治二年

尙々御迎船として豊安丸飛龍丸之内壹艘則差出候付神速御乗組御出張可被成且堀真五郎に御懸合糧米鹽味類少々御持越可被下候以上

〔石寺永屋書類〕

明治二年五月十六日箱館津輕古營戰爭ノ極略(四月二日)の續(書面は前掲の通り故に略す)

五月十二日戰地陸軍參謀ヨリ書テ肥後兵隊ヲ召ス其書左ノ通り

戰地出張野田大藏氏(後名)ヨリ私書ヲ遺ス左ノ通り

前略仕候海陸諸港ヨリ大進擊遂ニ箱館モ恢復回天蟠龍モ津没ニ至リ愉快至極ニテ今五稜郭且砲臺攻落シノ一旦ニ御座候然ル處別紙御沙汰ノ趣ニ付一時モ迅速ニ御出張御應援被成下候様私ヨリモ伏願仕候委細ハ拜願万々御物語可仕候頓首

五月十二日

野田大藏

青森出張

肥後兵隊長宛(以下五月十日に續く)

五月十二日は夜官軍甲鐵艦より放つ所の巨彈五稜廓なる衝鋒隊の陣營に落下し總督古屋作左衛門等を傷殺し隊の幹部殆んど全滅す

〔幕末實戰史附録衝鋒隊戰史〕

衝鋒隊は赤川の壁に最後迄頑強の抵抗を試みしが四面の官兵盡く押寄するに及び兵を纏めて龜田に退き其夜は露營を張り數十ヶ所に篝火を焚て敵を待ちしに夜半榎本大總裁より命令あり直ちに五稜廓に引上げ北面の守備に當る可しと因て即夜陣營を拂て廓城に入り本隊に加はりしも函館城を虜られて悲憤遺る方なく如何にもして之を恢復せんと翌十二

日夜夜襲を决行すべく幹部の面々一堂に會し訣別の宴酌なるに甲鐵艦より打出せるピントコーゲルの巨彈陣屋に落下し最後の一彈は屋根を貫て宴席の中央に爆裂せる爲め居合せたる酒井兼三郎川井卓郎松村五郎梶原由之助田島安次郎(原註)(十六)石島徳二郎(原註)(十四)の數名慘殺され總督古屋佐久左衛門初め淺井陽高木村吉郎大澤兼次郎外三名重傷を負り北越以來馳名を轟したる衝鋒隊の幹部茲に殆んど全滅を遂げ今井信郎以下僅少の兵を存するのみとなれり

五月十三日上下議局を設け且つ公選法に依り朝官を登用せらる

〔一新録皇令〕

(五月廿五日醍醐少將より別紙御書付三通宛兩度に御慶に相成とある内の三通なり)

去歲閏月政體御造立相成候處時勢之變遷ニ隨ヒ適宜之政體大ニ御確定可有之候得とも千古未曾有御改革之儀ニ付一時ニ被施行候而ハ却而其宜ヲ失候儀も可有之依而即今至急御改正無之候而者不相濟廉々別紙之通御改副被 仰付候事

右之通於東京被 仰出候間爲心得相達候事

行 政 官

上下議局被相開候ニ付議政官被廢左之通被改置候事

上局

議長

副議長

議員

行政官

輔相 一人

議定 四人

參與 六人

辦事

右一通

朕惟ニ治亂安危ノ本ハ任用其人ヲ得ト不得トニアリ故ニ今敬而 列祖ノ靈ニ告テ公選ノ法ヲ設ケ更ニ輔相議定參與ヲ

明治二年

八一九

登庸ス神靈降臨過ナカラン事ヲ期ス汝衆ソレ斯意ヲ奉セヨ

明治二年五月十三日

右一通一切

〔明治三年ヨリ 探索書控、復古帳〕

明治二年五月十三日

公選ノ次第

一時刻各以席次着座

但正服之事

一次辨官事讀 詔書

一次辨官事置入札箱於案上

但史官着座其側

一次各記公舉之人名而納箱

昨春御一新以來追々人材御登庸職目數多候得其實効舉兼候筋も不少且如此次第ニ而ハ即今内外多端之秋如何と深ク御煩慮被爲在候より別紙 詔書之通神明ニ被爲誓御任用其宜を被爲得候様出格之 思召を以入札公選之法を被用候雖然素々不被爲得止義ニ出候事ニ而今度限り入札之法を被用候事

己五月

輔相 一人
議定 四人

一次出御

一次參與持出箱 於御座前而披之讀其數史官記之

一次入御

一次輔相 宣下

一次議定參與入札了辨官事於輔相座前披之讀其數史官記之

五月十三日

行 政 官

六官知事 六人
内廷職知事 一人

右四職公卿諸侯之中可撰舉 但三等以上總而今日入札之法を用ゆ

參與 六人
副知事 六人

右二職貴賤ニ不拘可撰舉

但同斷

己五月

輔相 一人
議定 四人
參與 六人

右今日入札撰舉被 仰付候事

五月十三日

六官知事 六人
内廷職知事 一人
六官副知事 六人

右明十六日入札撰舉被 仰付候事

五月十五日

〔編者曰、防長回天史第六編下には明十六日を十四日とあり投票の結果に據り十五日には各官任命の發表ありたれば本文書の日付は誤なるへし〕

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄 新録探索報告〕

雜記 己巳仲秋上旬 福田

〔五月十五日竹舎拜トアル書翰の一節〕

去ル十三日ニハ輔相堂人議定四人參與十人ニ御減シ入札撰舉被申シ十四日ニ之知事副知事辨事奉と入札公撰ト申事アリ是も三等官以上之人計り集會即刻入札ト申事ニテ畢竟ハ同穴ノ古狸狐ノ入札も同様ニテ人心不服中ニハ慶喜殿ヲ議定ニ登用可然など申論も有之徳川殿の回復不遠と申風聞も有之嗚呼ノ御遠察可被下候

〔一新録皇令〕

入札數

一四十九枚 三條 公 一六枚

岩倉 卿

一一枚 右 栖川宮

右輔相 卿

明治二年

一四十八枚	岩倉卿	一三十九枚	鍋島老公	一三枚	岩下佐次右衛門	一三枚	神山 四位
一三十六枚	德大寺公	一二十六枚	東久世卿	一二枚	前原彦太郎	一二枚	田中 五位
一拾枚	春嶽公	一七枚	正親町卿	一同	大村益次郎	一同	阿野 卿
一六枚	三條卿	一五枚	中山卿	一同	鍋島當公	一同	佐々木三四郎
一五枚	阿波公	一同	伊達公	一同	池田少將	一同	脇坂淡路守
一同	伊達老公	一同	土州老公	一同	門脇五位	一同	土方大一郎
一同	島津老公	一貳枚	尾州老公	一同	河田左久馬	一同	松平大和守
一一枚	大原卿	一一枚	細川公	一同	福原兵部	一同	大原 卿
一同	澤 卿	一同	徳川慶喜公	一同	東久世卿	一同	高崎 兵部
右議定					戸田大和守	一同	坊 城 卿
一四十九枚	大久保市藏	一四十二枚	木戸準一郎	一同	長州公	一同	高田源兵衛
一三十二枚	副島二郎	一三十三枚	後藤象次郎	一同	龜井中將	一同	澁谷彌兵衛
一三十一枚	板垣退助	一十七枚	廣澤兵助	一同	勝安房	一同	黒田嘉右衛門
一二十六枚	西郷吉之助	一十四枚	小松玄蕃	一同	野中右中		
一十七枚	大隈四位	一六枚	澤右衛門佐				
一十枚	大木民平	一四枚	渡邊昇				
一五枚							

五月十三日京都本國寺に於て耶蘇教排斥の爲め諸宗大會議を開く尋て同十五六日東本願寺にて亦會合あり此頃耶蘇教に歸依せる各地の僧俗捕縛せらるゝ者多し

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄〕
〔一〕新録探索報告

一五月十三日於本國寺諸宗之僧徒等耶蘇攘斥之大會議有之依之見聞ヲ憶リ表ニ竹埜ヲ結び尤嚴重之事之由
一同十五六日頃東本願寺ニ於而此頃諸宗一統天主教一儀ニ付大會台有之候由
一右耶蘇宗門信仰ニ而此頃御召捕ニ相成候者

信州	淨立寺	兄弟共
濃州大垣	等覺寺	新發知共
右兩僧張本之由也		
攝州尼ヶ崎平島	安法寺	
河間	正願寺	
戸田	寶泉寺	
同	淨堅寺	
小陣	西生寺	
春田	淨永寺	
中ノ中郷	本教寺	
東本願寺末		
尾州	正万寺町	長 德 寺
濃州	九十軒町	圓 明 寺
飯田町	養 念 寺	
加納馬場	願 永 寺	
清洲	河村新兵衛	
同	宮魚問屋	小貝 甚三郎
志水家來	田中權右衛門	
像工師	角 左 衛門	
押切町	三 左 衛門	
立番新地		
右之通東派掛所方尾州侯に差出入牢被仰付候事		

五月十四日長岡護美大坂より京師に至る

御在京御在府御在國共御記録

五月十四日

一左京亮様當月八日熊本御駕小島御一泊九日凌雲丸に被爲召夕刻同所御出帆同十二日大坂御着十三日一日御逗留十四日朝六時之御供揃ニテ被爲 召御座舟淀川御登陸より 御乗切ニテ益御機嫌能夜四時御陳屋被遊 御着候

五月十四日曉我藩銃隊汽船豊安丸に搭乘して青森港を發し夕箱館灣富川に着し總督府に至る總督書を與へて之を勵し且つ酒肴を授く

〔石寺永屋書類〕

明治二年五月十六日箱館津輕古營戰爭ノ概略(五月十二日)

右(五月十二日箱館陸軍參謀より總督の命)總督府ヨリノ御沙汰ニ付青森港御出張津輕伊御陣屋に罷出候慮ヲ伺奉り候處素ヨリ總督府ノ御沙汰ニ兎角ノ御意見無之ハ論ヲ待タス迅速出兵可致様被仰付

是ヨリ先キ榎本武揚松前箱館ニ侵入シ津輕地方不穩ノ情况ヨリ財津民助ヲ御使者トシ庄野新兵衛ヲ副使トシテ津輕弘前ニ差遣セラレ居リシヲ別手銃隊一番隊ノ箱館ニ出兵スルニ際シ財津庄野兩名モ兵隊一同出張ス別手銃隊一番隊人員ハ左ノ通り

- | | | | |
|-----------|---------|--------|---------|
| 別手銃隊一番隊長 | 志水 一 學 | 會計兼器械方 | 丸山 彦 助 |
| 別手銃隊一番隊副長 | 石寺 九 兵衛 | 同 | 林 勝左衛門 |
| 別手銃隊一番隊副士 | 永屋 百 助 | 嚮導 | 吉永源之助 |
| 同 | 石川 末 彦 | 裨官 | 唐 杉 常 助 |
| 醫師 | 武藤 廉 溪 | 同 | 永村文兵衛 |

- | | | | | | |
|-----|-----------|---|--------------|-------------|----------|
| 同 | 村田 助 雄 | 全 | 宗村 準 八 | 全 | 石井 豐 記 |
| 監察役 | 齋藤 一 郎 次 | 全 | 森 彌右衛門 | 全 | 甲野 角 平 |
| 同 | 林田 郡 太 | 全 | 佐藤 恒 太郎 | 全 | 上妻 勝 助 |
| 同 | 嶺野 尉 九 郎 | 全 | 安武 次 兵衛 | 全 | 林田 謙 助 |
| 同 | 小原 小 右衛門 | 全 | 木庭 熊 三 郎 | 全 | 奥野 傳 助 |
| 隊士 | 市野 熊 太 | 全 | 坂部 安 右衛門 | 全 | 上垣 傳 之 助 |
| 全 | 下田 吉 兵衛 | 全 | 野口 市 右衛門 | 全 | 倉岡 勘 七 |
| 全 | 岡本 多 助 | 全 | 藤井 新 太郎 | 全 | 藤井 熊 之 助 |
| 全 | 内古 閑 小 太郎 | 全 | 宮 崎 松 喜 | 全 | 鶴田 十 藏 |
| 全 | 有 富 嘉 三 | 全 | 星野 大 右衛門 | 全 | 田邊 謙 吾 |
| 全 | 林 平 助 | 全 | 喇叭手伊藤 龜 次 郎 | | |
| 全 | 笠 政 右衛門 | 全 | 全 鳥 井 半 三 郎 | | |
| 全 | 平山 直 右衛門 | 全 | 旗持 小者 貳 人 | 外士官(附屬ノ者拾人) | |
| 全 | 千場 楯 藏 | 全 | 外ニ隊長協議ノ上一同出張 | | |
| 全 | 赤 星 彌 平 | 全 | 財津民助 庄野新兵衛 | | |
| 全 | 小山 龍 右衛門 | 全 | | | |

右御人數一同蒸氣船豊安丸ニ乗組五月十四日午前五時青森港拔錨全日午後六時箱館灣富川ニ着シ督府ニ至ル書及酒肴ヲ賜フ其書左ノ通り

明治二年

肥後隊長に

八二五

今般賊徒追討ニ付而者 皇威隆替ニ關セリ諸長官自ら勵し宜敷之を勉むべき事

五月

總

督回

五月十五日輔相議定參與六官知事等任免せらる

〔明治三年ヨリ 探案書控〕

五月十五日御沙汰 (御書控本末書)

本議定 岩倉大納言
 本議定 德大寺大納言
 同 鍋島中納言
 同 後藤象次郎
 同 大久保一藏
 同 副島二郎
 本議定 兼民政取締 東久世中將
 同 中山儀同
 本神祇官判事 福羽五位
 本議定 兼民政取締 東久世中將
 同 大久保一藏
 同 後藤象次郎
 同 鍋島中納言
 同 德大寺大納言
 同 岩倉大納言
 本議定 岩倉大納言
 同 德大寺大納言
 同 鍋島中納言
 同 後藤象次郎
 同 大久保一藏
 同 副島二郎
 本議定 兼民政取締 東久世中將
 同 中山儀同
 本神祇官判事 福羽五位

是迄之職務總而被 免民 本議定 松平中納言
 部官知事被 仰付候事 本參與 廣澤兵助
 是迄之職務被 免民部官 同兼外國官判事 大隈四位
 副知事更ニ被仰付候事
 是迄職務都而被 免會計
 官副知事被 仰付候事 本議定 正親町三條大納言
 是迄之職務都而被 免刑
 法官知事被仰付候事
 刑法官判事被 免副知事 佐々木五位
 被仰付候事 本議定 山内中納言
 是迄之職務都而被 免學
 校知事被 仰付候事 本刑法官知事 大原中納言
 是迄之職務被免上局議長

被 仰付候事
 是迄之職務被免上局副議長
 長被 仰付候事
 是迄之職務被 免候事

本參與 阿野中納言
 本議定 蜂須賀中納言
 同 池田中納言
 本神祇官判事 井中將
 本刑法官判事 池田少將

參與被 免東京府知事
 是迄之通被仰付候事
 是迄之職務被 免候事
 右之通於東京進退有之候間爲心得此段相違候事
 五月 行 政 官

〔全書〕

輔相 三條右大臣(實美)
 議定 岩倉大納言(具親)
 德大寺大納言(實則)
 鍋島中納言(直正)
 東久世中納言(通禎)
 參與 阿野中納言(誠公)
 大久保市藏(利通)
 木戸準一郎(孝允)

御斷申出候由
 議長 知事 大原中納言(重徳)
 刑法 副知事 正親町三條大納言(高愛)
 知事 佐々木五位(高愛)
 副知事 松平中納言(慶永)
 知事 廣澤兵助(眞眞)
 民部 副知事 山内中納言(眞眞)
 學校 知事 山内中納言(眞眞)

後藤象次郎(支正)
 板垣退助(正形)
 副島次郎(種臣)
 西郷吉之助(盛隆)
 大原中納言(重徳)
 正親町三條大納言(高愛)
 佐々木五位(高愛)
 松平中納言(慶永)
 廣澤兵助(眞眞)
 山内中納言(眞眞)

明治二年

八二七

副知事 秋月右京亮(種)
 知事 中山儀同(忠)
 副知事 福羽五位(美)
 知事 萬里小路中納言(博)
 副知事 大隈四位(重)
 知事 澤前主水正(宣)
 副知事 寺島陶藏(宗)

〔一新録皇令〕

五月十九日東京發同廿六日西京着藪參政業便より來る

岩倉大納言

議定更ニ被 仰付候事

德大寺大納言
鍋島中納言

議定被 仰付候事

但是迄之兼勤都而被免候事

東久世中將

參與被 仰付候事

但右同斷

右之外承リ不申判事以下ハ右知事之考を以追々難陟御座候趣都而諸侯當主之分ハ不殘御免ニ相成候由右御役人も入札ニ而相決候由當主之分ハ藩籍返上之義も有之候ニ付而ハ御免と申御口達之由

五月十五日

猪俣才八

木戸準一郎
後藤象二郎
副島二郎
枚垣退助

參與更被 仰付候事

但右同斷

大久保一藏

右同斷

西郷吉之助

徵士參與被仰付候事

中山儀同

議定被免神祇官知事

福羽五位

是迄之職務被免神祇官副知事

松平中納言

是迄之職務被免民部官知事

廣澤兵助

是迄之職務被免民部官副知事

大隈四位

是迄之職務被免會計官副知事

伊達中納言

議定被免外國官知事

正親町三條大納言

同刑法官知事

佐々木五位

右同判事被免副知事

山内中納言

學校知事

明治二年

同上局議長

大原中納言

同上局副議長

阿野中納言

絳須賀中納言

池田中納言

淺野中納言

龜井中將

鍋島中將

細川侍從

大木民平

小松四位

三岡四位

岩下佐次右衛門

神山四位

德川大納言

職務被免

職務被免

參與被免東京府知事

澤右衛門權佐
 應司前右大臣
 中御門大炊
 近衛新前右大臣
 同被免

長松文輔
 佐間甚之助

是迄之職務被免行政官吏官可被申付候事
 小枝善四郎
 同試補
 福羽五位
 佐々木五位
 叙從四位下 宣下候事

五月十五日東海道筋各川満水にて川支の際至急を要する使者一人立を限り間道通行を許可すへき旨布告せらる

〔復古帳〕

五月十五日民部官御呼出ニ而官御渡ニ相成候御書付諸家様に御通達之寫

東海道川々満水川支之節至急ニ御用狀等屢々差支候間已來川支之節者至急御用狀者勿論總而登人立往來分川場間道通行差免候條宿村其旨相心得差支無之様可取計尤川明之節者間道通行嚴重可差止もの也

己五月
 右之通驛郷へ布告いたし候間爲心得相達候事

民部省
 驛遞司

己五月
 五月十五日日本藩澤村脩藏高橋文貞徴士を命せらる

〔御國東京往來狀扣〕

五月十五日辨事御假所御渡之書付寫

其方家來高橋文貞儀徴上被 仰付候間此旨相達候事

五月

細川中將
 行政官
 細川中將

其方家來澤村脩藏儀徴上被 仰付候間此旨相達候事

五月

行政官

五月十五日我藩兵富川を發し箱館勝明寺に至りて陣す此夜總督府各藩兵の部署を定めて津輕古營の攻撃を命す

〔石寺永屋書類〕

明治二年五月十六日箱館津輕古營戰爭ノ概略(五月十四日の續き)

五月十五日前二時富川拔鎗同日六時箱館投鎗船ヲ以テ揚陸箱館市中勝明寺ニ屯ス暫アツテ督府ヨリ豫備兵被仰付タリ

全日午後八時總督府ヨリ御下命左ノ通り

明十六日午前一時別紙兵賦の通り受け口に相揃ひ午前二時一同津輕古營え屯集する賊徒に對し進撃を爲すへし

別紙

兵賦

本道第壹番

肥後壹中隊

伊州壹中隊
 薩州壹中隊
 長州砲隊

明治二年

本道豫備兵第貳番	長州 壹 小隊	濱手第壹番	松前 壹 小隊
中道第壹番	徳山 壹 小隊	濱手第貳番	徳山 壹 小隊
中道第貳番	津輕 壹 中隊	箱館岡ノ第壹番	備前 壹 中隊
中道第參番	筑後 壹 小隊	箱館岡ノ第貳番	長州 壹 中隊
中道第肆番	松前 白砲隊	箱館岡ノ第參番	津輕 壹 中隊
	福山 白砲隊		伊州 壹 中隊

五月十五日辨天崎臺場の守將永井玄蕃松岡磐吉等兵を率ゐて官軍に降る

〔防長回天史第五編下〕

(第二次ノ箱館戰爭下抄略)

十五日總督桂主膳ヲ使者トシテ箱館ニ遣リ諸藩兵ヲ輻ヒ酒肴ヲ饋ル同日督府一汽船ヲ青森ニ馳セ同地ニ在ル肥後兵ニ命シ諸藩兵戰ニ疲ル、ヲ以テ速ニ箱館ニ來リ之ヲ援ケシム肥後兵若干直チニ其汽船ニ乘リ渡海シ富川ニ至リ官軍ニ加ハレリ(記者曰、在青森の肥後藩兵に來援の命ありしは去る十二日にして藩兵は十四日に青森)辨天臺場ノ賊永井玄蕃箱館松岡磐吉(元婚神)を發シ同日富川に至りたること前掲の文に明らかなり此に十五日とあるは誤れるなり)相馬主計等二百四十人遂ニ今十五日ヲ以テ降服ス此事五稜郭ニ於テハ十六日午後迄之因テ降服實效條件ヲ左ノ如ク命ス

- 一、長官之者陣門へ罷出可申事
- 一、願之通り臺場内へ恭順罷在追テ朝裁相待可申事
- 一、帶刀之外兵器ハ悉皆差出可申事

海軍參謀

既ニシテ薩兵半隊臺場ニ入り兵器ヲ收ム

五月十六日官軍津輕古營千代を攻めて之を抜く總督清水谷公考諸兵を犒ひ酒肴を與ふ

〔石寺永屋書類〕

箱館津輕古營戰爭ノ概略(五月十五日の續き)

右ノ通り(昨十五日總督より津輕古營進擊の命令の通り)令ニ叛カス肥後別手銃隊壹番隊ハ本道ノ先鋒隊ニシテ五月十六日午前零時箱館口一本木參謀部出張所ニ會シ期ニ及ンテ諸軍悉ク至リ各部署ノ向フ所ニ仍リ進軍ス肥後兵ハ本日着地理ヲ暗セス殊ニ霧霧四塞咫尺ヲ辨セス敵兵炮發ヲ待チ之ニ應炮スル約ヲ爲シ本街道ノ先驅ト爲テ直チニ進テ砦ニ薄ルコト參百尺餘時ニ砦兵炮ヲ發シ悉ク力テ桿衛矢丸織ルカ如ク各部署ノ官兵ヨリモ繼テ炮ヲ發シ海軍ハ東艦ヲ始トシ一同下炮ヲ發射シ彈砦上ニ破裂シ大小砲鳴天ニ響ク前二時ヨリ前六時ニ至リ苦戰シ肥後兵ハ先登砦ヲ凌テ齊ク入り諸軍亦鼓譟シテ之ニ繼ク砦兵遂ニ收走ス我兵一人ヲ損セス實ニ明治二年五月十六日也

暫アツテ督府清水谷公亦來リ苦及辰酒ヲ以テ之ヲ犒フ其書左ノ通

諸軍忠勇ヲ勸シ速ニ津輕古營ヲ拔キ成功ヲ遂ケ殊ニ肥後兵隊ハ本道ノ先鋒トナリテ津輕古營ニ先登シタルハ忠勇ノ至リ實ニ感佩ニ堪ヘス此旨 奏聞スヘシ

敵ハ諸官軍ノ勇奮進擊スルヲ恐レ砦ヲ棄テ北クルモノ悉ク五稜郭ニ集リ守禦ヲ嚴ニス官軍追躡シテ之レカ周匝ヲ圍ミ内外阻絶スルコト壹晝夜廓中響響セラレ衆皆抗氣ヲ見ス肥後兵ハ持場ヲ守リ攻撃ノ命ヲ待テリ

津輕古營ハ箱館市ヲ距ル拾町其東北ニ位シ四面堤塘參拾尺餘ヲ築立テ周圍ハ幅參拾尺ノ水堀アリ内ニ貳門ヲ設ケ出入ニ便ス又堅牢ノ家屋ヲ築キ堤塘ニハ臺場ヲ造リ大小砲ヲ据付守備甚タ嚴也榎木ハ殘兵貳千餘人ヲ帥テ三砦ヲ嬰守ス右ヲ辨天崎ノ炮臺トス左ヲ五稜廓トシ津輕古營ハ其間ニ在リ相距ルコト甚タ近シ五ニ應接ヲ爲シ守備ヲ嚴ニス

官軍議ス先ツ其中特ヲ拔カハ二若ハ自ラ潰ント然ルニ左右之ヲ特角センコトヲ恐レ前日使ヲ遣シテ辨天崎五稜廓ニ至ラシメ酒肴ヲ携テ示スニ禍福ヲ以テシ之ニ降ヲ進ルコト再三是時細作縦横機事頗ル洩ル
督府ハ則諸軍ニ令シテ各炮五百五拾發ヲ齎シテ中央ナル津輕古營ヲ攻撃スル期明日ニアリトシ密ニ諸軍ニ令シテ夜襲ヲ爲シテ中央ノ津輕古營ヲ拔クコト右ノ如シ有名ノ寒將土方^(三)中島三郎助等之レニ死ス

〔幕末實戰史〕

大島圭介述

五稜廓へは甲鐵艦の彈丸日夜飛び來りて人心を驚かすと云へども四方の要害も堅固なれば急遽に侵襲を受くべき患もなければ津輕陣屋は敵陣に近く要害手薄く甚だ懸念故引拂つて此五稜廓に聚る方可然と評議し十五日予五稜廓より津輕陣屋に至り諸士官に告げしに折角大砲等も据附け用意も出来たれば兵卒引拂の事不服の者多く見へたる故之を強ず其のまゝになし翌曉に至らば其用意すべしとすゝめけるに其の夜三時頃敵兵夜襲し來りしかば衆寡敵せず少し防戦の上曉方五稜廓に引上げたり此の時大砲頭並中島三郎助父子并に柴田眞助其の外十六七才の少年數名額兵隊大砲士官某士官隊の兵士兩三名都合十三四名枕を並べて戰没せり

〔幕末實戰史附録衝鋒隊戰史〕

當時千代ヶ岡の守將中島三郎助は一本木の戰鬪に傷を負ひ癒せずして療養中なりしに官兵四位に迫ると聞て猛然と起ち長男恒太郎^{二十}次男房次郎^九其他郎黨五十餘名と共に胸壁に據り、目に餘る大軍を引受けて好防善戰一步も近寄らしめざれば、燥て攻め登る官兵の殘る者薩摩の來島頼三、楠澤信之助初め幾何なるを知らず、骨山血河の慘狀を呈せしも衆を頼める福山、薩摩の勢は、損害を省みず砲撃日懸けて無二無三に切り込み來れり
守將中島父子は官兵の強襲を見るより猛虎の如く憤り、共に抜き連れて進み入る官兵數名を薙ぎ伏せたるも、敵は追々勢力を加へて學内に侵入せしより、遂に接戦となり互に白刃を閃して縱横に切り結び、火花を散して花々しくも防

ぎ戰ひたるが衆寡遂に敵せず、朝日奈三郎近藤勇吉福山國太郎柴田伸吉其他の郎黨殆ど討死せる爲め、中島父子も今は是れ迄なりと辨を并べて敵中に躍り込み、父子三人枕を揃へて斬り死したるぞ悲惨の極みなる、中島氏時に年五十七歳、元浦賀五十子の騎士なりしが、榎本等の事を擧るに當ては開陽艦長として品海を脱し、同艦座礁後は函館奉行並砲兵頭等に歴任して千代ヶ岡主將となる、當時從へたる軍兵は多く浦賀與力の弟子なりしと
五月十七日從來仁和寺大覺寺勤修寺等より醫師畫工諸職人等へ位階受領を許したるを停止せらる

〔明治二年王政日新録〕

熊本縣 縣所藏

五月十七日

一今日非藏人口に御呼出ニ付増田方出頭之處醒醐少將殿より左之御書付壹通御渡ニ相成候事

是迄醫師畫工諸職等位階及國名受領之儀仁和寺大覺寺勤修寺ヨリ差許來候處向後被廢止且從來許置候向モ總テ可爲停止旨被 仰出候事

右之通於東京被 仰出候間爲心得相達候事

五月

行 政 官

五月十七日東京府戶籍改正所に於て無籍無産者を調査し生地分明なる者は其原籍に復歸し產業に服事するやう諭示せし旨民政部官より府藩縣に通達せらる

〔復古帳〕

五月十七日民政部官を御呼出ニ而御渡ニ相成候御書付諸家様に御通達之寫

東京府戶籍改正所ニ於テ先達而以來無籍無産之者取糺被 仰付候處府藩縣ニ於テ前年脱籍出生分明ナル者ハ今般其府

明治 二年

八三五

藩縣に引渡復籍上厚ク教諭ヲ加ニ産業ニ基キ候様被 仰付候條其所置方ニ就テハ戶籍改正所ヨリ府藩縣へ直様可及掛
合候間此旨爲心得相達候事

五月

民 部 官

五月十七日日本藩世子護久參與を免せられ且つ麿香間祇候を命せらる

〔一新録皇令〕

一五月十七日鷺津九藏殿より被相渡候御書付

所勞全快次第東下可致旨被 仰付候事

細川 侍 從

五月 行 政 官

參與被免候事

行 政 官

出仕之節麿香間祇候被 仰付候事

五月

細川 侍 從

五月 行 政 官

右一通

細川 侍 從

五月 行 政 官

五月十七日長岡護美上京後始めて參朝天機を奉伺す

〔御在京御在府御在國共御記録〕

五月十七日

一今四時之御供揃ニテ 御參 朝 天機并 大宮御所 中宮御所御機嫌御伺 御退出より前條議定様御始被 遊御廻勤

晝頃被遊 御歸邸候事

五月十七日舊幕閣老板倉勝靜備中松山藩主先月廿三日箱館を脱し是日上總國相部に入港す尋て東京に至

り自訴して天裁を仰かんとす

〔慶應三年 探索書扣〕

安中侯に之届書

一主人伊賀去月廿三日箱館表乗船去ル三日陸前國勝見沖に碇泊夫在所家來共爲待受差出候小船に乘移同十七日上總
國相部に入港翌十八日同所出帆近々京着自訴奉仰 天裁度此段御當家様に不取敢御届申上候以上

板倉伊賀家來

五月廿三日

瀬 下 庫 太

私儀在所表重臣共被申付主人伊賀乗船歸京之消息探索と而常總邊海岸見張罷在候去ル十七日上總國相部ニ於而面會
仕翌日出帆見届出立昨夜着京仕候

瀬 下 庫 太

一板倉賀州着府相成候ハ、軍務官に引渡ニ可相成手組之由風聞有之候

五月十八日榎本釜次郎等五稜郭を開きて官軍に歸順す

〔一新録 探索報告〕

明治元年辰正月ヨリ十二月迄
同年五月

去ル十一日海陸諸口より大進撃壹手ハ決策を以蒸氣船より渡海箱館裏山手より打上り同日箱館市中恢復未明と發炮相
始り没日迄諸口共暫時モ炮聲絶不申戰無申計候海軍も奮戰遂ニ賊回天蟠龍兩艦も打碎キ燒失仕候乍去我朝陽艦賊蟠
龍艦ノ爲メニ蒸氣發之火藥藏に火入破艦沈没乗組も多人數海沈殘念此事ニ御座候

一同十二日五稜廓并天炮臺攻ムレ共不屈

一同十三日同十四日休戦

明治 二年

- 一 同十五日辨天炮臺ノ籠賊遂ニ降伏
 - 一 同十六日津輕陣屋跡炮臺ニ進撃官軍大勝利一時ニ乗取申候事
 - 一 同十七日降伏申出候者四百人余
 - 一 同十八日賊ノ首魁榎本釜次郎松平太郎大鳥圭助荒井郁之介降伏五稜廓ヲ聞キ箱館寺院ニ蟄居申付候事兵士六百八人余
 - 一 青森迄出張ニ相成居候御國人數志水一學組一小隊去ル十二日出張被命同十五日箱館着同夜より出先に出張同十六日津輕陣屋跡ニ木屋之手先鋒ニ而進撃之處死傷も無之別端都合宜奉恐悅候
 - 右件々之通ニ而案外速ニ平定仕爲 皇國恐悅無申計私胸中之清涼ナル御推察被遊可被下候此上ハ各藩人數引上之手配且松前領津輕領跡成行ヲ附ケ一時も速ニ東京ニ凱陣仕候心得ニ御座候此段爲御安慮概略奉言上候謹言
- 五月十八日
野 田 大 藏
御 大 夕六字 人 様
- 二 仲役間并休也殿森尾列にも書狀之事件御傳へ被遊可被下候以上
三 仲
手ノ舞足ノ踏處を覺不申候數月ノ苦心一時ニ散亂論快至極ニ奉存候

〔全書〕

箱館軍監より御届書

五月十一日迄之賊情ハ別紙第一號二號ニ御届之通ニ御座候其後十二日ニ至箱館全我有トナリ賊軍悉ク五稜廓并元津輕陣屋及辨天崎臺場等之要害に逃込折々我陸軍ヲ目掛炮發ス十三日辨天崎尙未拔春日陽春艦より大炮一門宛揚山上方辨天崎臺場に炮發ス十四日戰狀大ニ前日ニ異也時々軍艦ヲ外濱ニ廻シ元津輕陣屋之賊ヲ炮擊ス此夕辨天崎之賊徒力盡勢屈シ降伏ヲ乞ふ故ニ辨天崎ニ向ヒシ炮射止メ十五日辨天崎之賊徒永井快堂元蟠龍之船將松岡艦十郎川村録次郎以下貳

百四拾人降伏ス大小炮器械等請取十六日晚天三字方陸軍元津輕陣屋之攻撃ス海軍も是ヲ應授ス一舉忽々、
十一日十二日頃方甲鉄艦之七十斤ヲ以テ五稜廓ヲ討撃ス每發多クハ命中賊大ニ窮スト云十七日薩州藩田島敬藏五稜廓之賊徒ニ應接ニ參ル賊魁榎本釜次郎松平太郎大鳥圭輔荒井郁之介歎願申出候趣ニ付九字比參謀増田虎之助軍監前田雅樂陸軍ニ而ハ參謀黒田大助軍監村橋直兵衛岸良彦七有地志津摩等龜田に出張面會之上歎願之旨趣聞取候處謝罪降伏申出候ニ付實効ケ條相立候ハ、可奉伺 天裁旨申聞賊徒ハ五稜廓に差返ス同夜亦々松平太郎安田才助兩人陣門ニ罷出降伏之實効左之通申立

明十六日六字方七字迄之間首謀榎本釜次郎松平太郎大鳥圭輔荒井郁之介軍門に降伏之事

翌十八日早曉方軍監前田雅樂軍使器械受取方之者引連會議所に出張出先軍監岸良彦七有地志津摩打合各藩兵隊に降伏護送之達シ致シ第七字賊魁榎本釜次郎松平太郎大鳥圭輔荒井郁之介軍門に降伏軍監より申渡候ケ條左之通

謝罪降伏實効ケ條

- 一 首謀之者陣門ニ降伏之事
- 一 五稜廓ヲ聞キ寺院ニ謹愼罷在追而可待朝裁事
- 一 兵器悉皆差出可申候事
- 一 右之通申渡候條可得其意者也

五月十八日

海 軍

參 謀

右首謀之四人双刀取揚長州一中隊ヲ以函館寺院に謹愼ス一字過兵士三百人歩兵六百五十人合而千餘人薩州一中隊黒石一中隊松前三小隊水戸二分隊等ヲ以函館より護送ス四字過大小砲始器械悉皆取揚五稜廓受取伏水一中隊松前一中隊操込候事

右之次第ニ付箱館ハ全平定ニ相成申候モロランニ三百計賊徒在之趣是も追々降伏可致被存候若抗衛候得之早速打散シ
可申候委細之未相分不申候尙追々御報可申上不取敢右之趣御届申上候也

五月廿日

海軍 參謀
軍監

軍務官

判事御中

〔石寺永屋書類〕

明治二年五月十六日箱館津輕古雲戰爭ノ概略(五月十六日)

五月十七日榎本武揚松平太郎大島圭介永井玄蕃新井郁之助松岡盤吉相馬主殿餘衆貳千餘ト皆皆ヲ出テ降ル府府ハ降兵
八拾人乘馬五拾頭兵器拾駄ヲ分ツテ肥後兵隊ニ箱館豪家ニ護衛セシム是ニ於テ東陸大ニ定ル(以下五月廿一日に續く)

〔幕末實戰史〕

大島圭介
何れの隊にても上官は斷然心を決し、迎も此の上勝算もなければ潔く戦死せんと動搖する事もなかりしが、歩兵共は
次第に勢の蹙るを見て大に落膽して追々逃散し残る者も各狐疑して戰意なく見へ、且つ辨天崎臺場の方已に恭順と云
ふ事聞へければ愈人心崩壊し如何とも爲しがたし、因つて諸隊長を呼び集め會議し各其の見込を聞きしに種々異同あ
り、乍去、何日も徒に議論するも益なき事なれば、結局榎本、松平、荒井、小子(大馬)の四人軍門に降伏天裁に就き、
自餘の者に寛大なる命令を冀ふ外あるまじと決心し、其の旨を海陸軍の參謀増田虎之助、黒田了介兩人に應接し、承
知しければ、十八日五稜廓にて不殘兵隊を整列し、此迄の勤勞酬ゆる所なきを謝し、諸朋友にも永訣を告げ、五稜廓

を出て龜田村の陣屋に赴き、長藩の參謀某に面接し、戎器を脱し何れも輜に乗り長州兵に護送せられて函館に行たり、
輜中にて四人は必ず屠腹ならんと考へしに本陣の傍なる猪倉屋と云へる町家に誘はれたり、護衛の兵天兵長兵其の外
交代ありたれども少しも苛酷の取扱なく、酒肴とも丁寧を盡されたれば却て意外に出で不思議に思ふ程なり、

〔幕末實戰史附録衝鋒隊戰史〕

越へて十八日午過る頃亦々官軍の使者來て和議を勸む因て諸將一堂に會して鳩首會議を重ねたる結果、榎本大島等相
携て一本木の關門に到り參謀黒田了介に面して交渉を遂げ、一朝廷に對し謹慎を表す爲め銃劍は引渡す事、一城内の
將士は双刀を帯びたる儘退城する事、一榎本松平大島永井外四五の者は天裁を仰ぐ事、一其他一兵をも刑せざる事
以上四ヶ條の要件を以て五稜廓を開城するに決し、一同悄然と歸城して全軍に開城を告げ將來を諭し、城内を潔めて
四方に漫幕を張り軍使の來るを待しに間もなく軍監前田雅樂城地器械受取りの爲め來城せるを以て、會計奉行榎本對
馬是れと應對して夕刻一切の引渡しを終へ、城兵は盡く函館の四ヶ寺に收容せらる、時に明治二年四月十八日(中略)
各隊の總人員を算するも僅か四百六人に過ぎず、蝦夷平定當時に於ける三千百餘名に比すれば殆んど十分の一なるを
見る續て二十三日には一同津輕家預けとなり弘前に移り間もなく釋放せられ云々

五月十八日日本藩奥州原龜戰役の勳功者松浦治右衛門等を賞す

〔御國東京往來狀扣〕

(五月廿五日在國執政等より在兩京執政等へ通報書抄略)

シヤムライフル銃

一挺

松浦治右衛門

右之去年八月原龜戰爭之節物見役ニ而相進及炮發銃彈ニ茂中り相働候付被下置旨

右同

一挺

上野繁十郎

明治二年

八四一

右同斷之節炮發ニおよび銃彈ニ茂中り相働候付被下置旨

右同

一挺

田 中 平 次

右同斷之節玉藥支配ニ而彼是心配いふし銃彈ニも中り相働候付被下置旨
右之通去ル十八日申渡候

五月某日本藩選出議員鎌田平十郎天主教を毆の議につき意見書を議局に提出す

〔慶應三年 探索書扣〕

五月十九日東京發ノ藪參政持參五月廿六日西京着

天主教ヲ毆ノ議

學母 議員

川 西 六 三

天主教日ヲ追テ延蔓スルヲ拒ムニ説諭ヲ以テスレモ頑固ノ民情解シ得サルヲ刑セサレハ國ノ禍機ヲ漸々繁茂セシメ其宗ニ迷溺スルノ徒末々國家ニ妖ヒスルヲ必セリ斷然嚴刑ヲ以テ爰除シテ如何

天主教ノ害佛ノ害ニ比スレハ更ニ甚シ宜ク闢キ去ル可シ因テ愚民ノ是ニ惑溺スル者一應説諭シ聽カサルハ巨魁數人ヲ海ニ投シ同類ニ望見セシメ猶モ悔悟セサルニ於テ殺ス可キノ現アレバ 新政ノ初少ク寛恕ヲ加ヘ永代兩所繫囚シ又士君子ノ口ニ非ト説クモ腹ニ是トスル陰險ノ徒ヲ戒メサレハ禍源ノ絶サルヲ論ス

漢土ノ聖賢周漢ヨリ宋明ニ至迄異端ヲ擊チ佛老楊墨ヲ闢ヲ以テ學者ノ任トス是其正道ヲ害スルヲ以テノ故也楊墨佛老スラ猶且ツ爾ク拒絶ス若シ今日耶穌教ノ人心ヲ蠱惑スルヲ目撃セシメハ其痛憤如何ンソヤ
本邦古來ヨリ楊墨老莊害ヲ蒙ラス只佛法而已尊信ノ徒アリ然レモ耶穌教ノ禍ヲ受ルニ至テハ漢土ニ比スレハ猶甚キ歟

佛法ハ中古貴人士太夫ニモ信用ノ人アリト雖近世ニ迫テハ只愚民歸依ノ具ナリ未タ佛ノ深妙ヲ知ラス淺近淺易耳ニシテ所謂天道地獄ヲ以テ人民ヲ勸懲シ此世ニ善ク親ニ孝行シ君ニ忠義ヲ盡セハ後生ニテハ必ス報應アルヲ以テ人民ヲ濟度ス家出世ヲ捨ルノ辭アレモ未タ人ヲ誘クニ君ニ背キ親ヲ棄ルヲ以テセス耶穌教ノ天主ヲ奉シ假令君ヲ弑シ父子殺スル決シテ耶穌ニ負クヲ勿レト云テ倫理人道ヲ磨滅スルニ較レハ其害淺キ而已是ニ由テ寧ろ佛法ハ今ニ於テハ包荒シテ可ナルモ耶穌ニ至テハ痛ク逐斥セサル可ラス今 本邦ノ頑民耶穌教ヲ奉スルモノ幾ト千數百一朝忽カセニセハ滋蔓繁延シテ 神州ノ民終ニハ犬羊ニ變シ彝倫綱常地ニ墜ルニ至ン源ヲ杜キ根ヲ絶今既ニ晚シト雖猶能ク救フ可キノ機アリ其手ヲ下ス他ノ方ナシ議案ノ如ク嚴刑ニ處シ爰艾スルニ如カス然レ雖ニ刑ヲ加フル時ハ數百人ノ生命ヲ殞ス頗ル慘酷ニ屬ス因テ先ツ魁首若干人ヲ逮捕シ一應訓諭スルニ心ヲ更メ非ヲ悔ユルヲ以テス而シテ終ニ聽サル時ハ之ヲ縛シ其同類ト共ニ舟ニ貯ヘ西門釣ガ巫觀ヲ處セシ如ク海上ニ赴テ其魁首ヲ投没シ同類ノ者ニ視ス同類仍モ懼ル所ナク固執依然タルルハ既已可活ノ道ナシ之ヲ戮ス 王法ノ當然ト雖雖維新ノ初屢血ヲ流ス邦家ノ福ニ非ス故ニ一等ヲ恕シテ各藩ニ分付シテ之ヲ禁錮ス然レ各處ニ放置スル時ハ或ハ蔓延ノ恐アリ因テ分付ス可キ各藩ヲシテ年々之ヲ養フ所資米ヲ 官ニ納メシメ官ヨリ廣漠ノ地兩所ヲ擇ヒ囹圄ヲ構ヘ此ノ中ニ囚シ置他人ト音信ヲ絶シム是爰除セサルモ亦爰除スルニ異ナラス抑又右頭愚ノ民妖教ヲ信スルハ其禍民間ニ止ル然ルニ現今巷ニ聞ク士君子中亦心陰ニ之ヲ嗜ミ無人ノ地ニ於テハ拜禮尊崇ヲ極ム者アリ然レ清議ノ容サルヲ恐レテ口陽ハニ説カスト雖機ニ觸レ事ニ臨テ動モスレハ冥々ニ施用スル萌シアリ今ニシテ懲サ、レハ到底綱紀ヲ紊リ國体ヲ破ルハ必セリ是乃妖教ニ惑フ愚民ノ罪人假令愚民ハ爰除シ盡スレ此輩ヲ成スレハ禍害遂ニ息マズ此罰セントスレハ未タ形迹ノ見ル有ラス此ヲ禁スル只神聖ノ大道ヲ更張シ再ヒ國体ヲ尊嚴ニ復シ報本反始祭政一致ノ理ヲ明ニシ 祖宗在天ノ神靈明威廟堂上ニ臨ミ玉ヲ如クシ人々ヲシテ戰々兢々陰惡ヲ懷タク井ハ忽譴怒ニ觸ルノ虞アラシメ而シ洋習ノ甚キ人ハ敢テ仕用セス漸ク杜キ微ニ防クノ道ヲ示ス是内外本末全ク手ヲ下シテ始テ天下ノ大患ヲ去ル可シ

肥後

鎌田平十郎

百八十番

五月十九日箱館官軍祝砲を放ちて戦勝を賀す

〔防長回天史第六編下〕

〔第二次ノ箱館戦争ト抄略〕

十九日總督牙營ヲ箱館ニ移ス同日十一時ヨリ諸艦祝砲ヲ放チ戦勝ヲ祝ス英米兩國軍艦之ニ和ス佛國船ハ既ニ去リシ如シ十二時ヨリ英艦其女皇即位紀念ノ祝砲ヲ放ツ我陽春艦之ニ和ス同日海軍參謀物ヲ英艦パール號艦以下ニ贈リ鬘キニ我海兵ヲ教助セシヲ謝ス

五月十九日先きに箱館を脱出したる松平定敬藩主是日横濱に至りて自首す乃ち名古屋藩に保管せしめらる

〔探索書扣〕

五月九日御達（九日ハ蓋し十九日の誤）

徳川三位中將に

松平越中横濱着船之上當分其藩に御預被仰付候事

行政官

五月

一五月十八日桑名侯横濱に着船十九日同所一泊廿日尾張邸に入御預之事

右桑名模様ハ先般在所家來より申立候ニ越中儀疾より歸順之存意ニ候得共道路塞リ歸國難相成趣ニ而願濟之上執政堂人監察壹人箱館に赴キ榎本に談判致候處御返シ申ハ安ケレトモ我兵ハ申サハ烏合ノ形成故高貴ノ人ヲ歸サハ自然人心

瓦解スヘクニ付御歸し申難シト有之ニ付不得止事執政ハ其趣ヲ報告之爲メ歸國致監察殘リ居頻リニ談判ニ及候處歸リ度と被思召候人ヲ強而止ルモ無益ニ付御返シ可申トノ事ニ而夫より支那船ニ乗セ歸府ニ相成候事

〔防長回天史第六編下〕

〔第二次ノ箱館戦争ト抄略〕

是月松平定敬潛ニ函館ヲ脱シ米國商船ニ投シ支那上海ニ赴キ謀リテ將ニ米國ニ走ラントス成ラス五月十九日横濱ニ歸航シ自首罪ヲ請フ乃チ名古屋藩ニ保管セシム八月十六日阿濃津藩ニ移シ四年三月十五日更ニ定教ニ保管セシム五年正月六日特命ヲ以テ其ノ罪ヲ宥ス

五月廿日脱藩浮浪人の本國復籍に關し更に令達せらる

〔明治王政日新錄熊本縣、明治諸控、復古帳〕

一五月廿日非藏人口へ御呼出ニ付成田方出頭之處醒醐少將殿より左之御書付忒通御渡ニ相成候事

脱籍浮浪人之儀ニ付昨年來毎々被仰出有之候處今以處々流寓罷在候趣畢竟本國復籍之途不相開各處戶籍人別取調不行届等ニ依ルコトニテ生民各其所ヲ得候様トノ厚キ御主意モ不相立隨而窮迫之餘途ニハ御政體ニ差障候儀ニモ可立到甚以不相濟事ニ候依而今般左之廉々被仰出候間府藩縣始諸采地中急ニ脱籍之者悉ク本地に引戻シ候様其主宰ヨリ可取計自然復籍等閑ニ致置此後流寓不所業之輩於有之ハ總而本地主宰ノ落度タル事ニ付其科ニ依リ屹度咎方被仰付候事

一都下始府藩縣戶籍人別明細取札可申事

一御親兵並府縣兵及附屬等は迄御用相勤居候者之内ニモ脱籍有之候ハ、郷國明細取調可申出事

但御用相勤候者ト雖脱籍致居候テハ後日復籍モ不相成御政體ニ差障候ニ付今度改而本國に御掛合之上被召遣候事

一府藩縣共脱籍之者其主宰ヨリ急速引戻シ各其處ヲ得候様仕向ケ可遣候自然其引戻ノ手行届兼候分ハ姓名年齢脱籍年月取調可申出候事

附リ從前郷國ノ法ヲ犯シ脱籍致候類郷國ニ於テモ打捨置本人モ其法ヲ糺サレンコトヲ懼レ復籍不致向モ可有之候得共大刑ヲ犯シ候分ハ格別其餘ハ昨年教罪被仰出候事ニ付總而前罪左免シ可遣事

一宮堂上始中下大夫上士社寺等家來並采地之者脱籍致居吟味行届兼候分は同様可申出事

一府藩縣共戸籍人別取調等閑ニ打過他方脱籍之者令潜伏自然不所業之輩有之節ハ其事之大小に依り其主宰之罪輕重之科可被 仰付事

一此後脱籍之もの於有之は急速追捕は勿論萬一行方不知者は最寄府藩縣に順達致置姓名年齢月日を以可届出事
右之通於東京被 仰出候間相違候事

五月

行政官

五月廿日本藩世子護久書を長岡護美に與へ自己の病狀を述へ藩主詔邦の速に歸藩せむことを希ふ意を致す

〔神庫文書十五番辰印二十七番〕

〔護久ヨリ護美へ〕

拜呈仕候愈御清康被成御渡海上も此度之天氣都合も能定而風波も無之と奉存候最早京地に御着被爲在段々御心配有之候と奉深察候京地之何程ニ御座候哉定而御靜謐と奉存候東京之混雜も可有之と存申候事ニ御座候薩州より虎之助罷歸至極之都合ニ御座候何も談も承候へ之感心之事ニ御座候此度之西郷も一大隊引東京に上長も同人數上り候由承申候格別之儀之無御座ると存申候段々小松列とも虎之助(田)談合雲上御下國之儀之彼方も同意之由定而東京に御出も被爲在

候ハ、宜敷運申候と存申候何程ニも急ニ御下國を祈申候事ニ御座候孤雲(溝)も肥前(肥前)に罷歸數馬(水)と段々談も出來申候是も都合宜敷御座候此度之入湯之儀を致申候筈ニ御座候へ共寸計近來病氣も宜敷無御座候時々差起申候間秋堤(寺)長允(深)杯も入湯宜敷有御座間敷と申候間今少宜敷御座候ハ、參申候筈ニ御座候追々近邊乘廻位之致申候へ共立居ニ難儀仕申候最長允之以前より入湯之宜敷無御座申候へ共秋堤之宜敷と申候へ共此節之右之都合ニ付同人も惡敷申候小子も此度之藥用專(いた)し候覺語ニ御座候此度之東京茂段々懸念之次第も有之候間將監(吉)に小子より相談仕病氣之氣之毒ニ存申候へ共不容易事ニ付東京に罷出候而之何程ニ御座候ヤ相談仕候處同人も殊之外奮發仕候間小生も大キニ安心仕不遠内ニ京地に罷出可申此度之帶刀(長)圖書(兼)も居申候間西東京之時勢見聞之爲ニ出立と同人よりも申候間其通ニ仕候事ニ御座候御地に罷出候ハ、段々御談も有之と奉存候駕斗同人も吞込居申候間休書(長)も力ニ相成申候と存申候事ニ御座候何ぞ爰許ハ御立後相變候儀も無御座候一日も早く雲上御下國を奉祈候外無御座候乍末二ノ丸御花畑兩御殿も御揃被遊益御機嫌能被爲入御同然ニ奉恐悅候嚙々何ると御配慮御事と奉存候處々御廻勤御出等も可被爲在被成御氣削候と奉存候右迄荒々如此御座候早々頓首

五月廿日

尙々時下御自愛專一ニ奉祈候御序ニ美濃(小笠)之山(道)御側向へも宜敷御傳聲願申候右迄已上

五月廿一日總督清水谷公考箱館戰勝諸藩兵の功勞を賞し且つ我藩兵に感狀を授與す

〔防長回天史第六編下〕

〔第二次ノ箱館戰爭下抄略〕

二十一日早曉春日艦増田參謀森清藏ヲ載セテ箱館ヲ發ス戰狀急報ノ爲メナリ(中略)同日總督諸藩兵ノ戰勞ヲ慰賞シ守備ノ爲メ伏見兵弘前兵松前兵等若干ヲ除クノ外ハ各々休兵ヲ命ス尋テ今月下旬中大抵相前後シテ海路凱旋ス

明治二年

八四七

〔石寺永屋書類〕

箱館津輕古營戰爭ノ概略(五月十八日)
日(續)

廿一日惣軍箱館大盛演ニ聯隊シテ以テ銃ヲ鳴シ祝捷ノ禮ヲ爲ス此日督府ヨリ感狀ヲ肥後兵隊ニ賜フ左ノ通り

肥後兵隊

賊徒追討ニ付邊陲僻地山海超越致勇戰遂成功候段全忠勇之實不堪感佩候此旨速可及奏聞候也

公 花押

五月

(編者曰、本書廿一日に祝捷の禮を爲すとあれとも前の十九日の事を誤記せしなるへし)

五月廿一日我藩隊長志水一學降人榎本釜次郎松平太郎荒井郁之助大鳥圭介永井玄蕃松岡盤吉相馬主殿等七人を東京へ護送すべく命せらる

〔石寺永屋書類〕

箱館津輕古營戰爭ノ概略(前編五月廿一日)
日(續)

廿一日督府肥後兵ヲシテ賊ノ魁榎本武揚大鳥圭助松平太郎永井玄蕃荒井郁之助松岡盤吉相馬主殿七子ヲ東京籠ノ口軍務官糺問局ニ護送スルコトヲ命令ス其書左ノ通り

志水一學

右賊魁護送中臨時之事見込ヲ以テ所置可致候事

總 督印

五月廿一日

五月廿一日午後四時箱館市中大野藩警衛所ニ在ル右七名ヲ受取り同日共ニ箱館ヲ發シ護衛怠ルコト無ク六月三十日陸路ヲシテ東京ニ達シ即日籠ノ口軍務官糺問局ノ吏ニ付ス(以下六月三十日に續く)

〔大鳥圭介傳 幕末實戰史〕

十九日、永井、松岡、相馬三子も辨天崎臺場に來り同宿し、猪倉屋二泊の後東京行の命あり、則ち五月二十日米船洋西に乗り細川藩の護衛にて青森に至り、二十日上陸同地の旅舎に宿せり、翌二十一日青森出立、浪岡泊にて弘前に着き同所二泊にて七人とも綱張りたる駕籠に乗り、籠の鳥の思にて上り、秋田邊に行き、山形上の山を経て福島に出で四十日程にて六月三十日東京に入れり

護送の細川藩の兵は一中隊程にて、其の隊長を志水一學と云ひ、副長を石寺九兵衛と云ふ、隊長より隊士迄も皆篤實なる人々にて朝夕心を竭し、旅情を慰勞され却て氣の毒に思ふ程なり、是れ素より 朝廷特旨の忝きより出づると云へども、其の藩の我曹を慰むの厚きより生ずる事ならんかと七人共に團欒する毎に何を以つて謝せんと云合へり

五月廿二日天皇諸侯伯參集所に親臨ありて皇道興隆及び蝦夷開拓の勅問を發し給ふ

〔一新録皇令、一新録自筆狀〕

由明治二年至三年
玉音ニテ御沙汰

方今國家急務事件下問致候猶輔相ヨリ可承

議長口達振

勅答之儀ハ來ル廿五日從已刻到申刻可差出候事

一書面而已ニテ 勅答之向ハ重臣ヲ以可差出候事

一書取ノ外演說致シ度向ハ常人參 朝議長ニ面會可申上候事

五月廿二日

但美濃紙摺帳ニ相認可差出候事

議

長(大原重徳)

御下問書二通

我皇國 天神天祖極ヲ立基ヲ開キ給ヒシヨリ 列聖相承天工ニ代リ天職ヲ始メ祭政維一上下同心治教上ニ明ニシテ風俗下ニ美シク 皇道昭々萬國ニ卓越ス然ルニ中世以降人心偷薄外教コレニ乘シ 皇道ノ陵夷終ニ近時ノ甚キニ至ル天運循環今日維新ノ時ニ及ヘリ然トモ紀綱未タ恢張セス治教未タ浹洽ナラス是 皇運ノ昭々ナラサルニ由トコロト深ク御苦慮被爲遊今度祭政一致 天祖以來固有之 皇道復興被爲在億兆ノ蒼生報本反始ノ義ヲ重シ敢テ外誘ニ盡惑セラレス方暫一定治教浹洽候様被爲遊度思召候其施爲之方各意見無忌憚可申出候事

五月

蝦夷地之儀ハ皇國ノ北門直ニ山丹滿州ニ接シ經界粗定トイヘトモ北部ニ至テハ中外雜居致候處是迄官吏之士人ヲ使役スル甚苛酷ヲ極メ外國人ハ頗ル愛恤ヲ施シ候ヨリ土人往々我邦人ヲ怨難シ彼ヲ尊信スルニ至ル一旦民苦ヲ教フヲ名トシ土人ヲ煽動スル者有之時ハ其禍忽チ箱館松前ニ延及スルハ必然ニテ禍ヲ未然ニ防クハ方今ノ要務ニ候間箱館平定之上ハ速ニ開拓教導等之方法ヲ施設シ人民繁殖ノ域トナサシメラルヘキ儀ニ付利害得失各意見無忌憚可申出候事

五月

〔一新録自筆狀〕

由明治二年至三年 (明治二年五月廿五日東京發西京六月七日發同廿一日濱長岡書狀一節) 以別紙申達候去ル廿二日在府諸侯御下問之儀有之間御參 朝可被爲在旨御達有之候付同日辰之刻御參 朝被爲在候處玉座近ク被爲召 玉音を以別紙之通 御沙汰被爲在畢而議長卿より猶別紙之御口達之上 御下問書貳通御渡有之候云々

五月廿二日彈正臺を置かる

〔防長回天史第六編下〕

(明治二年夏期ノ大勢抄甘略) 同日(五月廿二日)又彈正臺ヲ置キ門脇重綾吉井幸輔ヲ彈正大忠ニ任ス 後九條道孝ヲ彈正尹ニ池田茂政ヲ彈正大弼ニ任ス 五月廿二日浮浪者復籍の件につき重ねて示達せらる

〔復古帳〕

五月廿二日民部官方御呼出ニ而録事馬杉繫ヲ以御渡ニ相成候御書付諸家様に及御通達候寫 今般東京府ニおゐて無籍無産之者取糺之上前年脱籍出生分明なる者之其府藩縣に引渡被 仰付候處兼而右等之者所置方ニ付而之屢被 仰出之趣も有之候得とも當節ニ至り從來召抱置候家來共を妄ニ永之暇を差遣し其行先を付遺さす或之誰に引渡と申儀も無之全ク放逐同様之所業いたし候者も有之哉ニ相聞に不人情之儀ニ而不謂事ニ候向後當府ニ不限總て無據暇遣候儀有之節ハ舊籍に渡し候る又ハ更ニ受人に相渡入籍ニ請證文取付ケ御厄介無之様致所置其筋へ可届出候方一不所置之儀於有之之舊主之可爲越度候此段爲心得相達候事 但生國萬里分明ニ候共歸籍難相整候分ハ當官に可申出候事

五月

五月廿三日日本藩徴士澤村脩藏民部官庶司知事を命せらる

〔復古帳、一新録自筆狀〕

由明治二年至三年 五月廿三日 御沙汰

徴士民部官庶司知事被 仰付候事

明治 二年

民部官

澤村脩藏

五月

行政官

五月廿三日日本藩山田五次郎秋吉又助徴士を免せらる

〔復古帳、一新録自筆狀〕

五月廿三日 御沙汰

山田五次郎

勤仕中格別勵精之段神妙之事ニ候今度官員御減省ニ付是迄之職務被免候事

五月

行政官

右同斷御減省ニ付徴士是迄之職務被免候事

秋吉又助

五月

行政官

五月廿四日本藩奥州出征兵士に對し曾て恩賜の命ありし毛布下附の令達あり

〔復古帳〕

五月廿四日軍務官より公用人御呼出東太郎平を以御渡尤毛布ハ翌日御同官ニ而受取相達可申との事

細川越中守

於出張先蒙 御沙汰候毛布四十四人分被渡下候事

五月

軍務官

五月廿四日本藩小倉上野の兩戰役に勳勞ありし高山秋藏を賞す

〔御國東京往來狀扣〕

以別紙申達候

高山秋藏

其方儀小倉戰爭之節小斥候として所々に被差越於赤坂鳥越之及炮發相働去年五月上野進撃ニ付而之御人數嚮導いゝし衆ニ先立山内に乗入銃彈ニ茂中り相働且東京城請取等付而茂彼是格別骨を折候付御中小姓被 仰付御軍備方參政觸被召加猶目錄之通被下置旨被 仰出之

御紋附御給

右之通例之趣を以御申渡候様存候以上

五月廿四日

副執政中

小笠原美濃殿
田中典儀殿

〔編者曰、當時高山秋藏は東京に在りて此賞賜を受領したるなり、江戸京都來狀扣に執政長岡帶刀等の通報書ありて、右高山秋藏へは六月十三日江戸にて申渡たる由見たり〕

五月廿五日諸侯伯及ひ中下大夫等を召して内治外交並に理財の件につき諮問あらせらる

〔一新録自筆狀〕

〔五月廿五日東京發長岡帶刀斷圖書より在京都小笠原田中及び在國執政等への通達狀の奥書〕

再仰今日も尚 御下問被爲在候付而被遊御參 朝候處別紙之通御書付被成御渡候右御書附之趣ニ付而ハ別途生御使を茂可被差越夫等之儀未々決議ニ到り兼申候依而先 御下問書寫迄差進申候再白

明治二年

版籍返上之儀追々衆議被 開食候處全ク政令一途ニ出ルノ外無之依而府藩縣三治ノ制ヲ以テ海内統一可被遊御旨趣ニ付改而知藩事ニ被任候思食ニ候間所存無忌憚可申出候事

五月

夫字内ニ國スルモノ内外親疎ノ別アリト雖トモ安シソ相往來セサルノ理アラシヤ既已ニ往來ス亦盟約ノ信ヲ固クセサルヘカラス故ニ信義ヲ尋ネ條理ヲ追ヒ愈以獨立自主ノ體裁ヲ確立候儀交際上ノ準的ト被 思召候間意見無忌憚可申出候事

五月

理財之道ハ經國之要務ニシテ人心ノ離合風俗之厚薄ニ關係シ至重之事ニ候響キニ幕府之衰ル理財其道ヲ失ヒ用度不節新貨屢製シテ府庫愈空シク外ハ各國之債ヲ負ヒ内ハ私鑄之弊ヲ生シ殆ト矯救スヘカラサルニ至ル一旦 朝廷其疲弊之甚ヲ受ケ續テ東北之軍費莫大ニ及ヒ楮幣御發弘相成候得共國債私鑄之害上下之困迫此極ニ至リ量入爲出之御目的スラ未相立然ルニ外國交際日ニ開ケ貿易月ニ盛此時ニ膺リ會計之基礎不立候ニハ皇國御維持之儀如何可有之哉ト深ク御憂慮被爲在今度上下同體政令歸一之思食ヲ以テ偏ニ全國之力ヲ合セ從來之弊害ヲ矯救シ富國強兵之本ヲ被爲開度就而ハ條目ヲ以テ御下問被爲在候間各意見可申出候事

一惡金銀之事

右私鑄嚴禁之法並贖金通用停止之始末

一内外國債之事

右利息之法並返済之始末

一歲入歲出之事

右別紙之不足ヲ補ヒ並凶荒ヲ救ヒ不虞ニ備ルノ始末

五月

別紙(一新錄皇令に據る)

歲入

凡惣高七百九拾貳萬五千石餘

此免凡貳分五厘ニシテ米百九拾八萬千三百五拾石餘

內

歲出

一御所

一皇太后宮

一後宮

凡現米拾五萬石

一神社營繕

凡現米三萬石

一諸官行政神祇外國刑法彈正公議待詔局共

凡現米拾貳萬石

一民部官水利橋梁驛遞牧牛馬物產其外入費

凡現米拾五萬石

一會計官造幣鑛山營繕百官旅費其外用度

明治 二 年

凡現米拾三萬石

一軍務官海陸軍用費

凡現米三拾萬石

一學校及開成所

凡現米五萬石

一病院貧院

凡現米六萬石

一製鐵所

凡現米七萬石

一諸官月金

凡現米貳拾貳萬石

一京都東京大坂三府

凡現米拾萬石

一諸縣月金諸費養廉

凡現米拾五萬石

一宮公卿及中下大夫其外俸祿

凡現米拾七萬石

一降伏人及貧民等御扶助

凡現米拾貳萬石

元債三百五十萬兩一ヶ年一割利分

一内債

凡現米八萬石

元債六百萬兩一ヶ年一割利分

一外債

凡現米拾三萬石

内外債三千万兩十ヶ年濟

現米六拾六万六千六百六拾石餘

五月廿五日東京に在る萬石以下諸侯の第宅を制限し且つ東京郭外の宅地に課税すへき旨を達せらる

〔復古帳〕

五月廿五日辨事御傳達所方御呼出ニ而伊藤民之助を以御渡ニ相成候御書付諸家様に及御通達候寫

一御布告之通万石已下屋敷可爲一ヶ所事

但下屋敷上地いもし候而差支尙又拜借願濟ニ相成候ものハ地稅可差出事

但町屋敷受領之者ハ武士上地へ引替相願可申尤引替候而ハ難渡之向ハ其儘被下候積ニ付其頭支配ニ而取まらへ可申

立何も地稅之儀之追而可相達事

一内神田濱町築地邊郭内ニ準し候旨去辰九月中相觸置候處此度神田橋御門通り昌平橋通を境といふし東之方神田濱町築地邊已後郭外と可相心得事

一賞典

高百万石 此現米二十五萬石

一非常豫備

一臨時入費

凡現米三拾万石

合現米三百貳拾四万六千六百六拾石餘

出入差引不足

現米百貳拾六万五千三百拾石餘

別ニ諸稅アリト雖モ未タ其實ヲ審ニセス今此ニ略ス

一郭外ニ而町地ニ可相成武士上地之屋敷改ニ而取調可申立事

但町地ニ相成候上之總而町並之通尤武士上地に住居可相濟身分之者も住居相免し地稅御入用共爲差出可申事

一拜領町屋敷所持之者ハ地稅可差出事

一宮堂上方家來諸藩上等文武師範いふし居敷又之無棟筋ニ而其主家邸内ニ罷在候而之差支候分之武士地拜借開濟地稅爲差出可申事

但身分之儀之主人又之其頭支配ヨリ屋敷改役所に添筋を以申立候ハ、糺之上地所貸渡可申事

一是迄武士上地へ住居いふし居候町人別之者又町醫師御用達町人角力檢校勾當等者總而來住町人別之部ニ入其所年寄共右

地所拜借證文に加印致し差出候ハ、當分差置地稅爲差出可申事

右之通ニ有之候間相心得可申候事

五月

行政官

五月廿五日日本藩主詔邦皇運興隆其他數件の諮詢に對して奏答書を上る

〔一新録皇令〕

臣諸邦頓首百拜謹白

天祖以來固有ノ 皇道ヲ復興スル 聖慮アツテ其施爲ノ方ヲ群下ニ諮詢シ玉フ 朝廷言安ニ及フ誠ニ社稷ノ大幸万民ノ洪福何ヲ以テ之ニ加ん臣恭ク此ノ 明詔ヲ讀テ拊躍ニ堪ヘスト庶亦感泣奮勵スト聞ク是天下人心磨滅ス可ラス善ニ嚮フ影響ヨリ疾キ所以ナリ苟モ此ノ 明詔ノ盛意ヲ推擴セハ天下何ソ治ルニ足ラン四夷何ソ御スルニ足ラン然トモ竊惟古語云有始有終者其惟聖人乎又云莫不有始鮮能有終伏望 朝廷ノ此言始終不渝永世不朽能ク中興ノ鴻基ヲ建ラレ之ヲ千萬年ニ傳ヘ玉ハンコトヲ夫往古 皇道隆盛ニシテ德化宏遠君臣上下ノ分定テ大義天下ニ昭々タリ其故他ナシ三器ノ訓ニ基キ上一邪ヲ容レス一姦ヲ蓄ヘス清明純粹ニシテ天下ヲ照臨ス依之天下ノ朝廷ヲ仰貴フ事神明ノ如シ迨

明治 二一年

應神天皇朝始テ漢土ノ經籍ヲ資用テ 天祖ノ彝訓ヲ助成シ人倫益修大義益明其後ニ至テ巫覡浮屠儒術俗學ノ説アリテ
 大ニ正教ヲ亂ル從是以降 皇道漸廢人倫漸壞ル加之近世ニ至テハ泰西耶蘇天主ノ邪教屢人心ヲ蠱惑ス 皇道ノ厄勝テ
 歎ス可シヤ今ヤ之ヲ更張セントス實ニ千載ノ一時ナリ其功效ニ至テハ歲月ヲ積テ見ル可シ瞬息ノ期スヘキニ非ス要之
 先ツ廟堂ヲ清肅シ邪説ヲ斥逐シ洋風ヲ禁絶シ凡事 祖宗ノ遺意ニ基キ再ヒ 神聖ノ大道ヲ揚明シ猶鏡ノ塵ヲ掃ヒ垢ヲ
 去テ明光ノ遠ヲ照スカ如ク 皇道ヲ明ニセントスレハ則他方ナシ唯外誘左道ノ汚レヲ除ニ在リ然而祭政一致ノ理ヲ示
 ス是又 朝廷先シテ之ヲ行玉フヘシ今某日良辰ヲ擇ヒ 天祖 大祖ノ神ヲ 廟堂ニ享シ新タニ祭祀ノ盛典ヲ舉ケテ此
 日ニ於テ群官諸侯ヲ會シテ同心協力大ニ 皇道ヲ興起シ外誘ヲ攘除スルヲ以テ 神明ニ誓ヒ若シ此誓ヲ渝エ茲ヲ行ヒ
 非ヲ爲ルトキハ則 神明ノ罰アルヲ示ス是ニ於テ事天祀先反始報本ノ義始テ見ル施爲ノ要件ノ如キハ一ニハ伊勢ノ
 神廟ヲ崇祀シ諸國ノ淫祠ヲ毀チテ遙拜所トシ人々ヲシテ神ヲ敬スル意ヲ知ラシムニハ天下府藩縣ヲシテ大小學校ヲ
 建設シテ 皇道ヲ講明シ倫理ヲ脩治ス三ニハ皇子親王ノ緇流桑門ニ入ル人ヲシテ盡ク還俗シ 皇胤ノ貴キ佛ニ接セサ
 ルヲ示ス四ニハ天下ノ佛寺漸ヲ以テ合併シ僧侶漸ヲ以テ沙汰シ人民ヲシテ遠ニ佛説ノ愚ムニ足ラサルヲ知ラシム五ニ
 ハ兵隊ヲ除ク外洋服ヲ着シ洋冠ヲ戴キ被髮脫劍スルモノ之ヲ禁シ技藝器械被ノ所長ヲ取ル而已政教制度ニ至テハ一切
 模倣セサルヲ示ス如此ナレハ則本末相定ル積累不怠彌久不變ハ 皇道ノ古ニ復ス遠キニ非ス然ト雖所謂神而明之在人
 又其人存其政舉ト云ヘル如クナラスシテ苟モ官其人ヲ得サルトキハ事行レサル而已ナラス宋ノ王欽若王安石カ古道ヲ
 復スルヲ口實トシテ奸ヲ逞スル如ク徒ニ害アツテ益ナシ仰願クハ 朝廷樞要ノ地ニハ 皇道ノ眞ニ可貴國體ノ實ニ可
 崇ヲ知リ功利外誘ニ迷溺セサル大器ノ人ヲ用ヒ玉フトキハ 皇道ノ振起爲シ難カラス 皇道ノ深意施爲布置ノ密ナル
 ニ至テハ下問日迫ル且ツ臣カ淺陋敢テ識ル所ニ非ス尙再問ヲ賜ハ、國論ヲ凝シ詳明獻言スヘシ但非常ノ 明詔ヲ蒙リ
 狂妄ヲ忘レテ梗概ヲ陳言ス不堪多罪戰慄之至誠恐誠懼謹言

明治二己巳年五月廿五日

源

詔

邦

臣詔邦敬白蝦夷地ヲ開拓教導スル方法ノ 御下問謹テ惟ルニ臣西陲ノ生ニシテ最モ東北ノ形勢ニ暗シ只地圖等ヲ以テ
 按スルニ蝦夷ハ本邦ノ北門宜シク鎖鑰ヲ嚴ニシ經界ヲ廣メ皇化ヲ布ク可シ一旦之ヲ外國ノ有トス所謂唇齒寒ニ至ル
 防微杜漸ノ策ナカル可ラサルハ論ヲ待タス然トモ唇齒ノ患未タ人ヲ殺スニ不至今腹心ノ患アリ之忽セニシテ藥石ヲ下
 サ、ルトキハ忽チ身ヲ斃ス速ニ之ヲ救ハサル可ラス其故何ソヤ抑外國人入港已來既ニ十六七年萬幕失措ヨリシテ猖獗
 日復一日其患今日ニ遺セリ然ルニ今未タ貿易五市ノ規則立タス通信ノ數累巨萬彼ノ富強愈大我ノ國威益墜今ニシテ連
 信ヲ償ヒ國體ヲ張ラスンハ其極途ニ國內ノ土地ヲ割テ謝スルニ至ン外地蝦夷ノ得失ニ比スレハ其輕重如何ソヤ臣因テ
 竊考先ツ内地ノ患ヲ救ハスンハ蝦夷地ノ開拓畫餅ニ屬ス宜シク速ニ通信ヲ返スノ策ヲ講シ外國交際上彼此主客ノ分ヲ
 明ニシ五市通信ノ規律ヲ定是非曲直ヲ許較シ我ノ非ト曲トノ如キハ斷然陳謝シ向來ノ條約ヲ新定シ永ク通親ヲ保ツ可
 ラシム如此シテ始テ稍腹心ノ患ヲ免ル然ル後蝦夷開拓ニ手ヲ下ス何ソ晩カラシ若夫蝦夷ヲ開拓スルニハ先ツ險要ノ地
 ヲ擇ヒ帥府ヲ建置之智勇恩威アル人ヲ督帥トシ四方ヲ牽制經略シテ境界ヲ廣ム且ツ本邦内無籍ノ民及ヒ卑賤無產者彼
 地ニ移住セシメ漸々開墾シ人畜ヲ蕃殖シ又有罪ノ人アルトキハ時宜ニ因リ彼地ニ配徒數年ノ後ヲ待タハ或ハ版籍貢賦
 アルニ至ラン詳細ノ事ハ彼地ヲ履歷スルモノ集メテ議セシメテ可ナラム此外別ニ卓見奇策ナク 御下問ノ責ヲ塞而已
 恐惶頓首

明治二己巳年五月廿五日

〔由明治二年至三年 新錄自筆狀〕

明治二年五月廿五日東京發西京六月七日發同廿一日着

以別紙申達候去ル廿二日在府諸侯方 御下問之儀有之候間 御參 朝可被爲在旨御達有之候付同日辰之刻 御參
 朝被爲在候處 玉座近ク被爲召 玉普を以別紙之通 御沙汰被爲在畢而議長殿より猶別紙之通御口達之上 御下問書
 貳通御渡有之候由て被遊 御下候依之最前 勅答之御主意等推擴ハムし御草案取らる候様鎌田平十郎に申達昨夕

明治二年

草案相違候付御役々打寄一ト通讀流し格別異見茂無之其内時日切迫ニ付直ニ 雲上に茂差上被遊 御然讀 思召不被爲在候ハ、直ニ 御下を奉願置候處夜ニ入圖書被 召出 思召寄之被等被 仰付候付猶研究之上其通引直シ今拂曉迄ニ精書出來今朝 御持參被遊 御參 朝候則別紙 御勅答之寫差進申候實之此節之御文體些文章ニ馳せ至候儀茂御座候得共何を申茂前文之通平十郎相違候後暫時之猶豫茂難成餘り切迫之事ニ而夫等之儀深ク遂研究を候間合無之恐入候事ニ御座候全幹 朝廷より之御仕懸如是急迫ニして天下之公論疎漏之恐不少奉存候將又追々 御下問有之候得共未タ一箇も實地上御施行ハ無之依而唯々御手数數而已杯と種々説を成候藩々も有之哉ニ相聞 御初政之折柄猶更人望を不被失様無御座候半而之難相濟加之内外事務御繁多トハ乍申 廟堂之不整無申計萬般御不都合之事而已多由御座候既此方様に茂一昨廿三日ニ之御用之儀被爲在候間已刻禮服 御着川 御參 朝可被爲在旨御違有之御刻限と云 御着服等之儀を以奉推考候得之彌以御恐悅事ニ相違有之間敷奉伺居候處如何之間違ニ御座候哉 御用之儀者御延引ニ付御退 朝被爲在候様官掌方御演達申上候山ニ而空敷 御退 朝被爲在候餘り輕卒なる事ニ而内密山田十郎を以三條公に相見申候處別紙聞取之通埒茂無キ事ニ御座候如是 廟堂之諸官吏輕卒ニ而ハ萬般想像仕更始一新之 御成功懸念不少尙ニ杞憂仕候猶委曲之近日帶刀被遊御差立候節ニ讓草々如斯御座候不盡

五月廿五日

藏 長岡帶刀

小笠原美濃殿

田中典儀殿

執政衆中

副執政衆中

三條卿より山田十郎聞取之趣

五月廿三日三條卿に山田十郎差遣 太守様御用之儀御間違之御模様内密奉覽候處左之通

一 今廿三日御用之儀被爲在候ニ付辰刻禮服御着御參 朝御座候處午刻比に至今日御用之儀御延引ニ付御退 朝有之候様官掌を以演達有之候ニ付直ニ 御退 朝ニ相成申候右演達之通ニ者御座候得共御家來中茂甚不安意ニ御座候間御間柄之譯を以極密御模様奉伺度段申上候處條公甚御仰天ニ而昨日御出仕迄之處者太守様御用召などの儀ハ一向御承知無之はまらぬ事ニ而爲有之と御噂有之いつを辨事録事當り氣取違ニ而爲有之哉重疊つまらぬ事故明日御出仕之上篤斗御承糺内密御知可被爲在との趣相伺引取申候由

一 右之通御座候處翌廿四日條卿に被差出置候崎村常雄より之來狀左之通ニ而埒茂無キ次第辨事録事當り之氣取違と相見申候

山田十郎様

崎村常雄

日々うつとふしく困入申候翌昨夕之儀之今日御取えらる之處全ク間違ニ而右之事件ニ關係ハムし候役々ハ既ニ今日より差扣被 仰付候此段申上候様御沙汰御座候まゝ得貴意候也勿々頓首

五月廿四日

五月廿五日本藩五月上納分軍資金四千七百五拾兩を獻納す

〔御在京御在府御在國共御記録〕

陸軍御局に

軍資金當五月上納分中將領知高五拾四萬石之内末家細川若狭守に三萬五千石細川豊前守に三萬石内分を以遺置候ニ付右高を除四拾七萬五千石之割を以壹萬四千貳百五拾兩之三分一別紙之通相納申候此段申上候以上

細川中將公用人

五月廿五日

宗村加兵衛

明治二年

八六一

覺

高四拾七萬五千石
一金四千七百五拾兩也
右軍資金上納仕處如件
五月分

肥後國熊本

細川中將公用人

宗村加兵衛印形
有之

明治二年五月廿五日

五月某日本藩北米合衆國留學生伊勢佐太郎沼川三郎に外國官より更に留學を命し且つ改正印章を交附せらるるにつき年齢調書を提出すへき旨達せらる

〔御國東京往來狀扣〕

(五月廿六日長岡帶刀藏圖書より通報書の内)

合衆國留學生

寫
伊勢佐太郎
沼川三郎

右之者共儀於合衆國都府留學之儀今般更ニ被仰付留學中諸入費爲御手當一人一ヶ年洋銀六百元宛被下置候條別而學業勉勵皇國之御爲筋相心得謹慎修業可致候

右御免許之趣其當人共に當官より申達候得共尙其主人より茂可被申達候事
己五月

外國官
判事

細川越中守殿

公用人中

寫

伊勢伊太郎
外一人

右今般改正之御印章銘々に可相渡候間當人年齢書付早々可被差出候且御印章相渡候節定例之通爲手数料壹枚ニ付金五百疋上納可被致候依之申達候以上

己五月

外國官
判事

細川越中守殿

公用人中

五月廿五日本藩外國留學生に對し改正印章下付の件につき伊勢佐太郎等の年齢調書を進達す
〔東京之御用狀扣〕

外國官御役所に

右一通

伊勢佐太郎
沼川三郎
當已廿五歲

右今般御改正之御印章可被渡下候間當人年齢書付早々可差上旨御達之通ニ付別紙差上申候以上

五月廿五日

細川越中守内

右一通

井上治部丞

沼川三郎
當已廿歲

明治二年

八六三

五月某日本藩岩男助之丞監督司知事を命せらる

〔御國東京往來狀扣〕

（五月廿五日東京發狀に添付したるものなり）

岩男助之丞

是迄之職務被免監督司知事被 仰付候事

行政官

五月

五月某日本藩徵士上野堅五職務を免せらる

〔御國東京往來狀扣〕

（五月廿六日發狀に添付したるものなり）

細川中將

其方家來上野堅吾儀御座候處今度官員御藏省ニ付差免候間此旨相違候事

行政官

五月

五月廿六日實學派米田虎之助等切に我藩當路の交迭を企畫し書を在京同志に贈りて近況を内報す

〔津田家文書〕

（包紙）津田山三郎様

米田虎之助

平安齋

一翰致進呈候向暑之節愈御清祥可被成御勤務珍重之至ニ御座候先以先月廿一日同廿四日元田に御遣之御狀相達し早速元田方傳達反復致被見候東京府暴論件々誠ニ以沙汰之限痛心之至ニ御座候處岩倉公を御内示有之貴兄御東下ニ相成候

段實ニ天下國家之至幸安喜此事ニ御座候然しなら此節之儀之實ニ一大事件御一身水火之中ニ御投没被ニ臨んてハ非常之御活斷も可有之との御紙表御決心之御胸中致深察候右御書狀之天下之事狀岩倉公之御舍ノ貴兄之御決心等御國家之御覺悟ニ相成候事ニ付世君上良公子に之角左衛門方入御覽同席中ニ者將監迄拜見致させ申候若上御初貴兄之御様子ハ重々御感心ニ而御一身を以水火之中ニ御立ニ相成御配意實ニ無限被察候得共國家興亡之際御一身ニ有之候事ニ付何卒十二分之御盡力有之度存候近日之御模様如何相成居候哉先月十六日之報知以來一度之便宜も無之日々相待居候事ニ候此許良公子ニ茂去ル八日御發途ニ相成其前日御狀も到着致し時御承知ニ而右之候間京地之御模様次第直ニ御東下ニ相成候哉も難計美濃角左衛門ニも彌奮發此節ハ見込通りニ是非乗付候覺悟ニ有之候間御東下ニ相成候ハ、御力を可被得と存候小生ニも先月廿八日方薩に御使者とし而罷越日數十日之滯留ニ而大隅公御父子様ニも拜謁致し小松初メ伊地知黒田等參政之而々ニも出會別而小松寛々十分之話合致し國情も無殘吐露致し候處御三殿御一席大變革之御趣向ニ至極同意ニ而東京ニ而右等之御都合ニ相成候様ニ之朝廷に茂盡力可致との小松話合ニ及申候尤小松儀之當月末方上坂夫方横濱へ罷越候ニ付東京ニ者來月末ニも可相成との模様ニ付此節西郷大久保迄右等之依頼之爲別紙差越置申度何卒貴兄方御傳達被下候様御頼申候貴兄ニも右之趣を以兩子ニも篤斗御談し合可被成申迄も無之貴兄兩子ニハ兼而之御信義故萬般御談合有之其段も兩子へ頼ミ遣し置候小松内話を承候へハ岩倉公御東着之上ハ斷然大號令御發出ニ可相成西郷ニも六百之兵隊を率而東下此節之暴徒頭壓之儀自分任し而出張致し候由其外長之三堀幸助土之板垣退助等いつても兵隊を率申候山ニ而暴徒動キ出候得之忽チニ討滅之覺悟ニ有之薩數十年尊王之大志此節股肱と思召との論旨を蒙り候得之一藩を以天下を荷ひ誠ニ以凜然たる氣象感服致し候計ニ御座候右委細之模様之世君上ニも遂一申上彌以御志氣御奮發被爲在君上御歸國之上十分之御變革可被遊との思召ニ而暴徒之動搖之輕重難易如何様ニも御處置可有之就而將監儀急ニ東下被仰付來月朔日方出立之筈ニ而將監ニも非常之決心感心之事共ニ御座候此節之上下拾一人時拜見習とし而罷越一切外々へ取合不申何も休焉と貴兄へ御談し合候筈ニ付小子方貴兄へ宜敷得御意候様との事ニ御座候且又大

明治二年

八六五

久保へ而會萬事示教を受度是亦添書致し吳候様との頼を受候間是迄之將監と無御見下々小子同様ニ御談し合被下此段ハ安場ニ茂篤斗御話合被下候様吳々も御頼申候此許之氣配り之右等之都合ニ候得共東西千里何も跡事と相成も之や事々落着ニも至り候哉も難計只々御便を相待居候事ニ御座候古閑富次京地直ニ差下し一躰之事情等ハ是方御聞取可被下と略致し候右之件々得御内意度例之愚筆自由ふら代筆を以如此御座候以上

五月廿六日

米田虎之助

津田山三郎様

尙々時下随分々々御自愛專一ニ祈申候新堀初社中いつまも無異ニ居候間御安心可被下候猶後便ニ譲り略致し候已上
(折返し) 添呈 平安 元 田 拜

兩度之御内狀御返書可仕候處別紙虎殿之書翰代筆仕候間略仕候此節之御決心御盡力只々奉感服候此許一躰虎殿書中之通りニ而彌御都合之宜敷虎殿益感心仕候安場之來狀事情明白虎殿方世子君へ入御覽ニ相成申候新堀初社中壯健御休襟可被成下候安場へ別段書狀仕出得不申虎殿書中御傳へ可被成下候御留守様彌御安康御安心可被成下候此段迄略呈仕候已上

五月廿六日

元 田

津田様

再白時下御自愛御專一奉祈候以上

〔男爵安場家文書〕

極密報告(五月十一日)

一將監殿(有) 不一形憤發邦家柱石之責を以一身ニ被荷候ト相見へ米家話合充分ニ同議一意ニ出廿二日世子君御直ニ將監殿に被仰付候來月朔日熊本發途ニ相決申候東西京府事情探索被仰付候爲御差越被遊候との事ニ承候

付箋

世子御直被仰渡卒而御手つから短銃將監殿に被爲拜領候御深意有之候儀ト奉推察候

一沸騰過激益賊輩を登用致し候姦魁廿余人之是非御誅戮無之候而之難叶候との事ニ而將監殿右之姓名世子君御覽ニ被奉入候との事

將監殿此行寬猛二字之措置ニ出候存意之由寬則巨魁薙圖書住江藤木小篠輩速ニ御國許に被差下候様被奉願候管との事猛則此議相拒ミ難被行勢ニ成行候節之斷然斧斤を用候處置有之候管との事

正義ニ之牧多門助殿澤村尉左衛門安場一平罷在候間此兵力を以事を濟れ候存意ト相考申候

有吉家之葛西中山登人茂供不被申附只壯健之輩十三人ト同行之由

中山葛西輩俗論起リ候弊共大夫英斷ニ而沈黙いたし候ト相聞申候

此議萬一被行兼候節之世子君米家二ノ目を御繼被遊候思召敷ト乍恐奉推考候世子尊慮始より米家ハ此節ハ不被差越候思召ト承及申候社中ニ而も紛紜異議起リ新堀元田村井同議

牛島神足横井山形竹崎駒井同論元田も同意ト申出候

隅州小松重野贈詩懇々切々公論皆同一意ニ出申薩州事情及此節安場君貴帖東西之事情是亦如合符節惣躰天下之大事業を處決致候事ハ少壯英勃之氣精義日月を貫キ候程ニ無之候而ハ難被行候老成多疑因循猶豫天下之大機會を不失もの寡し隱居及村井半因循説之培養遂ニ米家小松應對之辭令を失し遂ニ重野贈詩之時ニ成行申候薩藩之論是亦慚愧ニ堪不申候

先便薩州事情巨細ニ相認上月半下京都便ニ相托内藤泰軍務官幸便より山田安場兩君へ至急ニ相達候様申遣置候其中古閑富次急ニ可被差立との儀承候間熊城近事荒々相認奉録呈候恐惶頓首再行

五月廿四日相認置

熊元社中

山田五次郎様

明治二年

安場 一平様

尙々將監殿依頼ニ付米家より大久保輩に之轉書持參之筈將監之同志正義ニ付虎之助一身同體と被思召御別視被下間敷様奉希候との儀ニ被相認候筈との事定而津田氏御兩君に之機變ニ應し必條御奮勵之持ニも成行可申敷ト奉在候間此段極密奉入貴聽置申候頓首再行

五月某日本藩選出議員鎌田平十郎十三藩議員と共に連署して重ねて外國交際之國是を確立すへき建議を提出す

〔尊攘錄諸家建白并御届書等〕

頃日微臣等一同外國御交際ノ儀ニ付狂愚ノ説ヲ奉建言候處吐哺握髮ノ御盛意ヲ以テ既ニ御胸算ノ御旨趣ヲ被 仰聞臣等ノ鄙見ト膾合シ誠ニ難有奉感佩候因テ考於 廟堂其筋御評定被爲在今般官員諸侯伯に 御下問之節ハ右外國御交際ノ儀モ御垂問可有之ト刮目奉企望候處此節迄右事件無之如何ノ御都合敷ト深ク焦念仕候實ニ千載一時ノ好機會ニテ今日ニ於テ御國是御國體相立不申テハ機會再ヒ不來仰願クハ諸侯伯 殿下ニ參集ノ間ニ右御交際事件モ被遊御評定候様仕度奉伏願候過日モ献言仕候通皇邦ハ皇邦ノ御政體ヲ御確立ニテ洋習ヲ被爲除邪説を被爲違其上ニテ外國應接其人ヲ被爲得是迄ノ條約行ル可キ條件ト行レサル條件を酌定シ彼ニ損ナク我ニ害ナキ約束ヲ立貿易通信永續スヘキ様談判ヲ遂ケラレ度奉存候尤今般 皇道御再興ノ 思召被爲在トノ過日御渡ノ御書附ハ微臣共モ謹テ奉拜觀雀躍仕候一統モ感泣欣舞罷在候模様ニテ於此人心ノ喜ニ向影響ノ如キ事ヲ感悟仕候加之猶復御交際上御國體御定立ノ 聖意を御明諭ニ相成候ハ、一統ノ悅服無此上儀ト奉恐考候維新ノ御盛業既ニ此際ニ至リ御交際ノ一事ニ至テ御手ヲ不被爲下テハ所謂功一善ニ缺候譯ニテ千古ノ遺憾ト奉存候併於 廟堂ハ疾ク御定算可被爲在事ヲ微臣共喋々贊言ニ不及儀トハ奉察候へ共何分憂國ノ至情難堪處ヨリ不顧忌憚再應奉煩 尊時候借越不敬ノ罪御海函奉仰候恐惶頓首

五月

五月廿六日舊幕閣老板倉勝靜東京に至り自首す尋て上野安中藩に保管せしめらる

〔近世史料編纂綱例〕

五月廿六日板倉勝靜東京ニ至リ歸順ス

〔探案書控〕

己六月 右從箱館脱走自訴候ニ付尾州に當分御預ケ同藩よりは是迄之次第篤と取糺差出候ニ付御一覽之上軍務官に差出候事(此既に登載し此に重出す)

感中同様自訴候ニ付板倉主計頭は御預相成居候事

但主計頭が伊賀儀伏見事件が經歷之次第取調書付取差出候様申達置候得共未差出不申候

明治 二年

八六九

- | | | | |
|---------|-----|---------|------|
| 鐵田橋津守議員 | 完次郎 | 京極下總守議員 | 直次 |
| 堀長門守同 | 經藏 | 米倉丹後守同 | 節之助 |
| 鐵田出雲守同 | 確 | 相良遠江守同 | 左太夫 |
| 松平圖書頭同 | 左衛門 | 相馬新宮守同 | 四郎大夫 |
| 青山七郎左衛門 | 小膳 | 松浦肥前守同 | 與右衛門 |
| 松平右近少監同 | 潜叟 | 佐竹中將同 | 敬次 |
| 中川修理大夫同 | 平十郎 | 德川三位中將同 | 武五郎 |
| 細川中將同 | | 大津 | |

松平越中

板倉伊賀

六月

五月廿七日舊會津藩に對し來月中旬を期して蝦夷地開拓の爲め出帆すへき旨を命せらる

〔明治元年正月より十二月迄〕
〔一〕新録 探索報告

一舊會津兼而蝦夷地開拓之儀ヲ被命有之候處彌六月中頃被地に出帆之心得ニ而罷在候様五月廿七日 御沙汰有之候
五月廿七日諸藩士を官員に登用の際は豫しめ其藩へ諮詢すへき旨を達せらる

〔復古帳〕

五月廿七日辨事御役所ヨリ御呼出官掌安藤權兵衛を以御渡相成候御書附諸家様へ御通達之寫

今後藩士被 召候節ハ何等之官員へ御登用可相成旨一應御尋之上被 仰付候間其段爲心得相達置候事
但是迄御尋無之御登用相成候分於其藩不都合之筋も有之候ハ、無遠慮可申出候事

行 政 官

五月 五月廿七日日本藩徴士民部官庶司知事澤村脩藏版籍返上、蝦夷開拓、及び理財要務に關する下問に奉答す

〔探案書控〕

今般 皇國之大基礎被爲建候付天下諸侯伯被召寄就而ハ 朝臣末々ノ微臣ニ至ル迄 御下問被爲在候御事實ニ贖世ノ御盛事且今度 御垂問ノ第一條誠以難有 御旨趣中世以降人心滄薄外教之ニ乘シ 皇道陵夷終ニ近時之甚ニ至ル今日維新之時ニ及び祭政一致 天祖以來固有之 皇道復興被爲在億兆之蒼生根本反始之義ヲ重し敢而外誘ニ懣惑セラレス方將一定候様被爲遊度思食トノ事如此御基礎御確定被爲在候而ハ實以無餘龜事ト奉存候伏惟中世以降外教治道ヲ害シ皇道陵夷スト雖近時外誘浸淫ノ深キニ如ス然ハ即今一二事ノ施設建策ストイヘモ浸淫ノ憂ハテカ之ヲ救コトヲ得ン之

ヲ救フノ道他ニ妙計奇策無之 朝廷上下官員實ニ外誘ニ染ラス 皇國固有ノ正義相守リ候者 御披據有之且西東兩京ニ大學校 御建立大ニ 皇學ヲ興シ且諸藩縣ヘモ傳布シ彼西洋學ノ如キハ之ヲ一ツノ技藝トシ步操航海器械治療等之類之ヲ講究セシメ敢テ政治ニ混セシメス功利ヲ卑シ農桑ヲ厚シ敢テ目前ノ利ヲ求メス市民ヲシテ恒産ニ就シメ富強ノ本ヲ立ツヘシ凡治ヲ求ル急ナレハ必躁妄ノ弊ヲ生ス躁妄ナレハ事々錯誤進一步ニシテ退事一步是即今警ムヘキノ弊害篤ト 御洞察被爲在度今度諸般ノ制度大體相立候上ハ容易ニ 御變革無之一弊生スレハ一弊ヲ去リ二害生スレハ二害ヲ去リ一途ノ運用有之候者ハ不期年諸般ノ規則相立富強之實効相顯レ可申功利ヲ卑シ誠信ヲ貴ヒ急功ヲ求メス鎮定ヲ要ス其施設ノ方ハ豫難言有其人而其事舉ル古今ノ通理篤ト 御微慮被爲在度奉千祈万願候

版籍返上ノ儀ニ付 御下問ノ趣謹對 王政維新ノ時ニ當リ侯伯ノ名義被廢知藩事ト被改候儀實ニ 王政ノ御體裁相立可申併維新初諸政未舉人心未安各藩政治各異ニ候處俄ニ一致ノ制ニ御變革有之候得ハ假令善政美事ニ而も多少ノ紛擾ヲ招キ却而御爲筋ニ相成間敷且各藩ニも從來領知ノ事ニ付其藩丈ハ研究致し候事ニ而俄ニ御變革有之而も必一得一失可有之因而侯伯ノ名義被改知藩事トシ其他大綱丈々條理相立候様被改内治鎖細ノ儀士異ナレハ人事自ラ異ナル事ニ付強而御改無之土地人民先以是迄通 御委任被 仰付置此後天下ノ形勢事情ニ依リ猶 御評議ノ筋も可有之乎抑封建郡縣ノ得失說者紛々未適從スル所ヲ知ラス臣ヲ以テ之ヲ見ルニ封建郡縣ノ果シテ得失アルニアラス唐土ヲ以テ之ヲ見ルニ其道ヲ得レハ殷周ノ封建モ數十世ヲ保チ其道ヲ失ヘハ秦ノ郡縣モ二世ニテ滅フ其以降一代ハ一代ノ制各異リ而天下ヲ保ツ長短汚隆アルハ郡縣封建ノ故ニ非ヌ而政道ノ善否如何ニアルノミ今 皇國ノ形勢ヲ察スルニ全ク郡縣ニ改革セハ必多少ノ弊害ヲ醸シ國用疲弊兵力も亦衰弱ナラン因テ大綱名義ヲ正シ郡縣封建偏廢スヘカラス然ル天下ノ政令一途ニ出サルヘカラス是以五畿七道中兩京ヲ除クノ外山川形勝ノ地ヲ擇ヒ都督府ヲ建置シ 朝廷ノ高官之ニ濫ミ其名ヲ都督使ト稱シ接近ノ藩縣之ニ屬シ官員二三名宛平素抵役勤番シ諸事高論公議シテ都督ノ旨ヲ取り藩縣ニ施行ス凡 朝廷ノ號令布告之ヲ諸道督府ニ下シ督府之ヲ管下ノ藩縣ニ傳布ス如此ハ本末順序其所ヲ得テ制令齊肅政權自然ト 朝廷ニ

統一可致且今般第一條 御下問ノ 御旨趣ヲ以勵精致シ候ハ不期年 御盛業相立可申奉存候
蝦夷地 御下問ノ趣謹對 今般箱館平定ニ及ヒ候上ハ開拓使速ニ 御下手可有之トノ事當地ハ 皇國ノ北門中外ノ境
域開拓忽ニス可ラサル儀御下問書中ノ通ニ候處維新以來兵馬倥傯事務紛擾內地人心未安東京府外盜賊橫行市民恒産ヲ
失ヒ殆生活ニモ迫リ候事ニ付熙治一層行届候上全カヲ以開墾有之度夫迄之處從來開拓被 仰付置候者有之由ニ付先以
其儘 御任セ被置境界ナト取調手順付置可然ト奉存候

五月

澤 村 脩 藏

理財ノ道ハ經國ノ要務ニシテ人心ノ離合風俗ノ厚薄ニ關係シ至重ノ事ニ付 御下問被爲在候間倉卒ノ取調疎漏ヲ不顧
謹テ左ニ申上候

陸羽七州ヲ除ノ外諸藩領知總高凡千五百七十五万石餘

此免五厘ニシテ現米凡七十八万七千石余

御料總高凡七百九十二万五千石余

此免五厘ニシテ現米凡三十九万六千石余

歲出現米凡三百二十四万石余

此米五厘ノ減少ニシテ十六万二千石余

三稜合百三十四万五千石余此分ニテ歲出百二十六万五千石ノ不足ヲ補ヒ餘米八万石

内外國債凡百五十万兩トシテ償方左之通

御料并諸藩領知高合テ二千三百六十七万五千石余

此米石八兩ニ直シテ四百七十三万二千兩余

殘テ四百七十六万八千兩此分諸稅并天下農商富有之者は獻金被仰付候賦又ハ金札御下渡引替被仰付候賦尤近年來天下

一般疲弊ヲ重候事ニ付二ヶ年ニ獻納被仰付可然乎右之通候得ハ天下一統水旱ノ患無之ハ秋稅ヲ待テ如何トカ米穀ハ獻
納出來可申候得トモ金銀ハトテモ獻納難出來依テ外國交易上被方ヨリ品物買入候コト一切嚴禁有之 御國內ノ產物諸
藩ハ勿論農商共私トシテ賣出シ候コト 御嚴禁有之諸藩へハ金札御下渡ニテ藩主コリ領内ノ產物買上ケ外國へ賣出代
銀上へ相納 御料ハ勿論農商ノ直賣 御禁制品物代ニテ 御價相濟其上新貨 御鑄造金札 御引替相濟候迄右ノ通外
國品物直買并直賣 御嚴禁有之且新規興利之儀官庫ヨリ 御出銀ノ筋ハ一切 御許無之尤願人請負之儀ハ其筋ニヨリ
御許容ニテモ弊害有之間敷一時妙計奇策ヲ用ヒ候得ハ必後害ヲ釀シ候間會計之儀ハトモ出入ヲ計較シ用度ヲ節シ農
商ヲ勵シ候外別ニ見込ノ次第無之此段謹テ奉對仕候頓首敬白

五月廿七日

澤 村 脩 藏

五月廿七日輔相三條實美在京都繕紳攘夷論者を鎮撫すべく其臣山岡某をして急遽上京せしむ

〔明治元年正月より十二月迄
新録探索報告〕

明治二年探

一三條輔相公之難掌山岡五位諱前ノ舊藩也五月廿六日夜公用ニ而吉原に出張候處夜中俄ニ使ヲ以召返サレ曉七時頃より發途上
京之由外々ニも同行有之由右者西京ニ於而正義黨攘夷論ヲ主張シ在京ノ繕紳家黨セシ趣ニ付爲鎮撫被遣候由
一説ニ西京ニ於而桂宮ヲ 新帝ヒ爲シ攘夷ノ成功爲ス可キ見込ノ由
一多田隊トカ云ヘル隊中五人程穢多ヲ語ラヒ攘夷ヲ張テ被召捕候風聞
一三田藩洋教ヲ信仰シ寺院ヲ廢シ洋教ニ一定セシ由正義徒同藩士ヲ斬奸セル有リ聞領内鎖國シテ他所ノ者一切不入トノ
由

西京ヨリ急報ノ趣

明治二年

一最早御承知も御座候半今日從京師早打到來候由ニ而只今同志之者より報知此頃於西京軍務官ニ罷在候輩押小路家ヲ惣督ニ致シ攘夷之兵緒ヲ引出候由事實不詳候得共追々當地ニ在留有志之情態大ニ變シ猶又越後ニ組立罷在候頭立シ輩追々西上之席同志之者に申聞候事件難心得儀茂有之候處今更符合仕候云々

五月廿七日

某

五月廿八日金札の發行を止め正貨と交換の期限を定めらる

〔復古帳〕

金札引替之道可被相定候ニ付相場被廢正金同様通用可致旨御布令相成候處今度天下之侯伯を被爲召會議之上全國之力ヲ合せ前途會計之基礎ヲ被定當冬ノ新貨幣鑄造來申年迄之間引替可被下候若右年限中引替相殘金札所持いし居候者之一ヶ月五朱之利足を以七月十二月兩度ニ割合御拂下被 仰付候間今後萬一御趣意心得違候者有之ニ於而之別紙控書之通 御所置被 仰付候間此旨相達候事

五月

行

政

官

據

一正金々札引換ニ打を取候者之其打金丈之割金を可爲差出事

但打を出し候者之其半高之割金を可爲差出事

一再度打を取候者ハ其打高を陪し割金を可爲差出事

但打を出し候者ハ其打高之割金を可爲差出事

右之通割金法被立置候ニ付而之金札を嫌ひ融通を妨候者之相當之割金を可爲差出素より役筋之者廣ク吟味探索等致候得共下方ニ於テも見聞いし候者之無用捨白封を以可訴出候然ル上之其割金高ノ八割を以訴人に御褒美可被下候事

五月

行

政

官

金札之儀ハ十三ヶ年限通用ヲ以テ御發弘相成候處今般御仕法被改別紙之通引替之道被相立候ニ付テハ第一御金繰ニ相關ニ付先般御布告相成候五千兩兩之製造増被差止候尤是迄御製造相成候惣高之内千三百萬兩余ハ府藩縣石高ニ應シ貸附千四百五十拾萬兩余ハ昨年以來之御入費拂出相成凡五百萬兩相殘り候得共右ハ當年貢稅相納り候迄之御入費ト被相定候外ニ府藩縣石高拜借相殘り候分有之候得共國力ニ不應御振出相成候テハ彌引替之通難被相立候ニ付前件自數三千貳百五十拾萬兩之外御振出斷然被差止製造機械燒棄被 仰付候間此旨相達候事

五月

行

政

官

〔近世史料編纂綱例〕

廿八日(五)紙幣ノ發行ヲ止メ其交換ノ期限ヲ定ム

五月廿八日賈金使用の件につき嚴達せらる

〔復古帳〕

五月廿八日辨事御役所方御呼出ニ而官掌井上勝彌ヲ以御書付御渡相成諸家様に及通達候寫
金銀貨幣之國之重寶四民頼テ生活スル所ニ候處近來私ニ賈金ヲ鑄造シ内外ニ流通シ甚キニ至而之兩替屋私ニ相場相立賣買致し候者も有之趣相聞に以之外之事ニ候自今以後兩替屋ハ勿論諸商人ニ至ル迄賈金取扱候者有之ニおゐてハ嚴科ニ被處候間右様所業之者見當り次第無用捨取押へ其筋へ可訴出旨被 御沙汰候事

五月

行

政

官

五月廿八日日本藩東太郎平雇を免せらる

〔明治二年王政日新錄〕(熊本縣)

明治二年

八七五

(五月廿八日行政官達)

細川中將

其方家來東太郎平儀今度官員御減省ニ付御雇被免候間此旨相達候事

五月

行政官

五月廿八日日本藩主詔邦去る廿五日に諮詢あらせられたる内治外交並に理財の件に對し奉答書を上る

〔由明治二年至三年
新録自筆狀〕

(六月十日長岡藩刀藏圖書より執政等への來狀一節)

明治二年六月十日東京發自筆狀

明十一日御用有之福岡小文吾安藤源之助武藤猪之助安許被差立候付申達候先便御意置申候先月廿五日御下問之御答書同廿八日御差出ニ相成候寫並金札御引換一件之御達書寫共二綴別紙差進申候右ニ付段々之譯合等既ニ明後十二日帶刀出立一辨之事件等惣括委細相心得御面話之答候條先右寫を差遣置候間左様御承知被置候様存候(以下)

〔復古帳〕

勅答御書付

外國御交際ノ儀ニ付 御下問謹テ奉答仕候臣伏惟近年說者輒モスレハ唱フ開化文明又謂フ四海兄弟一視同仁ト果シテ此言ノ如キトキハ汎濫漫漶ニシテ差等分限ノ正ス可キヲ知ラス豈ニ外誘ニ惑フノ說ニ非スヤ然ルニ今 聖間内外親疎ノ別アルヲ揭明シ玉ヒ自主獨立ノ國體ヲ立ントスルニ及フ誠ニ天下蒼生ノ幸福神州ノ元氣未タ地ニ墜チス類日ヲ桑榆ニ回ス良機會ト抔喜雀躍ノ至奉存候先般來屢々愚衷ヲ獻セシ如ク永ク獨立國ノ體裁ヲ保ント欲セハ大本ヲ固クシ大志

ヲ立ルニ有之本立チ志定テ後始テ獨立國ノ名ヲ全フシ内外主客ノ分モ正ル可ク盟約ノ信義モ固ル可クト奉存候此志氣廟堂御確定ノ後群臣諸侯ヲ集メテ誓言シテ謂ン國家ノ準的既ニ定ル各方嚮ヲ愛ニ定メ上下同體國一致シテ盡瘁鞠躬始終國家ニ殉スル志ヲ執テ以テ務トシテ各此盟誓ヲ永ク服膺セヨト此ニ於テ感泣奉命セサル者トテハ無之候此事終テ後廣ク天下ニ令シ公選ヲ以テ忠信智勇粗備リ國命ヲ辱メサル程ノ人物御擧用アツテ外國人ニ應接セシム昔シ富弼契丹ニ使シ獻納ノ字ヲ爭テ頗ル國體ヲ存ス其後李悅金軍ニ使シテ大ニ命ヲ辱シム是應接其人ヲ擇ハサル可ラサル一證ニ御座候其應接ノ次第ハ是迄ノ條約行ル可キ條件ト行レサル條件トヲ配量シ彼ニ大損ナク我ニ大害ナキ條約ヲ新定シ貿易通信長久ヲ保シ事ヲ談判ス然ト雖モ我ニ逋負等ノ曲事アツテ意ニ慊ラサレハ彼ニ信義條理徹底セス談判遂ケ難カラシ因テ積年逋債今般一切償返スルニ如カス其金銀ハ皇國國邦中匹夫農工商ニ至迄躰ニ應シテ貢獻セシム可シ朝廷御確立ノ御旨趣ニ感シ且ツ皇國浮沈ノ所係ナレハ誰カ異辭アラン臣カ領知ノ如キ版籍返上仕置候ニ付私ニ慮置難仕候ト雖モ若令アラハ一藩ノ分ヲ盡シテ貢獻可仕候條約面ノ因革ス可キ瑣屑ノ事件ニ至テ臣未タ其詳ヲ得ス但要領ヲ概論シテ明詔ノ 御趣意ニ奉酬候誠惶敬白

版籍返上ノ儀政令一途ニ出ルノ外無之依テ府藩縣三治ノ制ヲ以テ知藩事ニ被任候トノ 御垂問恭ク惟ルニ臣版籍返上仕候上ハ予奪授受只 朝命ヲ仰ク外無之右事件ニ就テ兎角難申上奉存候然トモ是又皇邦隆替ノ關スル所徒ニ憚ヲ顧テ誠懇スル今般虛懷開襟ノ御趣意ニ戻リ候間謹テ狂瞽ヲ陳呈ス方今政令一ニ歸シ候上ハ制度名分ヲ正フシ藩主ノ名ヲ廢セラレ知藩事ニ被任候儀奉承候若夫封建郡縣ノ得失ヲ論セハ古今說者紛紜未タ適當スル所ヲ知ラス臣愚ヲ以テ考ルニ封建郡縣ノ果シテ得失アルニ非ス之ヲ措スル人如何ニ在ル耳其道ヲ得レハ殷周ノ天下モ數十世ヲ保チ一タヒ人心ヲ失ヘハ秦ノ郡縣モ二世ニシテ滅フ其後ハ全ク郡縣ヲ用ユルモノアリ郡縣中ニ封建ノ意ヲ寓スルモ有り而シテ天下ヲ保ツ長短汚隆アルモノハ郡封ノ故ニ非ス政治ノ理不理ニアリ尙ニ思フ三百年來君臣上下ノ分定リテ諸侯ハ永ク王臣ノ義ヲ存シ藩士ハ常々陪隸ノ名ヲ甘シ藩主ハ主命ニ奔走シ藩主ハ 朝命ヲ奉戴シ一日賦役征伐ノ事興ル上下敢テ違命ナ

明治二年

キ所也ナリ 朝廷ヨリ直チニ命ヲ下スヨリ藩主ノ手ヲ經テ令スレハ官府ノ勞ヲ省キ事ヲ簡ニスル捷徑ニテ尊ハ益尊ク卑ハ益卑ク上下秩然始テ稷々ノ御威光モ相立候然ラハ則假令知藩事ノ名稱ヲ下シ賜ルモ舊來君臣ノ名義ヲ廢セス藩主陪臣ノ實ハ存シ置レ候方良策至計ト奉存候伏シテ望ラクハ府藩縣一體ノ政令大綱ヲ立玉ヒ封建郡縣參錯シ互ニ相維持スルノ兩利ヲ收メ諸道ニ於テ都督府ヲ建置シ在 廷ノ大官ニ命シテ都督使トシ接近ノ一道之ヲ管轄シ 朝令ヲ傳布シ下情ヲ通達ス如此則本末輕重偏倚ナクシテ制令齊整シテ政權咸ク 朝廷に御統一可相成候且又既ニ圖籍返上スル藩々ニ至テハ政事ノ治否用才ノ得失ヲ查檢シ玉ヒ相當ノ御處分被爲在度奉存候右臣嫌疑ノ恐レヲ避ス斧鉞ノ誅ヲ顧ミス肝贈ヲ吐露シ敢テ私念ナキヲ亮鑒シ給ハン事ヲ奉希候誠恐頓首

臣邦昭頓首再拜理財金幣等ノ儀ニ付 御下問謹テ議ス臣固ヨリ理財經濟之道ニ只二三ノ肯綮ト奉存候事ヲ概舉シテ御取捨ノ一端ニ供ヘ申候夫レ用度豊阜ノ本ハ節儉實素ニ基クハ臣カ贅陳ヲ待タサレトモ季世薄俗ノ弊上下華靡奢侈ニ流ル今維新ノ初宜シク痛ク嚴禁シ往古淳朴ノ風ニ回ス可萬一諸官諸侯華奢ノ行アルトキハ譴責アル可シ若シ彈正臺御取建被爲在候ハ、右臺官ヨリ諸官ヲ監視シテ奢靡勿ラシメ又巡察使ヲ諸國エ差遣シテ藩主縣令ヲシテ奢靡ナカラシム如此シテ上下勤儉ノ後財用餘裕アツテ官一旦緩急ノ用ニ供ルニ至ラン第一條惡金銀私鑄ヲ禁シ贋金ヲ停止スルノ件謹考連ニ嚴令ヲ下シ之ヲ犯ス者は罰典ニ處ス可シ而シテ不知不識人ノ欺罔ヲ受テ惡金贋金ヲ所持スル者官之ヲ奪テ當然ナレ共連ニ之ヲ奪フトキハ下民困苦セン楮幣ヲ以テ替ヘ與テ可ナラン第二條内外國債ノ事謹考外國ノ通債ハ天下ニ募リ一切返済ス可シ内國ノ債ハ殖財ノ功相立マテハ三五年ノ間利息マテモ止ラレテ可ナラン皇國ハ萬國ニ比スレハ封域狹小ニシテ財力モ亦不敵外國ト共ニ借貸贏餘ノ利ヲ爭フ共永ク接續シ難シ只物品ノ有無ヲ貿易スルノ便計ニ如カス第三條歲入歳出事謹テ別紙出入ノ數額ヲ閱スルニ五官ノ入費及ヒ營繕旅用等ノ經費萬一過當無實ノ冗費モ測リ難シ宜ク彈正臺官ニ命セラレ查檢監察セシメ彈料規正シテ盡ク實ニ適ス可シ將々正稅外餘産ヲ興起シ諸費用ニ充テ猶國用不足アルトキハ不得已諸國ヨリ貢賦ヲ命スル外他策ナカラシ不宣

附言

風俗ヲ規正シ節儉ヲ誘導ス彈正官ノ任ナリ最モ任用其人ヲ慎マサル可ラス漢土ニテモ天子ノ意ニ出スシテ宰相等ノ私選ヲ以テ臺諫監官ヲ舉ルトキハ却テ宰臣ノ意ニ阿リ弊事アツテモ坐視シテ敢テ論セス此時朝綱忽チ紊れ亂亡ニ赴ク今宜ク此弊ヲ殷鑒トシテ彈正一部ノ官員ヲ命スル 天意ト公選ノ二ツニ出テ議參タリトモ與リ知ラサラシム然ルトキハ直臣拂士輩出シテ百弊ヲ矯メ節儉ヲ勵ス不日成功ヲ奏スルニ至ン歟ト奉存候分獻言伏乞裁赦

五月廿九日長岡護美は上京後公務に服すへきものなきを以て暫く下坂して命を待たむと欲する旨京申す

〔一〕新録自筆狀、御在京御在府御在國共御記錄〕

私儀細川侍從より申上置候趣御座候間同人歸國後不取敢出京仕候處於當地者御用之筋度不爲在候ニ付不日ニ下坂いたし此上進退之儀ハ東京ニ而越中守より奉伺御差圖之趣於大坂奉待度奉存候此段奉伺候以上

五月廿五日

御事 中

長岡 左京 亮

〔御在京御在府御在國共御記錄〕

六月三日非藏人口に御呼出御付札を以醒醐少將殿より御渡伺之趣ハ即今聞届ニ難相成候事

六月朔日本藩世子護久は長岡護美に答書して其着京を賀し次で藩主詔邦歸藩して改革を完成せむことを希ふ意を述へ且つ執政有吉將監に旨を傳へて上京せしむることを報す

明治 二年

〔神庫文書十五番辰印二十七番〕

(紙包) 左 京 亮 様

右 京 太 夫

拜呈仕候向暑之節愈御平安被成御渡海先月十二日御着坂同十四日御京着之段奉恐。候此度之典儀着ニ付御書も被下忝奉存候同人よりも委細御許之儀も承知仕候今般之御人減ニ相成り候ゆへ御役も御免之由承知仕都合如何と懸念仕候へ共典儀より承先安心仕候右ニ付而之御下國之儀も岩下とも御相談とふか御都合能參候様何卒右之御歸國を祈申候此度ハ浮浪も段々御處置付福田秀一も被召捕候由西京も右之都合ニ付東京之儀懸念仕候事ニ御座候大基礎御決定ニ付而者御下問之筋も段々有之御國より之御献言も小生も奉伺先安心仕候併照幡列も段々居中候間此度之御採用も有之候へ共如何かと小生之懸念仕事ニ御座候何様とも東京之儀ハ只々懸念至極ニ奉存候箱館ハ官軍勝利恐悅之事ニ御座候處又々賊軍更張青森迄官軍收北之由併此後も格別之儀ハ無之かと存申候事ニ御座候何卒此上之迎も雲上御着無之而之御國も御變革出来不申併只今之通ニ候へ之何分御下國之儀も如何かと奉存候事ニ御座候將監此度差立申候間同人も奮發篤斗吞込居申候間同人より御聞可被下候先之御見舞貴答荒々如此御座候亂筆御免可被下候右迄草々頓首

六月朔日

尙々時下御自愛奉祈候顯光院様御初も御機嫌被爲入候間御同然ニ雖有奉存候御短書之趣之早速可奉申上候御序之折から應司様御初へも宜敷奉願候岩下へも宜敷奉願候美濃之山其外へも宜敷願申候御下國之御待申上候早々已上

六月二日昨年春以來各方面の征戰に従事せる總督參謀軍曹等及び各地に出兵して功績を奏したる諸侯伯を賞せらる

〔防長回天史第六編下〕

(明治二年夏期ノ大勢抄略)

六月二日大ニ去年春初以來鳥羽伏見ノ役ヲ始メトシ諸道ノ征戰ニ從事シタル親王公卿總督參謀軍曹等及ビ各地ニ出兵シテ功績ヲ奏シタル諸藩主ヲ賞ス當日諸員ヲ大廣間ニ召シ 天皇出御議定參與辨事等列座シ三條輔相 詔書ヲ捧讀ス 其文ニ曰ク

朕惟復 皇道之衰濟天下之瀕、一資汝衆之力、而其建節展旗、宣威遠方、艱苦盡瘁、無所不至、朕切嘉獎之、乃頒賜以酬有功、願前途甚遠矣、厥克翼贊大成、朕益有望汝有衆、汝有衆其懋哉

明治二年己巳六月二日

乃チ嘉彰親王ニ永世千五百石熾仁親王ニ永世千二百石九條道孝澤爲量ニ各永世八百石ヲ賜ヒ而シテ薩長ニ藩ニ在リテハ毛利敬親權大納言ニ任ジ從二位ニ叙シ毛利廣封島津忠義ヲ參議從三位ニ任叙シ且ツ毛利島津兩家ニ各永世十萬石ヲ賜フ其他公卿諸公以下或ハ官ヲ進メ或ハ金祿ヲ賜ハルモノ總テ四百餘人祿七十四萬六千餘石金二十萬三千四百餘兩ナリト云フ

〔東京より之御用狀扣、江戸京都來狀扣、時勢雜錄〕

六月十四日東京參政中々七月二日着

以別紙申達候 太守様去ル二日依召御參 朝被遊候處去春東方御出兵ニ付而別紙之通被爲蒙 仰御拜領金被爲在奉恐悅候右御書付寫一通差上申候以上

戊辰之春兵ヲ東方ニ出シ各處戰爭ヲ遂候段神妙被 思食仍爲其慰勞目錄之通下賜候事

細 川 中 將
行 政 官

己巳六月

金子貳千兩

〔探索書扣〕

明治二年

六月二日諸侯方被爲 召奥羽戰爭出兵之儀ニ付御拜
領左之通

拾万石宛	島津少將
四万石	毛利宰相中將
三万石宛	山内少將
	池田中納言
	戸田采女正
	大村丹後守
	島津淡路守
	眞田信濃守
貳万石宛	佐竹中將
	藤堂中將
	井伊中將
	池田少將
	鍋島少將
	毛利左京亮
壹万五千石宛	前田宰相中將
	戸澤中務大輔
	徳川大納言

壹万石宛	同 三位中將
	淺野中納言
	大岡美濃守
	松平中納言
	松平少將
	六郷兵庫頭
	榑原式部大輔
	秋元但馬守
	秋月長門守
	戸田土佐守
	黒田少將
	有馬中將
	津輕越中守
	堀長門守
	吉川駿河守
	小笠原豊千代丸
五千石宛	立花少將
	前田稠松
三千石宛	戸田丹波守

〔全書〕

公議所ニ而聞取書三通(外二通なし)

千石宛	松平伊賀守
	松浦肥前守
	生駒讃岐守
	同 旬之助
五百石宛	仁賀保謙太郎
	同 兵庫
金子壹万兩	松平下總守
同五千兩ツ、	松平主殿頭

同二千兩ツ、

池田相模守
市橋下總守
鍋島紀伊守
戸田淡路守
加藤遠江守
佐竹常丸
本堂式部少輔
蜂須賀中納言

兵部卿	
有栖川宮	
千二百石有	九條左大臣
八百石	同 三位
六百石	醍醐少將
三百石	柳原少將
同	岩倉侍從
同	四條少將

同 同

西園寺中納言
正親町中將
久我大納言
橋本中將
西四辻大夫
壬生左衛門權介
岩倉勘解由長官
高倉三位
四條勘解由

右二百石宛

鷺尾侍從

右百石宛

澤主水正

萬里小路右少辨
河 鱧 大 夫

鳥丸侍從
東久世中將

右二百石宛數百石宛數不相分

穗波三位
大原少將

右五十石宛

五條少納言
平松甲斐權介

〔從慶應二丙寅年正月至明治三年
江戸 京都 來狀 扣〕

戊辰正月參謀之命ヲ奉シ北陸道ヲ下リ軍事精勤之段神妙ニ被 思食仍目錄之通下賜候事

津 田 山 三 郎

己 巳 六月

行 政 官

金五百兩

安 場 一 平

戊辰之春督府に出仕軍事精勤之段神妙ニ被 思食仍目錄之通下賜候事
己 巳 六月

行 政 官

金三百兩

〔六月十一日長岡帶刀藏圖書より執政等宛連帳に兩人御賞美別紙寫之通從行政官御達有之候間去ル三日及其連申候云々とあり〕
六月二日在熊實學派同志書を在東京安場一平和山田五次郎等に與へ我藩政府を改革せむと企

圖するところ及び藩情等を通報す

〔男爵安場家文書〕

今晚東京より之早打着様子相分不申候

敬録呈仕候各位愈御壯榮可被成御起居奉欣賀候其御地邸内之景況此許ニても初發より洞察此節之往年伏水隅州之故轍を被爲踏斷然之御國是普く天下ニ被表ニはらされハ難叶との定論徹頭徹尾今日迄毫も相替儀無之彼是盡力罷在申候處安場君より過日御仔細之御紙表且世子俄之御下國ニて内外之事情兼而考察之趣ニ符合いたし將又虎殿(米田虎)南行薩藩有志之論體竹崎馳下り申立之趣亦一體ニ出彌以評議一決度々十二分ニ持出見候へ共新堀(下津)之論體老練ニ過虎殿南薩ニて之響キも少し鈍く終ニ第一等之策不能出甚歎息を極申候然し鞍懸坂(有吉)奮發第二等之處を以是非々々君上丈クハ速ニ按取率り異議ニ及ハハ屹ト覺悟之筋有之と申迄ニハ漕付ケ明三日兩京事情探索之銘義ニて此元出發ニ相決眞奥之儀之ニ丸(米田虎)並郡(郡夷)執政兩人迄ニて其他席中ニも一切謀り合無之此一端ニて從來之打立とハ相異り候譯も御推考可被下候ニ盡力無之ハ遺憾限りなし(御國東京往來狀扣に有吉將監は六)
一先月十八日田中執政京師出立昨朝日着差添御物書安田助一密話之次第左之通
一左京亮様御京着兩三日前軍務之御職掌被免段東京府より壬生邸へ申參居筑米候も同様之由大分之御氣障ニて既ニ御下國ニも可相成哉之御内存之處道家參政邊より御引留メ被申居候由當表御出發之砌とハ少し御氣分も被爲狂たる哉ニ伺取候との事
一道家參政より書狀之内存之外安心之體ニ申參候由此一句初而社中平素之建議と致齟齬候處門地高祿之業に之神速ニ徹底いたし又々一層之歎息を極メ申候助一出立之比迄ハ小笠執政道參政兩人共東下之模様等ハ聊相分居不申候との事
一尾州脫藩之浮浪福田清一(秀一)上の堅五手寄を以内分刑法官より安田出立被召捕巷説ニハ五百計之浮浪伏水へ潛伏一皇胤を奉し事を揚之陰謀露顯清一ハ張本と相聞候との事

一大政官之居り確乎たる證佐枚舉ニ迫あらず乍恐公子之御退職福田之擲レ杯姑息を離レたる事件ニて可トと云々東京へ英國より申立之一條ニ付 大宮御所より下命ニて薩長土肥より西京警備之兵隊一人も不殘操出し何方も公用人一人宛居殘候由其實之強チ外夷ニあらず豫メ内訌ニ備ならんとの事

薩ハ 朝命を不待悉皆操出し下命之節ハ邸中空虛不擊ニ先ツ響ク神速之習氣可羨

一佐藤原安田へ之托書ニ曰御國之形勢安危之場合道家方も胸算盡果敢息を極との一句あり昨日之走信此一句を以精神敷ト見定メ申候

右之外彼暫ク下火ニ相成攘夷論を止メたるとの新聞あり彼レ年來種々之艱難ヲ經今日ハ深く練磨之事ニ付恐クハ陰症之策ニ出んと追々噂ニ及居候處果而然リ是無他庸醫をして治療を施ニ術なからしめんとの計略也諸君子願クハ鞍懸坂之大醫を輔て病症を不被誤非常之的藥を被用他日ヒを抛之巨害無之様御盡力萬祈仕候右之趣ハ今一應鞍執政へ含メニ相成候様虎殿へ申入之旨ニて今夕牛島(五一)罷越若面會差支候節ハ神足今夜罷越方ニ手筈いたし置申候諸君子外ハ皇國之御爲内ハ社稷之爲彌以御自玉專一ニ懇祈仕候不盡

六月二日深夜走毫

熊 城 御 社 中

安 場 賢 兄

安場様へ申上候京師へ體なる便宜御座候ハ、此書狀去年ノ小楨ながら御差廻

山 田 賢 兄

可被下候政府之大森善之助殿坂塚へ已來共御狀ハ御頼可被下候

岩 男 賢 兄

矢 島 賢 兄

尙々竹崎之先月七日其門を過候共不入南關より直ニ迎町米屋へ下着于今滯留徳富ハ虎殿隨從南行歸着之上同郷より急速出立之用意迄相整兩三日跡米屋へ出府其他社中日々往來充分之講習盡力涯分を盡候へ共存意を遂不申次第ハ汗面仕候徳富ハ此儘不日ニ東上之覺悟なり

六月三日議定岩倉具視本藩照幡列之助に對し國費多端歲計急を訴ふるにつき五百萬兩の紙幣を發行すへしとの意を内示す

〔探索書扣〕

五月廿九日岩倉卿に照幡列之助參殿奉覽候處猶又六月三日參殿最前之御沙汰此通ニ無相違御座候哉之段相伺候處無相違旨被仰聞此通之書付御取置ニ相成候事 五百萬兩

右之外國ニ對し債金致し且昨年來御物入多端ニ而會計筋必多度差迫御國體立兼候ニ付今度商法被引改遂ニ交際之儀も屹度規律被爲立 皇國體を不汚様被遊度候ニ付紙幣通用無異儀被行候様有之度諸侯之面々同心一體今日之御急迫即我事ニ致し前條五百萬兩壹万石ニ貳千五百兩之積を以紙幣兩替ニ御渡ニ相成來候間正金と引替兩度ニ可差出左候得之 皇國一同紙幣通用と相成候へハ會計相立候間 皇國之大基礎を定祭政一致獨立自主之御進歩可被遊との事

六月三日在東京本藩執政長岡帶刀書を在京都重臣及び藩政府に贈り林藤次を上京せしむへしとの旨を照會す

〔一新録自筆狀、自筆牒控〕

由明治二年至三年 慶應三年 以手紙申達候上野野五青木彦兵衛儀御國許に御用有之今日爰許差立候次第者先般 御勅答之末先月廿二日猶又 勅問ニ今度祭政一致 天祖以來固有之 皇道復興被爲在億兆之蒼生報本反始之義を重シ云々之 叡慮ニ付而者既同二十五日ニ 御勅答之通ニ御座候就而は倭國之古事記ニ委敷人物無之而難相成雲上御差入被仰立候末往古ニ基キ調等いたし候者無御座候而ハ御實意茂難相立御面目ニ茂係り候事ニ付老體大儀之筋ニ者 思召候得共林藤次を被召寄度思食候朝堂列藩ニ茂藤次程之人物者相聞不申同人見込ニ而一兩人看護旁羽翼ニ附添東行被仰付候様老人遠路旅行誠ニ難儀之筋

ニ者可有之候得共皇國大基固有之興復被遊候折柄ニ付積年之勤學を顯し候ハ、御國家之御面目ニ付勞を不厭罷越候様被及御達度存候尤雲上思食之次第者不日帶刀被遊御差立候付御意を御含メ被遊候との御事ニ御座候依之前文兩人者藤次門下ニ而此元即今之形勢茂然知罷在候儀ニ而態と差立候條巨細は兩人より御聞取候様存候將々若殿様左京亮様に右之趣委細被仰上可然御取計候様存候右之段爲可申達如是御座候不盡

六月三日

長 藪 岡 帶 刀

(家記)

小笠原美濃殿

田中典儀殿

執政衆中

副執政衆中

上ニ付紙

本文堅五彦兵衛今十二日京着直ニ罷通候付書面一ト通致披見其儘差廻申候兩人より得斗御聞取可然様御取計候様存候以上

六月十二日

小 笠 原 美 濃

六月三日日本藩太田黑權作に軍艦御用懸專務を命し野間武彦に萬里丸支配頭心得を命す

〔御國東京往來狀扣〕

(六月十六日發執政關執政より在兩京執政等へ通報文書抄略)

太 田 黑 權 作

右者御軍艦御用懸引除まらへ被仰付候間牛島五一郎申談候様

但萬里丸之儀野間武彦は一切自勵引受被仰付候間同人に引渡候様尤同船乗組之内別紙名附之而々丈被殘置其餘ハ近々御軍艦廻着次第右御用々々召仕候間左様相心得夫々致通達受取渡之儀之見込を付相達候様

野 間 武 彦

右者神風丸支配頭之場相動候様被仰付置候處被遊御免萬里丸支配頭之場相動候様被仰付以來右御船一切自勵引受被仰付旨

右之通同三日及達候

六月四日我藩津輕應援の爲め派遣したる兵隊の行動人員等を軍務官へ申告す

〔東京より之御用狀扣、時勢雜錄〕

一四月廿七日猶弘前表應援として左之通御當地差立申候

蝦夷地騷擾ニ付弊藩兵隊左之通津輕弘前表應援として

隊長上官 八人

二月廿八日御當地差立四月二日弘前着陣同十七日青森

銃手 百拾貳人

に轉陣仕候處先月十三日箱館應援之儀惣督府より御沙

俗役 三人

汰有之同十五日渡海翌十六日津輕舊陣屋進擊ニ付先鋒

夫卒並小者 百拾九人

被仰付戰爭仕候尤死傷等無御座候

總計貳百四十貳人

隊長上官 四人

右之通御届申上候以上

銃手 五拾貳人

細川中將内

俗役 九人

六月四日 井上治部丞

夫卒並小者 八拾九人

總計百五拾四人

八八九

明治二年

六月六日日本藩御留守警衛兵隊長司令士の氏名を更に申告す

〔御在京御在府御在國共御記録〕

軍務官

御役所に

御留守中御警衛として弊藩より差出置候兵隊長等之内追々差繰等有之候付此節更ニ御届申上候

隊長

都	甲	源	藏
山	移	三	次
仁	田	市	之
大	塚	貞	之
上	野	多	源
山	田	三	郎
横	田	太	十
半	隊	長	
安	藤	健	太
道	家	榮	太
立	石	熊	彦
片	野	友	雄

分隊司令士

宮	永	匠	作
清	原	安	次
永	山	熊	雄
福	田	次	郎
梶	原	丈	之
小	崎	彌	兵
山	形	半	助
内	藤	信	之
鯛	瀬	素	雄
村	山	仁	九
筑	紫	龜	之
八	木	田	新
平	山	彦	三
伴	末	熊	
小	野	儀	三
小	山	岩	熊

小野延之内

以上

一三百七拾貳人兵隊總導神官

隊長以下兵員

合四百人

細川中將公用人

六月六日

成田清右衛門

六月六日鍋島閑叟蝦夷地開拓御用を命せらる

〔明治元辰年正月ヨリ十二月迄〕

〔一新録探案報告〕

横濱新聞極秘(抄出)

一同(六)六日鍋島閑叟蝦夷地開拓御用被仰付候

(備考)近世史料編纂綱例に「六月四日鍋島直正蝦夷地開拓ノ事ヲ任セラレシコトヲ請フ」とあり

六月七日物價調節の爲め府藩縣の石高に應し紙幣を下附して正貨を換納せしめらる

〔復古帳〕

御一新之際莫太之軍費ハ勿論上下疲弊ヲ極メ生産富殖之道ニ差障候ヨリ格別御仁恤之御主意ヲ以テ上下融通之爲金札御布行相成府藩縣共石高ニ應シ貨渡被仰付偏ニ生産富殖之道ヲ開キ候様トノ御趣旨ニ被爲在候處拜借金札ヲ三都府ニ於テ正金ト引換候而己ナラス甚ニ至而者厚キ御趣意ニ戻リ金札通用ヲ拒候處ヨリ其通用スル處僅ニ三都府ニ不過又諸國ヨリ都府に物産ヲ輸入スト雖モ其國許ニ於テ通用差障候故金札ヲ嫌ヒ正金ト引換持去自ラ三都府ノ正金四方ニ散シ金札而已ト相成逐日物價沸騰ニ及ヒ都府之人民困窮今日ノ甚ニ至候右ハ兼而御嚴令モ有之候處地方官之諭令不行届ヨリシテ右様ノ次第ニ立至候ニ付而者急ニ是ヲ救之道一時都會ニ集ル處之金札ヲ府藩縣石高ニ配當シ正金ニ換ヘ是ヲ以テ都會ノ人民ニ引替渡候外無之然ル時ハ金札普ク海内ニ被行物價平均正金金札同様流通可致様可相成依之別紙之通被

仰出候間府藩縣共厚ク御趣意ヲ奉戴シ御布令ニ基キ國民ヲ説諭シ期限通り無遅延差出可申事

但御主意柄篤ト了解シ難キモノハ東京會計官に可伺出事

六月

行 政 官

今般別紙之通被仰出候ニ付而ハ府藩縣トモ高壹萬石ニ付金札貳千五百兩ツ、石高ニ應シ割渡相成候間右員數正金三都會計官出納司へ御布令當日ヨリ左之期限通可相納事

三十里以内ハ 三十日 五十里以内ハ 三十八日 七十五里以内ハ 四十六日

百五十里以内ハ 五十四日 百五十里以内ハ 六十二日 百五十里以内ハ 七十日

百七十五里以内ハ 七十八日 二百里以内ハ 八十六日 二百里以外ハ 九十四日

六月 行 政 官

正金上納ニ付金札渡方左之通

東京會計官納之向ハ金札六月十五日迄ニ半高残り半高七月五日限り被相渡候事

京都大阪兩所會計官納之向ハ金札六月廿日迄ニ半高残り半高七月十日限被相渡候事

六月 行 政 官

〔長谷川家文書〕

〔六月十日秋吉又助より由良洞水宛書一節〕

去ル七日ニ之太守榎重臣差添被爲召候處此度御調達被爲蒙仰付十貳万五千兩正金ニ而相納可申との趣ニ御座候尤其替リニ金札ハ御下渡ニ相成候様子ニ御座候此方様計リニハ無御座候一般之由ニ御座候(中略)とふ歟昨日當リ之紀州侯發リニ而公議人集會も御座候哉ニ承り追々議論沸騰仕可申々奉存候右様御調達金杯申議ハ相崩し候方上策歟と奉存候

六月八日本藩元田八右衛門水保字書を在東京安場一平和に贈りて我藩の情況を通報す

〔男爵安場家文書〕

(前文略)

一世子君御下國一條より中山(源次右衛門)早川(助)登京左公子御發途等之事情之津田(山三)東下ニ而御承知被成下候と奉存候此許美濃(小笠)殿道家(山)一致ニ而御三殿(藩主留邦、世子)御一座御國本ニ而御大變革之御趣向茂段々時弊異却致し候而ハ都合を得不申其御許より御賢慮被成候而ハ世子君左公子御一同御登京御三殿東京ニ而御一致御一新之御見込實ニ第一等之御良策と感服仕候此許ニ而茂其邊之講習も段々仕候得共右様初發より之御運ヒ懸ケ漸美濃殿道家左公子御供丈之御都合ニ相成居候而第一等之御慮置何茂事後レニ相成不得止今日之御運ニ止マリ居申候事ニ御座候尤暴論増長津田東下之間ヘ有之候而ハ君上御諫止正氣御扶助之御内慮ニ而將監(有)殿當月三日より被差登同人も此節ハ十分之誠意憤發感心仕候此一條ニ付而之虎殿より津田迄書狀遣しニ相成賢兄ニも御交り被成下度段津田へ傳言ニも相成居候間其御含ニ而御都合被下候様奉存候然處案外暴論も屏息御建白之御趣意茂 朝議御異却茂無之就而ハ藪作(藪作右衛門)小熊(小八之)中山(源次右)等罷下り申候様相成候而ハ又々時弊も相變り當座御國難者不被爲在其段之實ニ恐悅至極奉存候得共根元之處甚以憂念仕候尤大基礎御決定ニ相成候處ニ而ハ各藩之君主之御暇を賜り藩治相立候様との御下命ニ可相成候得之來月中ニ者君上ニ茂御下國之御運ニ可相成左公子ニ茂御下國之儀東京に御伺ニ相成居候御模様ニ御座候へハ八月ニ者御三殿御國本へ御揃被遊是非御一新之御運ヒニ御運ヒ付可被成と拙考仕候今度太政官ニも議院相立三等官已上御廢止入札を以賢才御登庸被遊候事ニ御座候得之右御尊奉ニ而御國ニおひても斷然私を被捨入札之御選舉重々可然奉祈候何様太政官之御基本御大丈夫ニさへ被爲在候得之 皇國一州終ニ一新不仕候事ハ決而無之我仰ク處之君上我居る所之國ニ候得之憂念も不得止次第ニ候得共決而急迫ニ相成候而ハ却而道を失し可申々反省仕候事ニ御座候御根柢之地も

御懸念も有之子莫が中ニ似候様之御書中ニ而重々懸念仕候處御追啓二十三日之御變革被仰下且廟堂ニ参り居候書付勅詔を初入札之御人名并御登庸ニ相成候御人跡を拜見仕候得之彌以天意人心相叶大基礎之御確定無疑誠ニ以感仰欣躍之至ニ堪へ不申候且又世子君ニも御免職御快復之上東京府へ被爲 召候旨ニ而誠ニ以難有 朝命何様阿州公御同様諸詢ニ可被 仰付左候へハ御識徳御養育御國家御一新之御規模則茲ニ根柢可仕今日たとひ至急ニ御一新ニ相成候とも連茂上ニ君上被爲入世子君ニも今日丈之御見識ニ而漸夫迄之御一新ニ可相成候處諸詢より段々御識徳御増進被遊候得之後日之御一新拭目被奉期候事ニ御座候と恐悦感喜一日も早ク御登京奉祈候事ニ御座候

一六日御仕出之由ニ而事情書且御講習之件々等承知仕度御座候得共西京ニ滞居候哉未タ到着致し不申其御許森蛟島等斯道之根柢 皇國之柱石ニ可有之壹岐も出現之由ニ而珍重ニ奉存候矢鳥(源)書狀を先日到着ニ而御講習之一端も承知仕一々感服仕候

一世子君近日之御模様ハ益御宜敷虎殿薩行後段々言上も有之一層之御發揮ニ被爲在實ニ奉恐悦候虎殿ニ茂精神加倍誠意輔佐之確志腹心之任益體認ニ相成世子君ニも益御信用之御様子ニ被奉伺候小生よりも此根本之御輔佐水魚之一段のニ心を盡し申候間其餘急務之筋も有之候得共強而相止ミ申候事ニ御座候今度將監殿東下一條ニも虎殿ニ而無之候而ハ迎茂臨機之活斷も出來不申候間自ら任し而出張有之度との講習有之候得共世子君御動き被遊候時之有誰御輔佐可申越東下一條重々大任ニ而虎殿ならてハ可成事も無之候へ共迎も事後レニ相成居候ニ相違無之況也一時茂世子君を被離候而ハ相成不申候と新堀と話合申候事ニ御座候此意味合第一等之見御賢察可被成下候

一新堀近日之益元氣ニ而此節之余程様子も能相見申候只今通りニ而ハ必長命と喜ひ申候事ニ御座候牛鳥其外社中相替り不申候嘉悦ハ當時崎行ニ御座候神足不相替忠實毎々感心仕候

右之外得貴意候儀之海山御座候得共心緒紙中ニ盡し得不申右迄拜呈仕候い才之多太助典次より御承知可被成下候頓首

六月八日 八右衛門

一 平様

六月九日我藩保管する所の舊會津藩秋月梯次郎預替を達せらる

〔江戸京都來狀扣〕

其藩に御預ニ相成居候松平容保家來秋月梯次郎儀今般松平範次郎に御預替相成候間爲心得相達候也

但明十日受取人差遣候様範次郎に相達置候間同方より懸合次第引渡可申候事(長岡帶刀圖書より藩政府宛の書に十日受取渡相濟とあり)

六月九日

刑 法 官

細川越中守殿

公用人中

六月九日公議所議員一同紙幣を諸藩に下付して正貨を換納せしむるの不可なる旨を議長に建議し且つ會計官に對して種々の質議を發す

〔探索書扣、淺井書類〕

六月十二日東京發同廿七日着京渡邊藤助持參

今般金札御貸下ノ儀ニ付諸藩に仰出サレ候御布令並別紙拜見仕候處全ク三都商賣ノ爲ニ兩替被仰付姿ニテ農ヲ賤ミ商ヲ貴ヒ國本ヲ輕スル御所置ノ様ニ相見に且天下連年ノ疲弊ニテ府藩縣共豪農富商ヨリ括取イタシ候末ノ事ニテ出金ノ儀ハ覺束ナク若シ御受ケ申上候上ニテ調金不仕候ハ、管ニ違 勅ノ筋ニ相當ルノミナラス頑愚ノ民情疑心ヲ生シ海内ノ紛亂ニモ立至リ可申奉存候仰願クハ此邊ノ所深ク御考察在ラセラレ一日御布令相成候事ニテ候得共商賣ノ爲ニ兩替ノ儀ハ大英斷ヲ以御取消被遊度奉存候但外國通債等ノ皇國ノ榮辱ニモ關係スル様ノ儀ニ御座候ハ、尙説諭ノ致方モコレアルヘク奉存候微臣等區々ノ至情會議ノ上述言仕候宜御執奏奉願候

明治 二年

六月九日

議長 公 閣 下

議 目 一 同

一諸國ヨリ三都府下ニノ産物ヲ輸入スル者楮幣ヲ嫌ヒ正金而已ヲ持去候ニ付三都ノ金四方ニ散スルトノ儀如何ニ候ヤ諸國允方ノ者楮幣ヲ嫌ヒ候ハ相違モ有之間敷候得共都下ノ豪商亦正金ヲ隠藏シ楮幣而已ヲ以テ諸物ヲ買シト欲シ止ヲ得サレハ僅ニ正金一二分ヲ替テ是ヲ拂ト聞リ然レハ都下ノ正金四方ニ散スル凡五分ノ一二過サルヘキカ是等ノ所的實ノ御取調有之候而ノ上ニ候哉

一楮幣都下ニ行レテ遠國ニ行レス今都下ニ行ハルハ全數厚キ御説諭ノ上ニ而今ノ如ク行レシ也然レハ遠國ノ儀モ都下ノ如ク地方官カヲ盡シテ説諭セハ行レ難シト云フ可ラズ然レハ元方荷主トモ金札ヲ嫌ヒ候ハ、其地方官ニ而シテ説諭シテ可ナラン金札ヲ御下ケ正金ニ引替ノ御趣法ニハ及ハサルヘキカ是等ノ儀如何ニ候哉

一楮幣ヲ嫌フハ万姓ノ同情都鄙異ナル事ナシ然ニ今諸國ノ正金ヲ都下ニ集メハ都下ノ窮ハ可救トイヘトモ遠國僻邑ノ窮何ヲ以救シヤ此邊何等ノ御良法有之候哉

一先般楮幣ヲ以正金ニ替通用致候儀嚴禁之旨御布告ニ而漸正金同様融通相成候所今俄ニ官ニ上金必正金ヲ以可相納トノ命令有之候而ハ前後御布告齟齬イタシ大ニ民情ノ疑惑ヲ生シ百幣ヲ四方ニ洽ク行ントシテ却テ楮幣梗塞ノ道ヲ官ヨリ諸民ニ教ルナリ且先般御布告遠國僻地エハ未實徹セサル地多カルヘシ然ルニ今亦此御布告ヲ聞ハ邊鄙頑愚ノ民心洶々沸騰如何様ノ國害可生モ難計右等ノ邊モ御勘考ノ上ニ候哉

一都下ニ諸州ノ正金果シテ御取集相成候ハ定而引替所御取立ノ儀ト存候右等御主法如何ノ御手續ニ候哉

一引替所愈御開ニ候ハ、何年ヨリ始何年ニ終ルトカ期限急度御確定御表掲有之萬民ニ國家ノ大信御顯シ無之候而ハ不叶儀ト存候右等之邊如何御所置相成候哉

一當今諸州に充溢ノ濫惡賈金遠國ノ愚民ハ眞贋ヲ辨セス流用イタシ居候趣然レハ今般ノ上金中ニモ多々混合差出候ハ必

然右賈金ハ有司ニ而御摺斥相成候得ハ是迄模糊流用致シ居候者一旦眞贋分明是亦諸方ノ大困難大沸騰ヲ醸スニ可到ハ眼前ノ事ト存候御所置如何ニ候哉

一諸藩從來疲弊是迄正金入用ノ節ハ三都豪商ヨリ借入用辨イタシ來候儀ニ候間今般正金上納領内ニ而調達出來兼候節ハ矢張豪商ヨリ借入候外無之ニ付過當ノ高利足ヲ遺可申旨百方説諭イタシ候而モ豪商等當節都下ニ正金無之旨相斷出金不致節ハ各藩確ト差支可申右等ノ邊如何御見込有之候哉

一奥羽越諸州ヲ始昨年爭戰ノ地疲弊ヲ極メ田畑迄モ荒亡相成萬民流離顛沛漸今日ノ餓ヲ凌キ居候程ニ候間朝廷ヨリ十分御救助等モ可有之處却而正金引替上納ノ御布告有之候ハ、事實調達難行届ハ勿論愁苦悲怨ノ餘リ如何様ノ大沸騰相生シ可申モ難計ト存候右等如何様ノ御見込ニ候哉

一昨年轉封相成候諸藩歲入租稅ノ定額スラ取調相濟サル向多有之右ノ如キハ領内諸民に今般ノ御主意柄説諭イタシ候辭柄ニモ窮可申ト存候是等情實モ御承知ニ候哉

一先日御下問ニモ相成候外國通債巨萬ニ及候處官府御逼迫ノ折柄何ヲ以御返濟ノ道相立可申哉約リ全國ノ力ヲ以御償無之而ハ相叶申間敷然ルニ今引替被仰出候テハ右通債御償ノ道ハ如何ノ御目途可被爲在候哉

六月九日

議 員 一 同

右之通會計官に問合候ニ付御參考ノ爲奉差上候

六月十日青森口總督府參謀太田黑亥和太等及び各艦長を宮城に召し天皇親しく謁を賜ひ之を賞し且つ酒肴を下賜せらる

〔防長回天史第六編下〕

(第二次ノ箱館戰爭抄略)

六月ニ入り諸藩兵及ヒ諸艦船相繼テ東京ニ着ス 朝廷各々酒肴ヲ賜テ之ヲ賞シ其十日ニ山田(市之)黑田(了)曾我(德)

明治 二 年

八九七

増田(虎之)太田(友和)ノ各參謀及ヒ中島(四郎甲)赤塚(源六春)石井(貞之進)中牟田(倉之助)ノ各艦長ヲ宮城ニ召シ
天皇親シク調ヲ賜ヒ之ヲ賞慰シ且ツ酒肴ヲ賜フ尋テ戰役既ニ全ク終ルヲ以テ清水谷總督及ヒ諸參謀等ノ任ヲ解ク(略)

六月十日外國通債の談判結了して三箇年の延債に決す

〔明治元年正月ヨリ十二月迄〕
〔一〕新録 探索報告

秘説開書(抄出)

一外國通債惣談判濟ハ六月十日也
但三ヶ年ノ延債ニ決スト云フ

〔全書〕

(六月十二日附近藤彦作聞取書の一節)

一外國通債之儀者三ヶ年延之談判相濟候段大隈四位方噂有之由

六月十日日本藩議員鎌田平十郎等版籍返上の諸問案に對し諸侯の名稱を廢し知藩事に任するを非議す尋て此答議は天下の輿論に基き萬生の至情を訴へたるものにて一國一郡の私論にあらざる旨を進言す

〔探索書扣〕

六月十二日東京發同廿七日着渡邊藤助持參

版籍返上ノ趣旨政令一途ニ出ルノ外無之依テ府藩縣三治ノ制ヲ以テ知藩事ニ可任トノ聖問發臣等伏惟諸侯ノ名稱ヲ變更スル而已ニシテ封建ノ實ハ仍チ存スル乎將タ既ニ知藩事ノ名アルルハ副知事判事等ノ官ヲ設ケ諸侯ノ臣ヲ陸シテ朝

臣トスル乎臣等未タ聖意ノ所注ヲ窺ハスト雖モ果シテ然ラハ名ハ郡縣ニ非スト雖モ實ハ郡縣ニ異ナラス夫レ郡縣封建ノ得失古今説者紛紜未タ適當スル取ヲ知ラス臣等之ヲ以テ見ルニ封建郡縣ノ果シテ得失アルニ非ス之ヲ措施スル人如何ニ在ル耳古語ニ法者由人而行又有治人而無治法ノ謂ニシテ其道ヲ得ハ殷周ノ封建モ數十世ヲ保チ一タヒ人心ヲ失ヘハ秦ノ郡縣モ二世ニシテ滅フ其後ハ全ク郡縣ヲ用ユルアリ又郡縣中ニ封建ノ意ヲ寓スルモ有り而シテ天下ヲ保ツ長短汚隆アルモノハ郡封ノ故ニ非ス政治ノ理不理ニアリ今 皇州ノ勢ヲ量ルニ全郡縣ニ一定セハ許多ノ紛擾ヲ醸シ兵力モ亦孱弱ナラン一旦外寇ノ來ル何ヲ以テ之ニ應セン且又君臣上下ノ禮ヲ乘リタル藩主藩臣ヲシテ一朝比肩シテ共ニ朝臣トナラシメハ藩主ハ一國ヲ抑制スル權ヲ墜シ藩臣ハ上ヲ凌轢スル倨傲ヲ生シ互ニ相軋シ告訴訟獄ノ淹滯スルモノ民間疾苦ノ未タ伸サルモノ一時ニ紛興シ庶務盡ク 朝廷ニ蝟集シ官吏煩冗ニ堪ヘス天下騷然人情恟々萬一凶荒アリテ恤典舉ラス民怨ノ藩主執政ニ在ルモノ轉シテ天下ノ怨讎總テ 朝廷ニ洩ラン昨年維新以來兵馬倥傯事叢腫ナルモ今漸ク徳化草木ニ洽カラントスルニ向テ如此民庶ノ耳目ヲ驚シ重テ人言ヲ招クノ舉アラントス恐クハ得計ニ非ス窃ニ思フ三百年來諸國君臣上下ノ分定テ諸侯ハ永ク 王臣ノ義ヲ重シ藩臣ハ常ニ陪隸ノ名ヲ甘シ藩臣ハ主命ニ奔走シ藩主ハ 朝命ヲ奉承シ一旦賦役征伐ノ事アル敢テ違命セス 朝廷ヨリ直チニ命スルヨリ藩主ノ手ヲ經テ令スレハ官府ノ勞ヲ省キ事ヲ簡ニスル捷徑ニテ尊ハ益尊卑ハ益卑上下秩然始テ稔々ノ 天威モ立可シ今知藩事ノ名ハ即チ唐ノ藩鎮ノ類ニ近フシテ其害救フ可カラサルニ至ラン因テ諸侯ノ名號ヲ廢セスシテ國君人臣ノ義ヲ存シ其實ヲ責メ藩屏ノ職ヲ治メシメ府藩縣一轍ノ政令大綱ヲ立玉ヒ封建郡縣參錯シテ互ニ相維持スルノ實利ヲ兩收シ本末輕重偏倚ナク制令齊整シテ天下ノ事務凝滯ナク政權總テ 朝廷ヘ統一シ玉ン事良策主計ナラン瞻懷開襟ノ 下問ヲ蒙リ絨默ニ忍ヒス敢テ狂瞽ヲ獻ス誠恐誠惶頓首敬白

(署名議員左の如し)

- 肥議員 稻津 濟 岡 同 中川 潛 叟 尼ヶ 同 服部 清三郎

中村同	錦織四郎太夫	人吉同	新宮左太夫	秋田同	初岡敬次
肥後同	鎌田平十郎	吉田同	和田理兵衛	豫州同	中金稱平
菰野同	太田省吾	田安同	磯部寛五郎	岸山同	田代環
福本同	岩本範治	岩村同	岩松傳藏	古河同	恩田啓吉
松代同	望月歸一郎	鶴牧同	青木久兵衛	館林同	山本四郎
一橋同	田中哲輔	三春同	奥村權之助	小松同	宮田深藏
長南同	津川奇雲	長島同	伴勘九郎	勝山同	加藤右門
泉同	桑原政右衛門	龜田同	吉田權藏	麻生同	高木大之進
喜連同	秋元與助	濱田同	生田小膳	伊勢同	長尾熾次郎
丸岡同	有馬俊太郎	岡田同	加藤治平	富山同	入江事
丹南同	西村繼輔	龍野同	加集寛介	鴨方同	矢吹卯之次
新庄同	波多野治右衛門	府内同	樋口十郎右衛門	茂木同	熊谷貞藏
宇土同	岡普五郎	今治同	久松修理	田邊同	堀内謹右衛門
堀江同	内田理兵衛	土浦同	小林儀右衛門	小濱同	成田作右衛門
八戸同	中里行藏	山家同	清水八右衛門	高崎同	長坂鐵之助
館山同	松下直衛	足利同	善野司	櫻井同	近藤門造
高瀬同	笠間英之進	高島同	千野良之助	津同	平井東馬
大村同	長岡新次郎	平戸同	小關與右衛門	秋月同	白石李右衛門
中津同	生田四郎兵衛	小野同	黒石涯	川越同	小久江權兵衛

出石同	麻見達左衛門	秋田同	水野達三郎	尾州同	大津武五郎
飯田同	小林助右衛門	白杵同	若林勘兵衛	本庄同	小高牛三
太田同	精屋權兵衛	長尾同	増田貢	福智同	中野重明
喜同	園田保	久留同	田丸謙藏	三草同	那須金右衛門
森同	園田保	里同	田丸謙藏	麻田同	福井大助
水戸同	梶又左衛門	田邊同	松下嘉右衛門	下生同	増田鑄太郎
太田備	赤岸兵藏	西尾同	清水源次郎	作樂同	松崎元右衛門
中守同	赤岸兵藏	岐守同	清水源次郎	三日同	關小四郎
筑後同	早川與一郎	須坂同	北村經藏	沼田同	二階堂貢
蓮池同	成富新兵衛	生實同	京僧彦助	市同	關小四郎
小城同	持永治兵衛	完戸同	日置熊次郎	沼田同	二階堂貢
吹上同	佐々木淺右衛門	岡崎同	坂口音度	津度同	岡田眞次
日出同	帆足龍吉	黒石同	山崎傳	七日同	海野三雄
大田同	大田原高	栢原同	田邊確	岩槻同	高木東一
弘前同	櫻庭太次馬				

微臣等

謹承議長ノ説諭昨日建白スル處ノ事件大ニ藩論ト翻歸スルノ疑議アルト夫 朝命ヲ奉承スルハ藩主ノ職ニシテ國是ヲ商議スルハ議員ノ任也故ニ各藩ヨリ一人ヲ選出セシメ各藩ノ事情形勢ヲ考察シ其情實ヲ一院ニ集メ之ヲ熟議シ朝廷ノ萬機ニ裨益センコトヲ欲ス所謂四目四聰ノ設ニシテ官之ニ加ルニ法律ヲ議セシムルノ權ヲ與ヘ玉ヘリ昨日建白スル事件ノ如キハ即チ天下ノ人情向背ニ關係シ一タヒ其當ヲ失スレハ不測ノ紛擾ヲ釀成シ所謂財聚則民散スルノ禍ヲ未然ニ防クノ微衷敢テ一國一郡ノ爲ニ私スルニ非スシテ大ニ國國ノ人心ヲ收取シ 王室萬古不易ノ基ヲ立テント欲スルノ至

情ヨリ起ル是藩主ノ奉命ト議員ノ辨論ト並ヒ行レテ相悖ラサル美事ニシテ天下ヲシテ觀々ノ化ニ浴セシムルノ良法也
伏願クハ臣等議シテ献言スルトコロ敢テ一國一郡ノ私論ニ非サルヲ諒察シ天下萬生ノ情實ト海内今日ノ困乏トヲ熟考
シ玉ヒ海岳ノ量ヲ以テ速ニ臣等ノ言ヲ採用シ悉々ノ民情ヲ安シ玉ハンヲ願フ

六月十一日

六月十日日本藩秋吉又助書を由良洞水へ贈り官員改革減少のことを通報す

〔長谷川家文書〕

〔六月十日秋吉又助より由良洞水宛書面の一節〕

最早御承知も被爲在候哉先月中旬方朝廷御役人中御改正ニ相成議參衆を初九等官迄之處官員御減省ニ相成都合各官ニ
而百拾何人職職務被免此方様方罷出候而々ニハ山田五次郎東太郎平森尾母太郎青木彦兵衛兼弘安之助小生此六人被免
申候會計官中ニ而之外々ハ左之通

權判事ニ而

租税知事ニ而

堀

直 太郎

内 海 多 次 郎

營繕知事

福 雪

中 井 主 水

用度知事

佐 々 鐵 三 郎

喜多圖書此ハ御改正前ニ少々御免此外ハ判司事權判司事附屬等數多御座候各官右ニ准し申候免職御沙汰書左之通
云々有之辭表並出

勤仕中格別勵精之段神妙之事ニ候今度官員御減省ニ付徴上是迄之職務被免候事

五月

行

政

官

342
483

終

